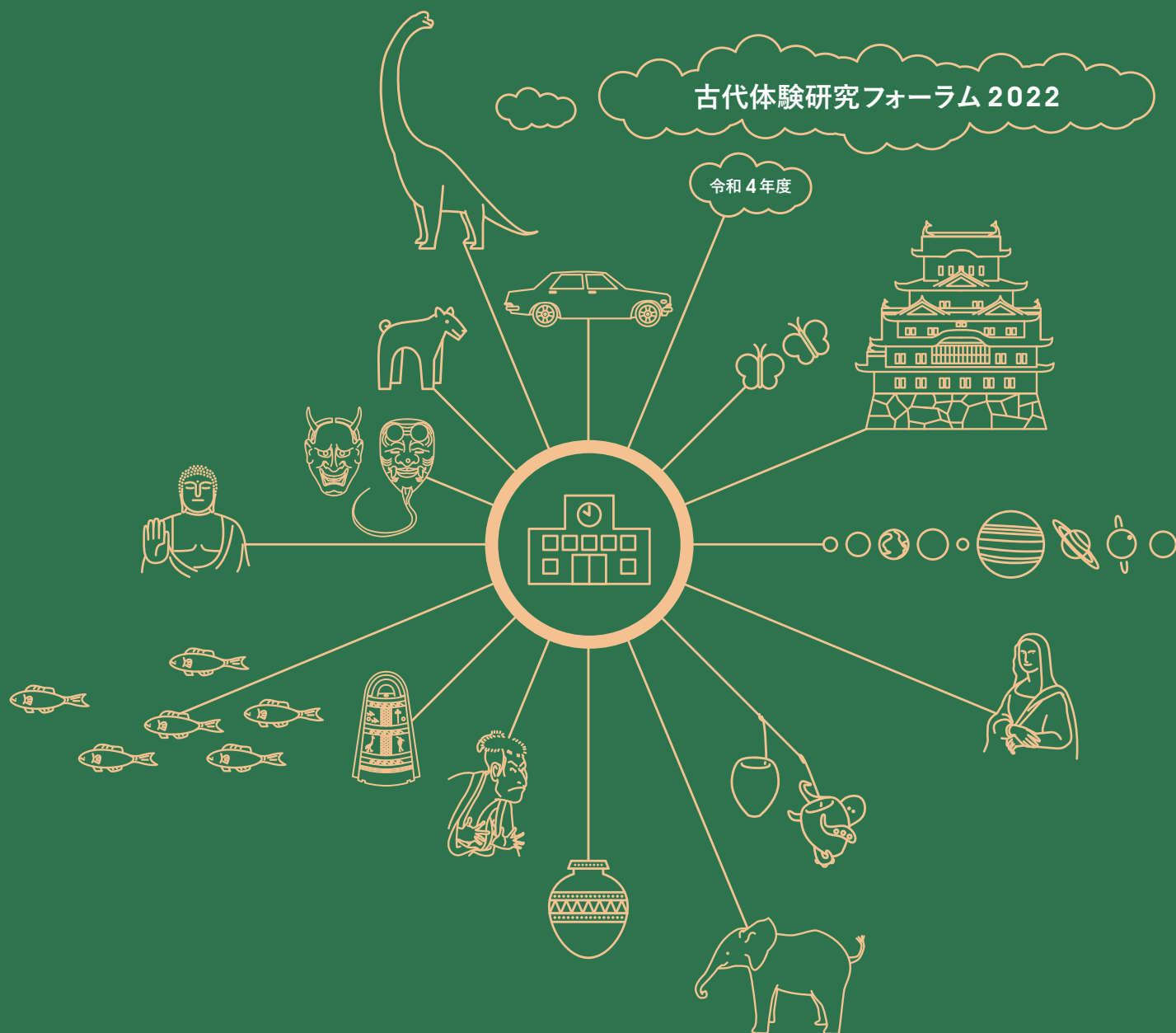


古代体験研究フォーラム2022

令和4年度



ミュージアムと学校向けプログラム

ほかの博物館や美術館は  
どうやっているのだろうか？

事業実施報告書



## 例言

本書は、兵庫県立考古博物館が令和5年1月28日（日）に実施した、古代体験研究フォーラム2022「ミュージアムと学校向けプログラム」の事業実施報告書である。

本書には、フォーラムのテーマに基づいた最新の研究成果を掲載している。また、報告資料中にある写真には、来館中の児童生徒や、著作権の存在する作品等が映り込んでいるため、本書に掲載のある図版等の引用者による転載や改変は原則として不可とする。

なお、各執筆者・所蔵機関の承認や許諾を得る場合には、この限りではない。

本書の作成は、個々の論考については各執筆者が行い、表紙とチラシの作成は兵庫県立考古博物館の北川里奈が行った。それら以外は、兵庫県立考古博物館事業部学習支援課が執筆・作成を行った。また、本書の版組・レイアウト等の編集は同課が行った。

作成にあたっては下記の方々のご協力、各機関のご高配を賜った。記して感謝する（敬称略）。

郷 泰典	東京都現代美術館
小林 誠	十日町市立里山科学館 越後松之山 森の学校「キョロロ」
八田友和	クラーク記念国際高等学校姫路キャンパス

# 目次

1. 開催企図	P.1
2. フォーラム実施から報告書刊行までの経過	P.2
3. 申込者数と申込者の傾向	P.3
4. オンライン配信の実施体制	P.5
5. 当日の運営とタイムスケジュール	P.6
6. 配布チラシ	P.7
7. 事例報告	
(1) 郷 泰典「美術館の学校連携 - 東京都現代美術館の場合 -」	P.11
(2) 永恵裕和「兵庫県立考古博物館の学校向けプログラム」	P.21
(3) 小林 誠「里山の小さな博物館と学校教育プログラム - 人と自然との関係性を自然科学館で理解する -」	P.29
(4) 八田友和「学校と博物館の新たな関りを模索する - 博学連携から地域総がかりへー」	P.34
7. トークセッション	P.44





# 1. 開催企図

古代体験研究フォーラム 2022 テーマ

## 「ミュージアムと学校向けプログラム」

博物館や美術館を始めとするミュージアム（以下、ミュージアムとする）にとって、来館した小学校や中学校、放課後等デイサービス（以下、学校等団体とする）に、何を提供するか、は大きなテーマである。ミュージアムによって、その数は様々であるが、兵庫県立考古博物館においては、年間の観覧者数の4割強を、学校等団体が占めている。

学校等団体に対して、観覧のみに留まらない教育普及手法の内容の充実・開発が、学校団体へのより良い学びの提供へとつながることは間違いない。従来より、ミュージアム全体で館種の特性に応じた教育普及手法が整備されている。その1つが、学校等団体に向けた体験等の、いわゆる学校向けプログラムである。

しかしながら、大半のミュージアムにおいて、学校向けプログラムは十分に整備されていると言えない現状がある（日博協 2020『令和元年度 日本博物館総合調査報告書』）。

当該調査によれば、いつでも提供できる「常設展に合わせたプログラム」を作成しているミュージアムは、全体の約20%、また「特別展や企画展に合わせたプログラム」を作成しているミュージアムは約10%であり、学校向けプログラムの整備には、まだまだ発展の余地があると言えることができる。

さらに付言すれば、館内で教育普及を担当する部課係・担当者の配置について、「部課係を置いていないし、担当者も決めていない」が全体の45%を占めている。

つまり、教育普及プログラムを整備・実施したいにも関わらず、教育普及プログラムの開発に専念で

きない、あるいは開発手法がわからないという課題がミュージアム全体に存在している可能性を示唆するものである。

このことは、「ほかの博物館や美術館は学校向け（児童生徒）に何を提供しているのだろうか？」という素朴な疑問に言い換えることができよう。

そこで、本フォーラムでは、特色ある学校向けプログラムを実践しているミュージアムが発表を行い、トークセッションを通じて開発手法や考え方のヒントを得ることを目標に上記テーマを設定した。

発表を行うミュージアムについては、特定の分野や館種を絞らずに、特色ある学校向けプログラムを実施している各館を対象とした。

分野や館種を横断することで、普段目にすることがない（経験することがない）他館の学校向けプログラムの実態やテクニックを知るだけではなく、ミュージアムが目指す教育普及について、より広く考えることも目標とした。

そして、以下の3点を参加者とともに学ぶ具体的な目的として設定した。

- （1）分野ごとの特性を活かしたプログラム策定のための考え方や、ミュージアムごとの個性を踏まえたプログラムの開発のためのヒント
- （2）学校向けプログラムの充実・開発のためのアイデアや実践手法
- （3）学校団体がミュージアムに対して期待していること

## 2. フォーラム実施から報告書刊行までの経過

### (1) 館内検討

令和4年10月から館内で、古代体験研究フォーラム2022のテーマ検討を開始した。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は横ばいとなっていたが、今後の感染状況の予測が立たない状況であったため、検討当初から対面による開催は難しいと判断し、令和3年度に引き続きオンラインで開催することとし、また令和4年度のテーマを「ミュージアムと学校向けプログラム」とすることを決定した。

### (2) 候補者選定・打合せ

10月半ばから、郷泰典氏（東京都現代美術館）・小林誠氏（十日町市立里山科学館越後松之山森の学校 キョロロ）、八田友和氏（クラーク記念国際高等学校）に電話で連絡を取り、同テーマに関連するフォーラムでの報告及びトークセッションへの参加の内諾を得た。

11月末には、東京都現代美術館及び十日町市立里山科学館越後松之山森の学校 キョロロへ趣意、両館で実施されている学校向けプログラムについて、発表者に説明・解説を頂きながら、フォーラムに向けた打合せと、施設の実地調査を行った。

### (3) 実施に向けて

12月にフォーラムのチラシの作成・配布を実施し、フォーラムにかかる情報提供を開始した。また23日からウェブフォームでのフォーラム申込みを開始した（1月23日締め切り）。

当日に向け、報告者3名と永恵で2度の事前打合せ会をオンラインで実施した。第1回目は12月28日に実施し、永恵が趣旨説明と発表報告を、郷氏・小林氏が発表報告を行った。第2回目は、1月16日に実施し、八田氏が発表報告を行い、報告者全員で、当日のトークセッションに向けた討議を行った。

1月20日から担当である永恵が新型コロナウイルス感染症に罹患したため、一部作業の中断を余儀なくされたものの、28日に無事にフォーラムを開催することができた。

### (4) 実施後から報告書刊行まで

2月2日には申込者に対し、アンケートの回答を依頼し、17名からの回答があった。

2月中旬から、報告者に報告原稿執筆及びトークセッションの校正を依頼し、3月中に取りまとめ、3月末に刊行した。

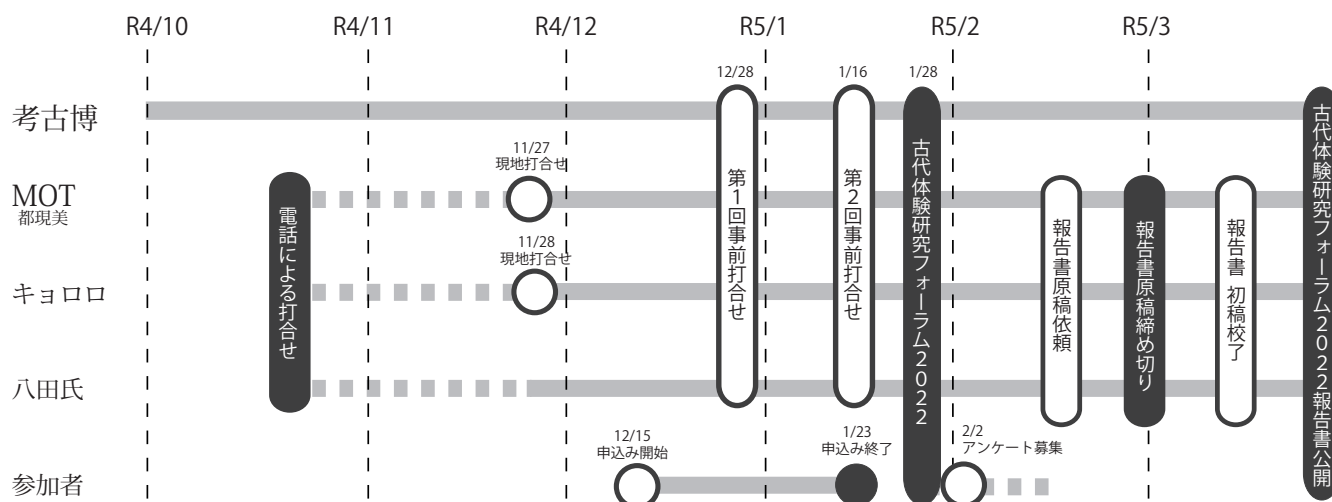


図1 開催までのタイムライン

### 3. 申込者数と申込者の傾向

#### (1) 参加申込み人数

今回のフォーラムでは、前述の通り、ウェブフォームによる参加申込みを令和4年12月15日から令和5年1月23日までの期間で実施し、81人の申込みがあった。

令和2年度のフォーラム（以下、R2）では、テーマが「つくる たもつ つなぐ 復元建物の「これから」を考える」であり、考古学を含む歴史系博物館のうち、さらに「復元建物」を所有している（所有しようとしている）施設や機関の職員を対象として実施し、65人の申込みがあった。

人数自体は3年間で最少だったが、当館では、初となるオンライン開催であり、また対象とした施設や機関自体が全国的にみても必ずしも多いとは言えず必然的に総量に規制がかかった中であつたことを踏まえると、必要十分な申込み数であつたのではないかとと思われる。

R3ではテーマが「知的障がい・発達障がいのある子どもも楽しめるワークショップデザイン」であり、R2とは対象的にミュージアム全体を対象としたテーマで実施し、112人の申込みがあった。

今回のフォーラム（以下 R4）では、テーマが「ミュージアムと学校向けプログラム」とし、R3と同じくミュージアム全体を対象とした。しかし、申し込み者数では、R3より少ない申込み人数となった。

社会全体での多様性の包摂や、「誰一人のこさない」を全体理念とするSDGsへの取り組みが声高に唱えられ、その実践が求められている現況の中で、R2のテーマは、特別支援教育の専門家や、障がいのある方を対象にワークショップを実施している大学・博物館の担当者から先進的な事例について聞くことで、インクルーシブなワー

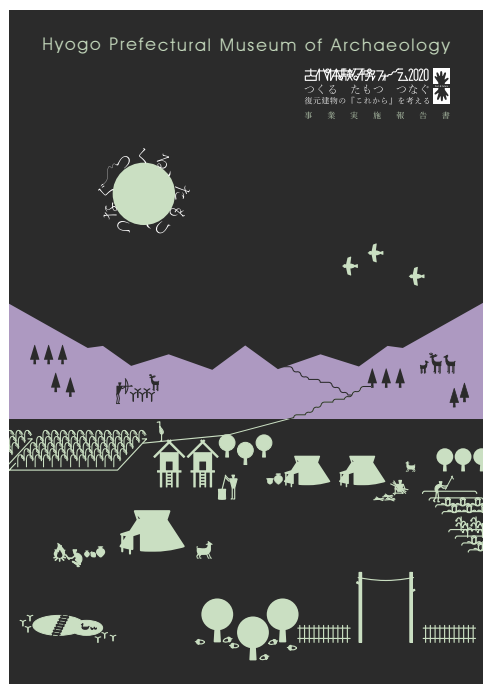


図2 古代体験研究フォーラム2020（R2）事業実施報告書  
（QRコードは報告書へのリンク）



図3 古代体験研究フォーラム2021（R3）事業実施報告書  
（QRコードは報告書へのリンク）

クショップを実践する方法や、博物館を利用しやすくするアイデアを得ることを目的とした、まさに時宜を得たテーマであったことから、オンライン開催とした3年間で最多の申込み人数となったと考えられる。

R4のテーマは、ミュージアムでの教育普及事業、特に学校向けプログラムに特化したテーマであったことから、社会的背景や情勢から発起する博物館への要請に直結しないといった面で、ミュージアムの職員に対して、訴求力が弱かった可能性がある。

その反面、比較的にコアなテーマであったR2と、より訴求力が高かったR3のほぼ中間となる申込み数があったことを鑑みると、R4のテーマに対し、ミュージアムの職員からの一定数以上の要望があったことは確実である。

## (2) 申し込み者の傾向

申込み者の所属する組織別割合から、R4を振り返る。なお、R2は、参加者が歴史系博物館及び埋蔵文化財センター等に限られるため、除外する。

図4が、R3・R4の申込み者の所属する組織

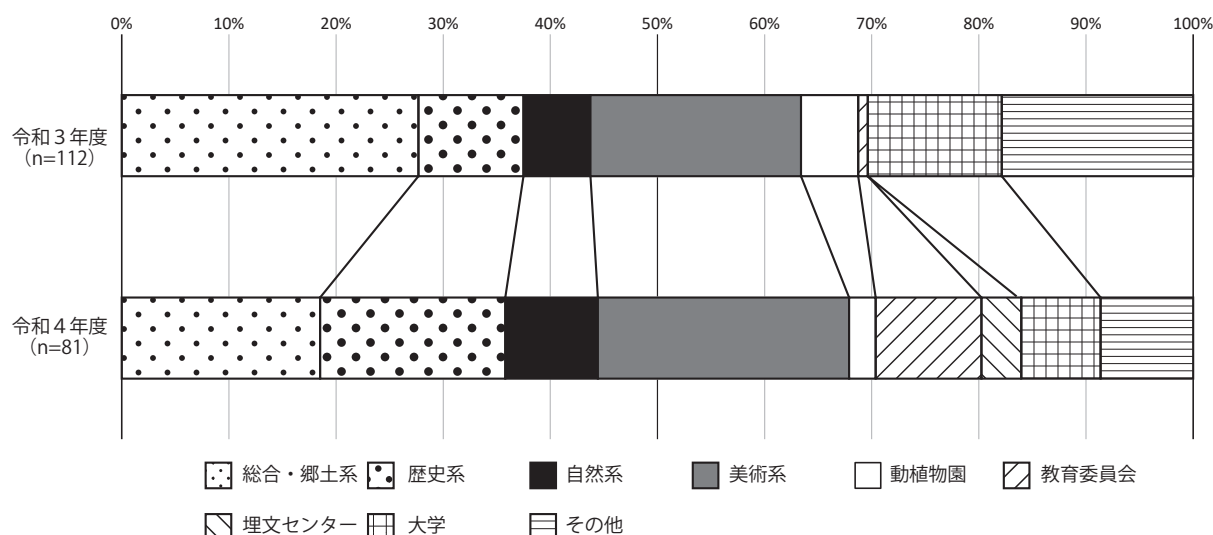


図4 参加申込者の所属割合（上段が令和3年度、下段が令和4年度）

別割合である。

ミュージアムの館種でみると、R3・R4ではほぼ同一の割合であることから、有意差はないと考えられる。ミュージアムでの教育普及にかかるテーマとしたことから、この点は首肯できる。

このような中で、R4の特徴として、ミュージアムではない教育委員会（市町教育委員会）や埋文センターが多いことを挙げることができる。1割という数字をどう捉えるかということ自体に問題があるが、少なくとも、いわゆるミュージアムに分類されない組織であっても、学校向けのプログラムに関心を持っている現状があると思われる。

具体的な所管事務まではデータの聴取を行っていないため断言はできないが、ミュージアムだけではなく公的セクターにおいても、学校向けプログラムの実施の必要性に迫られているのではないかと考えられる。

## 4. オンライン配信の実施体制

### (1) オンライン配信体制

本フォーラムは、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえ、対面ではなく、オンライン配信のみで行った。

ただし、配信時の通信エラー等のリスクを回避するために、発表者のうち、遠方である郷氏（東京都）と小林氏（新潟県）をオンライン上での参加とし、八田氏（兵庫県）と永恵を含む館職員は、当館からの参加とした。

### (2) 配信体制

実施にあたっては、当館体験学習室3を用い、室内に機材を設置し、メインスタジオとした。室内の機器レイアウトは下図の通りである。

人員は、司会とは別に機器操作・配信担当に1

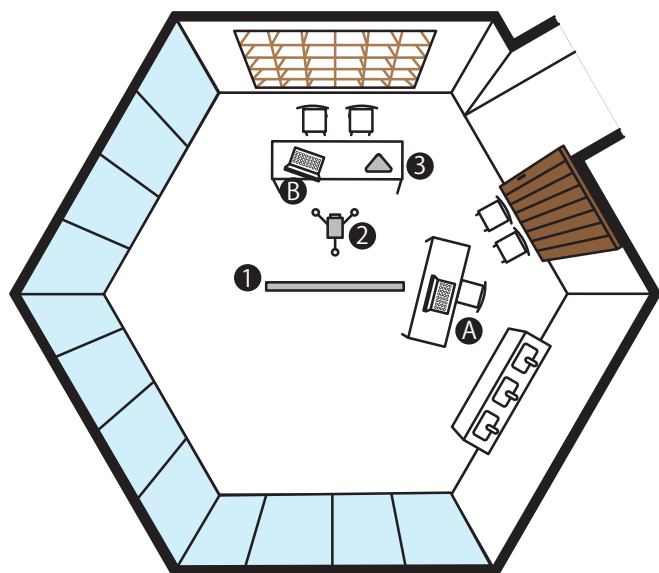
名、それら以外の配信にかかる庶務担当に1名を配置した。

また、通信状況を確認するため、別室にて職員複数名によって、視聴を行い状況の把握した。

### (3) 使用機器

パソコン以外の機器は、以下の通り。なお、パソコンはいずれも有線で館内インターネット回線と接続した。

- ・Web カメラ サンワサプライ CMS V50BK
- ・マイクスピーカー YAMAHA UNIFIED COMMUNICATIONS SPEAKERPHONE YVC-330
- ・モニター Panasonic TH65BF1J
- ・配信ソフト Cisco Webex



- A: ホスト PC      1: メインモニター  
B: 発表者用 PC    2: ウェブカメラ  
                         3: マイクスピーカー

※ 1 A・B とともに有線でネット接続

※ 2 1～3は A と有線接続し、オンライン配信のホスト機

図5 体験学習室3でのレイアウト俯瞰図



写真1 オンライン配信のようす①



写真2 オンライン配信のようす②



## 5. 当日の運営とタイムスケジュール

### (1) 当日の体制

前日（27日）に機器及び会場の設営を実施し、当日（28日）9:00からCisco Webexのミーティングルームを開設した。

報告者及び館長は、9:30から順次入室し、本番に向けた接続テストを実施した。

### (2) タイムスケジュール

◆ 10:00～10:10 開会挨拶（館長）

◇ 10:10～10:30 趣旨説明（学習支援課長）

◆ 10:30～11:10

「美術館の学校連携 ―東京都現代美術館の場合―」

郷泰典（東京都現代美術館学芸員）

◇ 11:10～11:50

「兵庫県立考古博物館での学校向けプログラム」

永恵裕和（当館 学芸員）

◆ 11:50～13:00 休憩

◇ 13:00～13:40

「探究学習で人と自然との関係性を博物館で理解する」

小林誠（十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ 学芸員）

◆ 13:40～14:20

「学校と博物館の新たな関わりを模索するー博学連携から地域総がかりへー」

八田友和（クラーク記念国際高校 姫路キャンパス）

◇ 14:20～14:30 休憩

◆ 14:30～16:30 トークセッション

◇ 16:30～16:40 閉会挨拶（副館長）

### (3) 当日の進行について

#### ①オンライン配信

令和4年度のオンライン配信ソフトがZoomからCisco Webexへと変更となったことで、通信環境の安定性や個々の参加者のログインに対し、当館側での開催実績が無いという点で不安があったが、進行途中での通信環境の悪化や、参加者がログインできないという不具合は見受けられなかった。

ただし、Zoomに比べ、ログインに複数手順が必要であったため、開始時間前後にログインを試みた参加者にとっては、参加が遅れるといったことも、主催者側パソコンでのログイン状況からは若干見受けられた。

#### ②チャット欄による質問書き込み

報告やトークセッションを踏まえた当日の質問や意見について、チャットでの書き込み方法とした。

不規則発言等により書き込み欄が荒れる懸念があったが、多数の質問や意見、自館での取り組みの紹介など、活発かつ適切な書き込みのみであった。これは、「顔が出ない」・「音声に伴わない」といった、参加者個人の視聴環境を暴露しない方法であったことが、各参加者のチャット欄への書き込みに対して心理的なハードルを下げたことが要因であると考えられる。

#### ③進行について

進行について、大幅な遅延等もなく、ほぼタイムスケジュール通りの進行を行うことができた。

## 6. 配布チラシ

1/28 2023  
Sat  
10:00-17:00  
オンライン

古代体験研究フォーラム2022



ミュージアムと学校向けプログラム

ほかの  
博物館や美術館は  
どうやって  
いるのだろう？

博物館・美術館（以下ミュージアム）の来館者の多くを占める学校団体  
はじめてミュージアムと出会う児童、生徒に  
私たちは何を伝えることができるのだろう…

学校団体に向けたプログラムを今よりも充  
実させるために、ミュージアムの枠を飛び  
越えて「今」と「これから」を一緒に考え  
てみませんか？

発表

特色ある学校向けのプログラムを実践している下記の  
ミュージアム学芸員に発表していただきます  
またミュージアムと学校連携の「今」についての研究に  
取り組んでいる教員の方にも発表していただきます

10:00-10:30 開会あいさつ / 趣旨説明

10:30-11:10 東京都現代美術館 郷 泰典 氏

11:10-11:50 兵庫県立考古博物館 永恵 裕和

13:00-13:40 十日町市立里山科学館 越後松之山  
「森の学校」キョロロ 小林 誠 氏

13:40-14:20 クラーク記念国際高等学校 八田 友和 氏

14:30-16:30 トークセッション

16:30-17:00 閉会あいさつ



Hyogo Prefectural Museum of Archaeology  
兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1  
TEL 079-437-5564 学習支援課直通

オンラインで開催します ふるってご参加ください  
無料・先着200名・事前申込み  
<https://www.hyogo-koukohaku.jp/>









## 7. 事例報告





---

---

美術館の学校連携  
— 東京都現代美術館の場合 —

郷 泰典（東京都現代美術館）

School Collaboration at Museums  
— In the Case of Museum of Contemporary Art Tokyo —  
GOH yasunori（Museum of Contemporary Art Tokyo）

---

---







1

## 本日の流れ

1. 東京都現代美術館について
2. 教育普及事業について
3. 学校連携について  
- 学芸員の出張授業をメインに -

3

## 自己紹介

- 中学生で、はじめて美術作品を購入。  
アートに目覚める。
- 大学で、理学部生物学科を専攻。  
（高校1種理科生物免許取得）
- 卒業後、ギャラリー、美術系出版社等に勤務。  
アートと見る人を“つなぐ”仕事をしたいと考える。
- 会社員をしながら通信教育で、学芸員資格を取得。
- 1998年頃からフリーで、ワークショップ・プランナーと名乗り活動。  
2007年より東京都現代美術館教育普及係長・学芸員として勤務。  
現在に至る。

2

## 1. 東京都現代美術館について

4

## 東京都現代美術館

開館：1995年

「現代美術」専門の美術館  
※2019年3月リニューアルオープン



5

## 昨今のキーワード（社会課題）

### ●SDGs

持続可能な開発目標。2030年を年限とする17の国際目標。  
→資材の再利用、美術館・博物館自体がSDGs

### ●やさしい日本語

外国人等にもわかるように配慮して、簡単にした日本語のこと。  
外国人が災害発生時に適切な行動をとれるように考え出された。  
→留学生、日本語学級との授業連携

### ●ウェルビーイング（Well-being）

「持続的な」幸せ、幸福な状態、充実した状態

8

## 東京都現代美術館の基本方針

### 1 文化の創造と魅力あるメッセージの発信

- ・現代美術の国内外への発信
- ・現代美術の保存と継承
- ・変容する価値観への対応



### 2 現代美術の普及と次世代の担い手を育む

- ・優れた作品等の鑑賞機会の提供
- ・現代美術の普及と子供たちの育成
- ・新進・若手芸術家への支援と創造拠点化



### 3 あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現

- ・バリアフリー、ホスピタリティを指向する
- ・アートの拠点化
- ・地域の核としての存在



6

## 収集作品数(2022年4月現在)

約5,500点

収集対象年代：1945年～現在（同時代）

9

## 昨今のキーワード（社会課題）

### ●バリアフリー

誰かにとっての障壁や障害（バリア）を取り除く（フリーにする）こと  
→館内外サイン、スロープ、点字案内、手話による美術館紹介動画、トイレ音声案内、車いす・ベビーカーの貸し出しなど

### ●ダイバーシティ

多様性（性別、人種、国籍、宗教、年齢、学歴、職歴など）  
→パンフレット類・HPの多言語対応、外国人団体対応、高齢者対象の企画など

### ●アクセシビリティ

目的や情報へのアクセスの容易性  
→HP、館内外サイン、手話通訳の導入（情報保障）、点字・触覚マップなど

### ●ソーシャルインクルージョン（社会包摂）

一般的な集団から除外されていた人々も巻き込んでいくこと  
→不登校児、病院に入院している子供達（美術館にこない人たち）、日本語を母語としない子供達へのやさしい日本語対応など

参考：（株）19

7

## あつかうジャンルも様々



10

## 東京都現代美術館の学芸員の役割

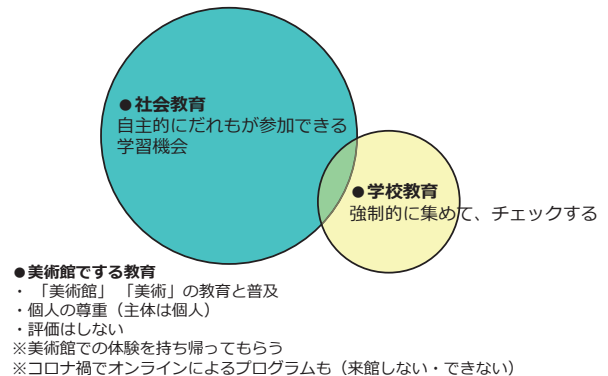
- ・ チーフキュレーター 1名  
…全体統括
- ・ 企画展担当 10名  
…企画展を作る
- ・ コレクション担当 4名  
…作品の収集・管理、コレクション展を作る
- ・ 教育普及担当 3名  
…展覧会や作品、アーティストと見る人をつなぐ

合計 18名 (うち男性2人)

※2023年1月現在

11

## 社会教育施設としての美術館



14

## 美術館の展覧会の種類は2つ

### コレクション展

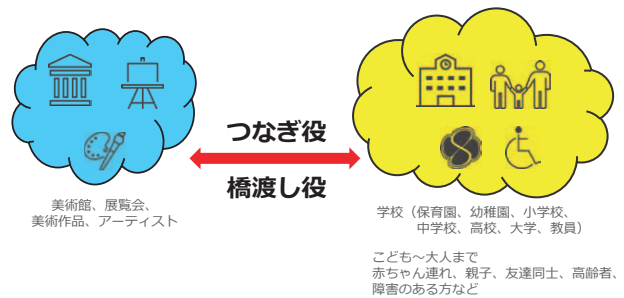
…美術館が持っている作品を展示。  
=作品との「付き合い」を深める

### 企画展

…テーマを決めて、テーマに沿った作品を展示。  
作品は新作であったり、他の美術館や作家、コレクター  
などから借りることも。  
=初めての作品との「出会い」

12

## 教育普及の仕事



15

## 2. 教育普及事業について

13

## 東京都現代美術館の教育普及プログラム

普及プログラム・・・こども～大人まで楽しめるプログラム



スクールプログラム・・・学校教育と連携したプログラム



16

## 普及プログラム

### 子どもと大人のための一般参加プログラム※

1. ギャラリークルーズ
2. ワークショップ
3. MOT美術館講座
4. ギャラリートーク

※プログラム=事業名称



17

## スクールプログラム

案内パンフレット



毎年、年度替わりに都（島しょ地域含む）の小・中・高・特別支援学校約2500校に配布

20

## 普及プログラム

### 1. ギャラリークルーズ



### 2. ワークショップ



### 3. MOT美術館講座

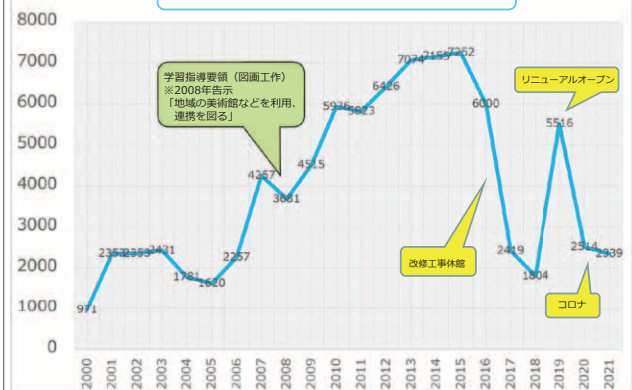


### 4. ギャラリートーク



18

## スクールプログラム参加人数の推移



21

## スクールプログラム

### 学校教育と連携したプログラム

1. ミュージアム・スクール（学校団体鑑賞の受け入れ）
2. 先生のための特別研修会
3. アーティストの1日学校訪問
4. 授業用教材の貸し出し



19

## スクールプログラム

### 1. ミュージアム・スクール（学校団体鑑賞の受け入れ）

作品鑑賞プログラム



22

## スクールプログラム

### 1. ミュージアム・スクール（学校団体鑑賞の受け入れ）

#### 特徴

- 学芸員との対話の重視
- 作品素材などツール等を用いた体験的作品鑑賞

23

## スクールプログラム

### 1. ミュージアム・スクール（学校団体鑑賞の受け入れ）

#### 受け入れの流れ

#### 1) 電話による予約受付

来館の2週間前まで！

#### 2) 美術館にて、事前打合せ

展示室の下見（導線、作品）、具体的な内容決め

#### 3) 当日の来館

2～3グループに分かれ、教育普及担当学芸員と一緒に展示室を巡る（30～40分）※自由鑑賞も加味

26

## スクールプログラム

### 1. ミュージアム・スクール（学校団体鑑賞の受け入れ）

#### トークでの心がけ

- 1) 観察
- 2) 想像
- 3) 対話  
（双方向、コミュニケーションの促進）

24

## スクールプログラム

### 2. 先生のための特別研修会

- ティーチャーズウィークの開催（美術館主催）

- 教員による自主研修会の受け入れ

※東京都には図工専科教員が配置されている



27

## スクールプログラム

### 1. ミュージアム・スクール（学校団体鑑賞の受け入れ）

#### 育まれる力として期待できること

- 1) 思考力
- 2) 判断力
- 3) 表現力

25

### <先生のための特別研修会>

#### ティーチャーズウィークについて

##### （目的）

- 1) 学校教員の美術館利用のきっかけづくり。
- 2) 教員自身の自己研鑽の場。
- 3) 団体鑑賞利用等、学校と美術館の連携を築き上げる。

##### （内容）

- ・都内の小・中・高・特別支援学校の教員を対象とした特別研修会。
- ・開催中の企画展及び「MOTコレクション」展を約1週間の期間限定で自由に無料で観覧いただく。

※希望のあった教員には、学校長宛てに出張依頼状を発行。

※コロナ前は、展覧会担当学芸員及び教育普及担当学芸員によるレクチャー開催日を1日設けていたが現在は中止。

##### （主催）美術館

##### （実績）毎回数200名程度が利用



28



## スクールプログラム

### 3. アーティストの1日学校訪問

- ・毎年コレクション作家から1名を選定。
- ・都内の小・中・高・特別支援のうち6校を訪問し授業を実施。
- ・創作技法などのテクニックを教えるのではなく、アーティストの考え方や表現に触れてもらう授業。

29

## 学校連携のための心がけ（1）

「美術館の言葉」を「学校の言葉」に  
置き換える



学習指導要領の理解

32

## スクールプログラム

### 4. 授業用教材の貸し出し

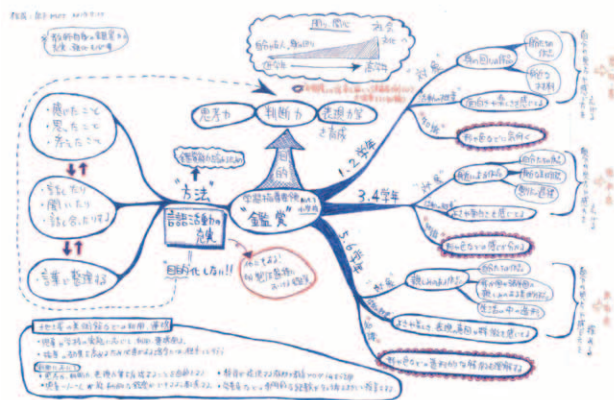
#### ●DVD

- 「美術館ってどんなところ」（15分）
- 「アーティストに会いに行こう」（20分）
- 「アーティストに聞いてみよう!」（30分）
- 「アーティストという生き方」（30分）



30

## 図画工作学習指導要領（鑑賞）のマインドマップ化



33

## 3. 学校連携について —学芸員の出張授業をメインに—

31

## 学校連携のための心がけ（2）

### 1) 目的は？（何がしたいのか？）

※「お任せします」が一番困る

### 2) 相談に（も）のる

※困っていることから連携がはじまる

### 3) オーダーメイド：

校種や児童・生徒の実態を探る

※パッケージ化されたプログラムはほぼない

※同じ物でもアレンジされていく

※うまくいったものは応用する

34



## プログラムテーマの抽出

「学校課題」から探りを入れる  
(教員の意識、キャリア教育…etc)

(1) 「美術館の機能」から発想  
(収集・保存、調査・研究、展示・普及)

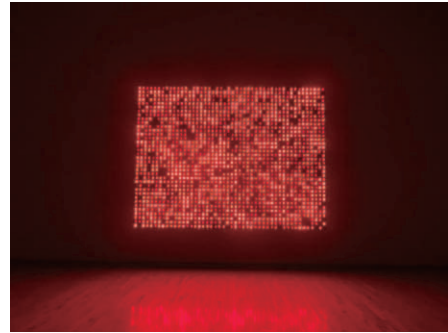
(2) 「コレクション作品」の活用

35

## (2) 「コレクション作品」の活用

宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係を結ぶ それは永遠に続く》  
1998年



38

(1) 「美術館の機能」から発想  
(収集・保存、調査・研究、展示・普及)

### ●校内展覧会 (キュレーション体験)

こどもたち自身が児童作品からテーマを設定し、  
展示作業まで行った。ギャラリートークも実施。



36

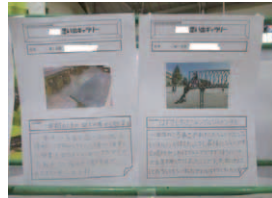
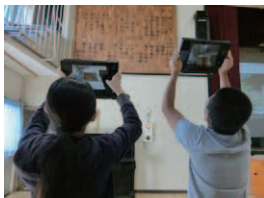


39

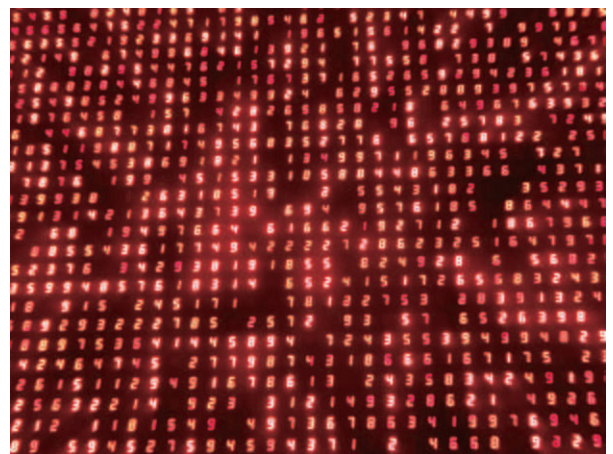
(1) 「美術館の機能」から発想  
(収集・保存、調査・研究、展示・普及)

### ●6年間の思い出の場所を記録 (タブレット活用)

美術館の機能のひとつである「保存」についてレクチャーし、  
思い出の場所を記録した。



37



40



41

作者・宮島さんのことば

「世の中には、  
漢字が得意な人、スポーツが得意な人、計算が早い人、  
図工が得意な人、いろいろな人がいます。  
みんな一緒だと面白くありません。違うから面白い。  
そうした人が全部集まって、  
美しいハーモニーができていきます。

時間も流れています。  
時間とは「心」の時間です。  
楽しい時間は早くすぎるし、  
つまらない時間は遅く感じます。  
一人ひとりの中の心の時間（スピード）も違います。」

44

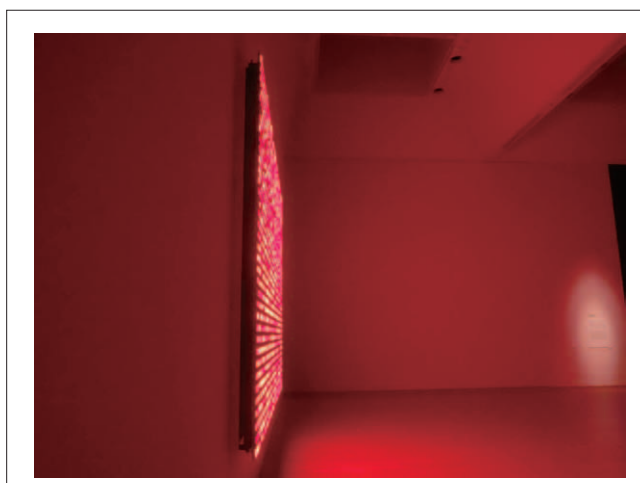


42

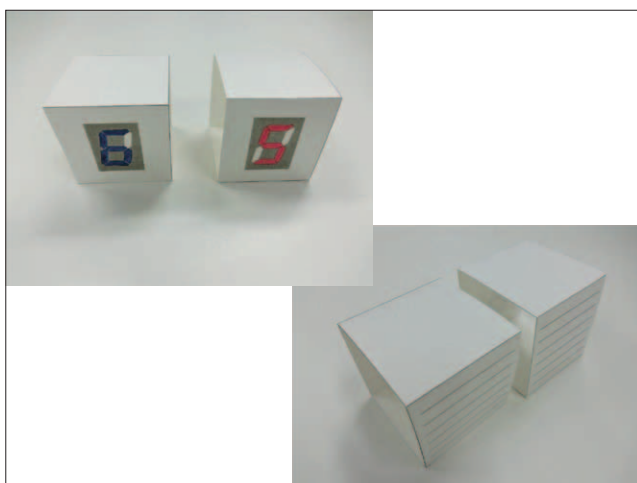
自分を“数字”であらわそう！

好きな“数字”  
大切な“数字”  
…などなど

45



43



46



47

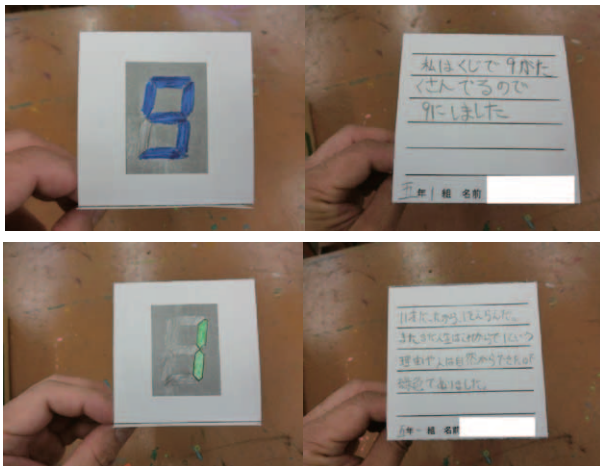
## 美術館から提案した事例

コロナ禍での遠隔授業

— 出会わないで、出会う方法 —  
「分身による鑑賞体験」

2020年度実施（小学校）

50

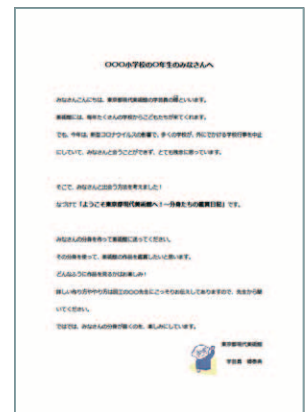


48

アナログ版

-方法-

手紙による子ども達への  
参加呼びかけ



51

## 連携した教員の声

- ・ **新しい視点**の題材を考えてくれた。
- ・ こちらの意見や考えをしっかりとくみ取っていただきながら、本校の**児童の実態に合った授業プラン**と一緒に丁寧に考えていただけた。
- ・ こちらの**見えていないこと**もはっきりさせながら、進めることができた。
- ・ **鑑賞と表現の往還**がコンパクトに展開する授業の設定ができていた。
- ・ 子どもたちは、**自分の表現を学芸員に価値付け**されたり、**疑問をその場で共有**できたりしたので、学びの楽しさをより一層感じていた。

49



52





53



54

ご清聴ありがとうございました。

55

---

## 兵庫県立考古博物館での学校向けプログラム －大中探検隊・土器にふれよう・学校展示－

永恵 裕和（兵庫県立考古博物館）

Education programs in Hyogo Prefectural Museum of Archaeology

－ Quiz rally in Oonaka archaeological site, Let's touch the real Yayoi pottery, Petit Exhibits at school －

NAGAE Hirokazu (Hyogo Prefectural Museum of Archaeology)

---

### 1. はじめに

本稿は、1月28日に実施された古代体験研究フォーラム2022「ミュージアムと学校向けプログラム」の報告である。できる限り当日の発表内容に沿う形での報告を目指しているが、当日の発表の都合上挿入したものもあるため、必ずしも当日の発表通りになっていないことをご容赦頂きたい。

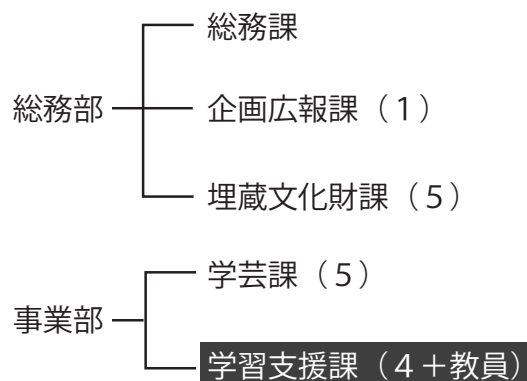


図1 兵庫県立考古博物館の組織（数字は専門職の数）

成に寄与することであると定めている。

県内で出土した考古資料の優品を展示するだけでなく、土器パズルや発掘プール、館ボランティアと協働した「古代体験講座」など、当時まだ歴史系博物館では一般的ではなかった「参加体験型」の博物館として、歩みをスタートさせた。同時に、埋蔵文化財調査事務所の持っていた行政部分の機能（埋蔵文化財の発掘調査や保護）も継承したことから、発掘調査で自ら展示品となる出土品を収集し、それを展示に供するといった点でも全国でもあまり類を見ない博物館である。

当館では、現在図1のように2部5課からなる職制を敷いている。事務方である総務課を除く4課に、考古学を専門とする職員を配置し、当館が果たすべき業務に当たっている。私の所属する学習支援課は、学芸課と同じ事業部に所属し、学校団体対応やボランティア養成、また古代体験フェスティバルの実施など、いわゆる「学芸課」が担う事務以外を分掌されている。

当課の特色として、専門職員以外に教員の配置がある。これは、学校等団体との折衝や、実際の学校

### 2. 兵庫県立考古博物館の体制・学校等団体の受入体制について

#### （1）兵庫県立考古博物館での教育普及の位置づけ

兵庫県立考古博物館（以下、当館とする）は、加古郡播磨町大中に位置する県立の博物館である。平成12年の県文化財審議委員からの提言を受け、神戸市兵庫区荒田町に所在した「兵庫県埋蔵文化財調査事務所」を発展的に改組し、平成19年（2007）に開館した。

当館は、本物の遺跡・遺物に触れることによって得た、先人たちの「知恵」と「生きる力」への「驚き・発見・感動」を身近な歴史文化遺産への関心へと結びつけ、地域文化を再発見するきっかけをつくり、地域文化に根ざし、愛着と誇りがもてる21世紀における新たな「ひょうご文化」の創造に寄与することを基本理念としている。この理念に従って、当館の使命は、県民との協働により考古学の手法で地域文化を探究し、その成果を双方向的な展示・体験学習等を通じて県民と共有するなかで、地域文化の再発見のきっかけづくりを行い、新たな「ひょうご文化」の創造と愛着と誇りに満ちた地域社会の形

等団体の受入が予想されたことから、開館以来、職位は異なっているが、教員籍の職員の配置が設けられている。

## (2) 受入れ体制と来館する学校等団体の特徴

図2は、令和4年度の学校等団体の受入の流れを、アクターによって分けて整理したものである。左側が学校等団体、右側が当館、そして上から下に下がると、申し込み～当日の来館に至るまでのフェーズごとの両者の動きを示している。

各アクターの動きの大略は以下の通りとなる。まず学校等団体が来館を希望する日時や体験プログラムをウェブから申し込む。これを受け、当課でタイムスケジュール（当日の行程表）を作成し、学校等

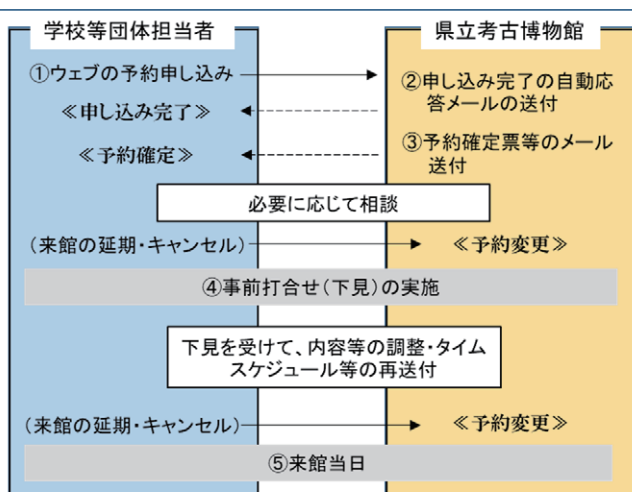


図2 学校等団体の受け入れフロー

団体へ「予約確定票」とともに送付する。後日別途設定した事前打合せ（来館・オンライン含む）を実施し、タイムスケジュールの確認や学校等団体の要望や状況を把握し、当日の来館を迎える。

また、令和3～4年度では、受入時間について、館内見学時間を基準としたA～C枠の時間枠を設定している。以前は、来館する学校等団体の校外学習の時間に合わせ、館内収容人数や学習内容を考慮しながら、受入を行っていたが、令和3年度からは新型コロナウイルス感染症対策の観点から、展示室内での密を回避し、他校の児童との交流による感染予防を勘案して上記の時間枠を設定した。

図3は、令和4年から平成29年度までの6年間の学校当団体の利用人数を示す。当館を利用する学校等団体の利用上の特徴として、①1学期（4～7月）の利用率の高いことと、②入館者数に占める学校等団体の来場者が多いこと、がある。

図4では、令和4年度の学校等団体の校種別、学年別の割合を示している。75%が「学校教育法1条に規定される団体」、いわゆる学校であることがわかる。さらに図3では小学校6年生がその大半を占めていることがわかる。

これらのことから、当館での学校等団体の利用は、小学6年生の春期校外学習の利用に供されていることが特徴といえることができる。この特徴は、データを提示していないが、開館以来変わっていないことから、言い換えるならば、「伝統的に」当館での学

年度	学校等団体人数								観覧者数				【参考】 入館者数
	1学期		2学期		3学期		合計		1学期	2学期	3学期	合計	
令和4	7,703	43%	1,973	7%			9,676	21%	17,833	27,302		45,135	69,115
令和3	1,746	20%	857	15%	164	4%	2,767	15%	8,551	5,563	3,931	18,045	56,369
令和2	312	8%	1,063	13%	302	9%	1,677	11%	4,000	8,062	3,353	15,415	45,730
令和1	8,813	42%	993	7%	508	17%	10,314	27%	21,142	14,199	3,026	38,367	115,983
平成30	9,571	42%	1,006	7%	654	14%	11,231	27%	22,717	13,585	4,699	41,001	113,487
平成29	10,483	45%	1,173	10%	988	18%	12,644	31%	23,049	12,324	5,520	40,893	109,838

※学校等団体人数の%は、観覧者数に占める学校等団体人数。

図3 観覧者数に占める、学校等団体の人数割合

習プログラムは、小学校6年生をメインターゲットとして作成されているということができる。

### 3. 当館で提供するプログラム

#### (1) プログラム一覧

2(2)のデータを踏まえた上で、当館では大きく、A) 学校が博物館へ向かうもの、B) 博物館が学校へ向かうもの、の2種類の学校等団体向けプログラムを実施している。より具体的に言うと、前者では、校外学習に伴う①館内見学と②学習プログラム、後者では①学校展示と②出前授業をプログラム名や事業名としてあげられる。当日の発表と本稿で報告の対象とするのは、A②学習プログラムと。B①学校展示である。

#### (2) 学習プログラム

##### ①学校向けプログラムの概要

現在の学校向けプログラムには、表5にある7つのプログラムがある。令和4年度は、これらのうち、「1 大中探検隊」と「7 本物の土器に

ふれよう」の2プログラムのみを提供している。

コロナ禍以前には、すべての学習プログラムを提供していたが、令和元年からは、クラフト系のプログラムとなる、「勾玉づくり」「石包丁づくり」「火起こし体験」「組みひもづくり」は、プログラムの特性上、体験者と指導者（館職員及びボランティア）の接触が多いことから休止している。また「大中遺跡を巡ろう！」では、当館が復原している竪穴住居跡の内部で各種体験を提供するものだが、竪穴住居内が密閉環境で、大人数が入ると密になることから、クラフト系プログラムと同

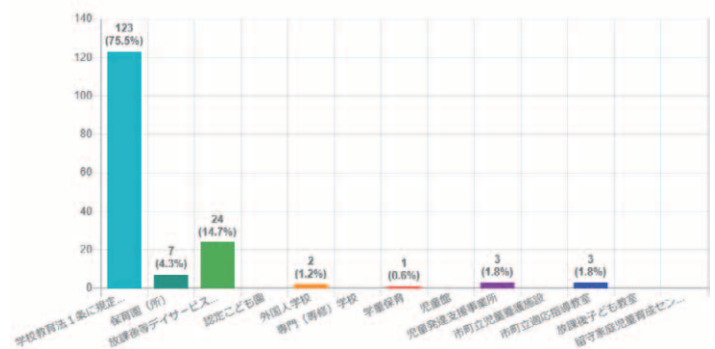


図4 令和4年度に受け入れた学校等団体の種別割合

2 小学生以上対象の学習プログラム一覧					
	プログラム	内容	料金	所要時間	定員
県立考古博物館	1 大中探検隊 (生徒グループ単位)	地図をたよりにグループで大中遺跡公園内の竪穴住居を巡りクイズを解きます	無料	30分～60分	6クラスまで (4クラス以上は交代制)
	2 大中遺跡を巡ろう！	新型コロナウイルス感染防止のため当面の間休止中			
	3 まが玉づくり				
	4 石包丁づくり				
	5 火起こし体験				
	6 組みひもづくり				
	7 本物の土器にふれよう！	本物の弥生土器に触ります	無料	30分	2クラスまで 3クラス以上は交代制

図5 令和4年度の学校等団体向けの体験プログラム一覧

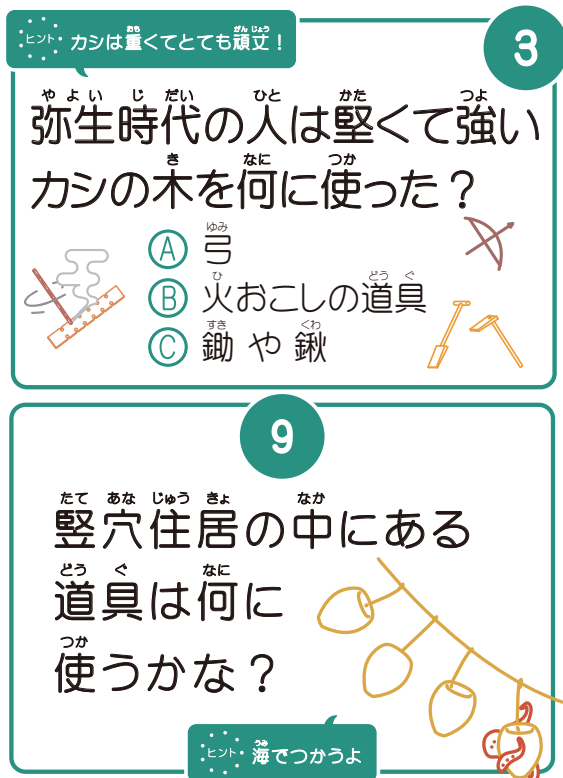


図6 大中探検隊の問題の一部

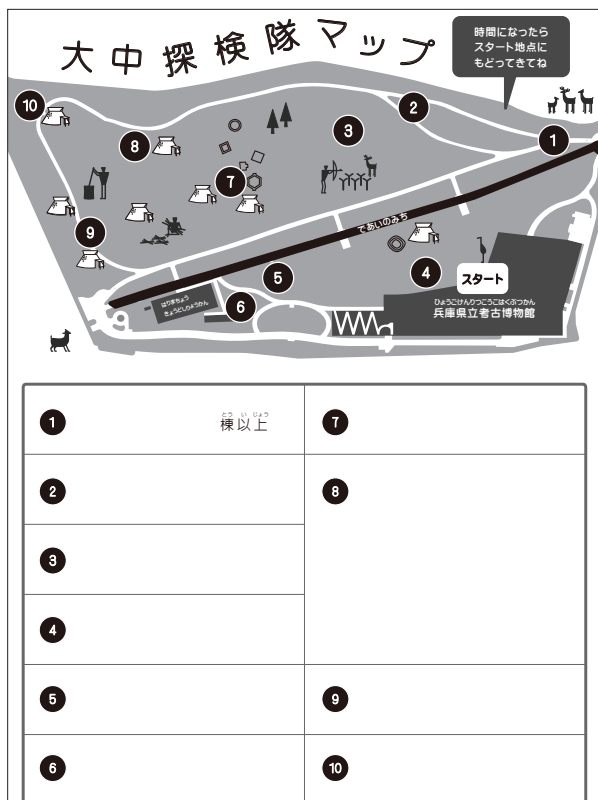


図7 大中探検隊の解答シート

じく休止している。

## ②大中探検隊

当館に隣接する、「播磨大中国古代の村（大中遺跡公園）」を利用したクイズラリーである。約45,000㎡（小学校の校庭4～5個分）の面積がある「播磨大中国古代の村」を舞台に、栽培している樹木や、当館施設あるいは当館が復原している堅穴住居の中に設置されている10問の問題を、参加者自身が解いていくものである。

問題は、国指定史跡大中遺跡を対象としていることから、図6のような弥生時代の事象を主な問題としている。史跡の説明看板を読み解くものや復原品した木製品を見ながら考えるもの、堅穴住居の中に立ち入って、構造材を数えたりするものなど、公園全体を踏査しながら解いていくものであり、いずれも単純なQ&Aではなく、参加者が周囲の環境や館内見学から学んだ知識から想像を巡らせたり、思考したりする問題としている。

また、大中探検隊では、図7のような問題の場所を記したイラストマップを配布している。参加者の体験利用の便宜を図るとともに、時間内に地図を読み解いて、ゴール地点へ帰着するために配布をしている。

利用実績からは、1時間の制限時間に対して、早くて45分、遅くて1時間で、体験した児童は無事に帰着している。

帰着後には、学校等団体の行程にもよるが、学芸員による解説付きの答え合わせを実施している（行程上の余裕が無い場合には、上記の解説・答え合わせは省略し、学校で実施することとしている）。

## ③本物の土器にふれよう

館内で、当館が所蔵する資料である弥生土器の優品や破片を使って行う、対話を用いた鑑賞プログラムである。ここからは、コロナ禍前の姿を記しておく。

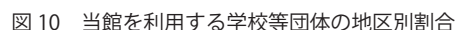
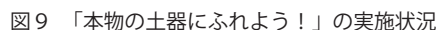
体験する児童を10人ごとに1グループに編成し、机の中央においた完形の弥生土器を、学芸員



コロナ禍以後は、1つの土器に対してスタッフを含めて11人が1つの机に集うことが、3密となることが予想されたため、当館の講堂で、完形の土器を前に1～2個を置き、順繰りに観察を実施する形態に改めた。プログラムの内容を変更したものの、完形の土器に触れることで、「元の形を知ってもらふ」ことを目的とし、より詳細な観察は、各児童の手元に配った、復原していない本物の土器の破片を用いて行っている。

A) 実施校の選定手法は、「出前博物館」では、より広く全県の小学校からの要望に応えるため、県下41市町の文化財行政主管課を通じて、域内の小

図8 「本物の土器にふれよう！」鑑賞シート



-25-



図 11 「学校展示」の実施状況

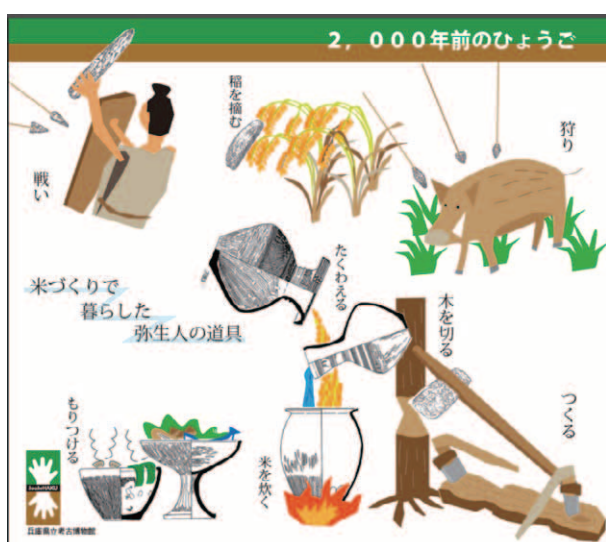


図 12 「学校展示」の基幹展示紹介イラスト

について内諾を取り付けた上で、実施校を確定した。

その結果、令和4年度は、当館の利用実績がある小学校が多い地域の隣接地である三木市・小野市に所在する小学校7校が対象となった。

またB) 展示内容についても、「出前博物館」では展示場所である各学校で、全ての展示内容を入れ替えた、「フルオリジナル」な展示を行っていたが、パネル等の作成や展示品の選定に大きな時間が必要となることが課題であった。これを踏まえ、「学校展示」では展示内容を2つに分け、図11左側のように展示ケースの2/3を、「2,000年前のひょうご」というタイトルで、社会科の教科書に記載があ

り、県内での調査事例が豊富な弥生時代についての展示にしている。この、いわば全校共通の「基幹展示」に対して、残りの1/3を「ご当地展示」として、校区内で県教育委員会の調査によって見つかった出土品（博物館資料）を展示することになっている。

学校ごとのオリジナルな展示がケース内で占める割合は、「出前博物館」よりも少なくなる一方で、展示に供する博物館資料の精選とパネル作成の省力化が図れ、事業の持続可能性を高めているものと当課では判断している。

なお、「出前博物館」も「学校展示」も、それぞれの校内での展示で全てを語りきるものではなく、あくまで来館を促す導入と当館では位置づけている。令和4年度では、2～3学期（9～翌3月）までの期間に7校で実施し、うち年度内に1校の来館に結びつけることができた。

## 4. 学習プログラム策定にあたって

### （1）プログラム策定にあたっての基本的な考え方

#### ①「（本物に）触れる・体感する」

プログラム策定に当たっては、一番重視しているのは、「（本物に）触れる・体感する」ことである。当館で提供している7つの学習プログラムのどれもが、参加者自身が何らかの体験を行うものとなっている。これらはプログラムを体験した結果として、考古学からみた歴史にかんする知識を得るだけではなく、参加者が自ら考え思考し、クラフト系であれば製作に試行錯誤するものである。社会科といった特定の科目に対する学習ではなく、体験した児童・生徒が自分自身の経験として受け取る、学びや気づきを重視している。

これは、当館が考古学をテーマとした博物館であることも影響している。明治時代に日本で初めて考古学講座を開講した濱田耕作は自著の中で、「考古学は過去人類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究する」学問と定義しており、この定義は現在でも有効だ（濱田1922）。この物質的遺

物とは、端的に当館に収蔵されている考古資料や埋蔵文化財が該当する。それらの資料には、製作した当時の痕跡が残っていることが多く、鑑賞・観察の際には、物質資料の技術的側面に注目することが多いことは想像に堅くない。

現在を生きる我々が、物物質的遺物を通して、追体験することが、当館の学習プログラムで目指す姿の1つである。

## ②「当館でしかできないこと」

上記に関連して、学習プログラムのオリジナル性ということも重視している。クラフト系の学習プログラムは、どれも何らかの形で体験キットが市販されており、当館でなくても極端に言えば、体験することができる。また、公園を活かしたクイズラリーや、実物を用いた対話を行う鑑賞も、当館だけではなく、日本各地にある（史跡）公園や、美術館で実施されているものであり、すべてが当館のオリジナルではない。

一方で、クラフト系であれば、県内で見つかったもの（勾玉や紐遺存体、火きり臼など）を元にして、学芸員やボランティアが技術復原を行い、学習プログラムとして提供できる方法を試行錯誤してきた。また、「大中探検隊」では史跡公園としての保存活用計画に基づく、弥生時代の植生復元や発掘調査事例をもとに考察・復原した竪穴住居を用い、「本物の土器にふれよう」では、実際に出土した本物の土器を用いた内容としている。

どの学習プログラムにあっても、本物や実物（二次的な本物）、あるいは本物から復原した技術を元にしたものを内容に入れ込んでいる。これらは市販のキットではできない、まさに当館オリジナル＝当館でしかできないというものである。

## （２）学習指導要領とのかかわり

### ①学習指導要領のマインドマップ

私事で恐縮だが、フォーラムに先だって訪れた現代美術館で、郷氏が学習指導要領を読み解くだけではなく、マインドマップとしていたことに

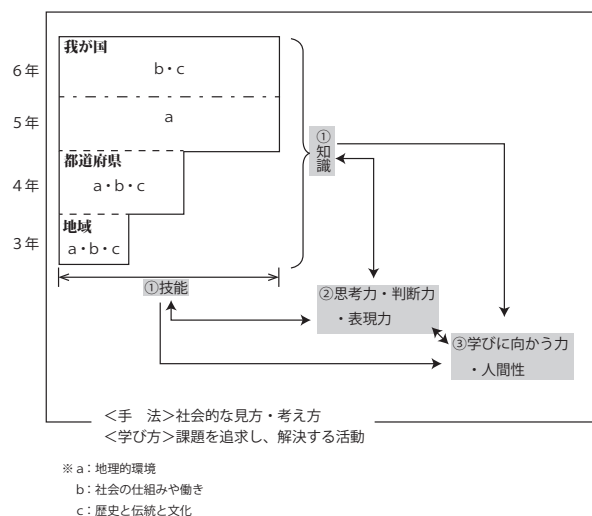


図13 社会科学学習指導要領のマインドマップ

驚愕した。報告者自身は、学習指導要領の存在を知っていたものの、既にある学習プログラムを「まわす」ことや、改良・開発することのみに考えを絞っていたからである。

マインドマップによって可視化されることにより、学校等団体が望んでいることや来館する目的の背景を知ることができ、また学校等団体の目的や実情に応じた学習プログラムの提供を行う事ができる点で、目から鱗であった。

当館での学習プログラムは、社会科のみならず、学校教育全体で本県が目指す「兵庫型体験学習」に則ったものであり、歴史系（社会科・地歴科）の教育に特化したものではなく、児童・生徒の学校教育での学び全体にアプローチするような制度設計であったからである。

試みに、今回の発表に合わせ、報告者が作成した、小学校社会科の学習指導要領のマインドマップが図13である。

この図からは、当館を利用する学校等団体のうち、6年生の教員団は、当館に対して「我が国の歴史と伝統と文化」を学ぶことを期待していることがわかる。これに対して、当館では館内見学によって「社会的な見方・考え方」という手法を養い、学習プログラムによって「課題を追求し、

解決する活動」を提供していると取り組みを整理することができる。

郷氏や小林氏の発表で取り扱う、学習指導要領上での各館の学習プログラムの位置づけは、さらに詳細に単元との照応とは異なり、当館での学習プログラムの位置づけは、そういった単元ごとではなく、社会科という教科の枠組みでより大きく位置付けている。

もちろん、学習指導要領自体は、効果と検証を踏まえて改定されていくものであり、学習プログラム自体が、必ずしもそれに合わせる必要はないが、学校等団体との意思疎通のためのツールとして、当該ミュージアムの分野にかかる部分について内容を把握しておく必要があると考えられる。

## 5. さいごに

「はじめてミュージアムと出会う児童・生徒に、私たちは何を伝えることができるのだろう」。

本フォーラムの案内に記載した上記の文言は、報告者が学校等団体との対応との中で、自問しているものだ。ミュージアムは、確かな価値を持つ展示品を、来館者に提示する場であると同時に、来館者にその価値を伝えるだけでなく、来館者自身が提示された展示品から新たな価値を創造する場でもある。

そのためには、展示品をただ観覧するだけでなく、また優品を見るだけでなく、来館者自身が主体的に取り組みながら、展示品から何かを学ぶ・気づく仕掛けが必要となることは間違いない。

すべての来館者に対して開かれたミュージアムたるべく、インクルーシブなミュージアムのためにも、継続して学習プログラムを、「つくる・つなぐ・たもつ」ことが、ミュージアム全体の「これから」を考えることになると思われる。

### 【参考文献】

- ・濱田耕作 1922『通論考古学』大鐙閣（後に、雄山閣・岩波文庫から復刊）

・文部科学省 2017『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)』

・文部科学省 2017『小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 社会編』

・Duncan F. Cameron, 1972“The Museum, a Temple or the Forum”The Journal of World History: Museums, Society, Knowledge, pp.48-60



---

## 里山の小さな自然科学館と学校教育プログラム

— 人と自然との関係性を自然科学館で理解する —

小林 誠（十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ）

A small natural science museum and school education program

— Understanding the relationship between humans and nature at the Museum —

Makoto KOBAYASHI (Echigo-Matsunoyama Museum of Natural Science “Kyororo”)

---

### 1. 雪国の里山にある小さな自然科学館

十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ（以下、キョロロ）は、新潟県十日町市松之山地域の里山に位置し、多雪地の里山の生物多様性に関する展示や、豊富な里山体験プログラムを通年実施する参加体験型の小さな自然科学館である。当地域は世界でも有数の豪雪地帯に位置する。多雪地特有の景観や動植物が見られる敷地内には約80haの里山の保全地域であるフィールドミュージアム「キョロロの森」が広がり、ブナ二次林を中心とした広葉樹林やスギ人工林、放棄水田から造成された複数のビオトープやため池など多様な環境が見られる。この「キョロロの森」は環境省の「生物多様性保全上重要な里地里山」に選定されており、学芸スタッフや外部研究者の調査研究フィールドとして、また本報告のメインとなる自然体験や教育利用のフィールドとしても活用されている。また近傍には「美人林」と呼ばれ観光利用される約100年生のブナ二次林が広がり、観光のために当地を訪れる方も多い。



図1 「森の学校」キョロロ外観

### 2. 代表的な学校教育プログラム

#### （1）各学校への働きかけ

キョロロにおける学校教育利用は、小中学生の利用がその多くを占める。主にグリーンリーゼン前半に利用は集中し、フィールド体験と館内見学をセットとした利用が多い。

教育利用における各学校への働きかけとしては、印刷物やHP・SNSでの情報周知を行っており、先生方に直接情報周知をする場として、校長会・理科主任会・教員研修などの機会が多い。また先生方の口コミにより新規・継続利用につながるケースも多く、担当する学年や赴任学校が変わってからも利用していただくケースがある。

また教育旅行に関しては、旅行会社のエージェントへの情報周知やモニターツアーの実施から利用につながるケースがある。情報周知の際に使用する資料では、学習指導要領に対応した関連單元ごとにキョロロで学び体験できる項目を整理した資料を作成し、利用案内と共に配布している。



図2 「キョロロの森」内のビオトープ



図3 両生類の生体展示

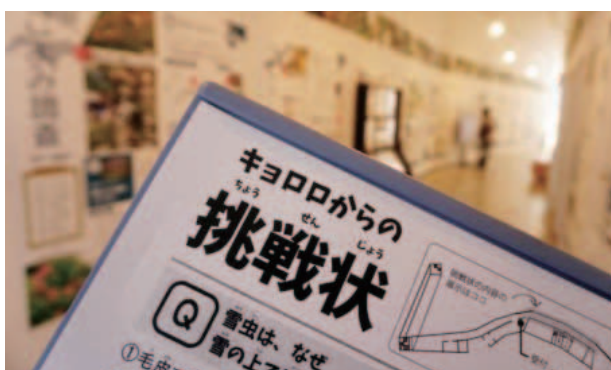


図4 展示と連動するワークシート

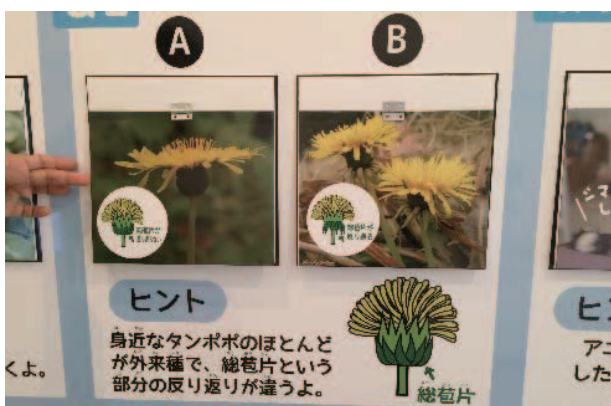


図5 ハンズオン展示（クイズ）



図6 「いきもの教室」哺乳類の足跡の観察

## （２）学校利用を想定した展示

常設展では、フィールド体験で観察できる生物に関連した生体・標本展示を行っている。市内の両生類全種の生体展示や、身近な生物多様性を昆虫標本や哺乳類の剥製、映像といった自然史資料を用いて紹介している。また、里山の暮らしに関連した民具や農具の展示、里山の四季の暮らしに関するパネル展示を行っている。さらに豪雪地帯ならではの雪に関連した展示として、過去40年間の実寸大の積雪量のグラフや、雪と生物多様性や暮らしに関するパネルやジオラマなどを展示している。

企画展は年に3-4回実施しており、企画テーマを設定する際には各季節の利用者層の特徴も企画時の要素としている。春季企画展（3-7月）では教育利用のトップシーズンでもあることから、企画展のテーマを「教育≧観光」寄りにするケースが多い。また、夏季以降では相対的に家族や観光的な利用者が多いため、「教育≦観光」を意識したテーマ設定とすることが多い。

主体的・探究的な学びにつなげる展示の工夫として、ワークシートを用い「展示を見る→考える」への補助教材としている。さらにハンズオン展示を多用し、自分のアクションを通じて気づきや学びにつなげる展示を用意している。

## （３）幼稚園・保育園の利用

幼稚園や保育園の来館型の利用としては、遠足や園外活動として利用していただいている。学芸スタッフの帯同が必要なケースだけでなく、帯同なしでフィールドや館内を利用するケースも多い。また、学芸スタッフが園に出向く出張型の利用として、学芸員が各園に出向き、生き物観察などを行う「いきもの教室」を実施している。単発開催から毎月1回定期的に実施する園まで、利用頻度は様々である。生き物教室では、収蔵自然史資料を教材に用いたり、ネイチャーゲームを取り入れたり、内容は保育士と相談しながら都市型・郊外型園どちらにも対応できるようにしている。



#### （４）小中学校の利用

教育利用の多くを占める小中学校においては、利用パターンとして「館内＋フィールド」と「出張型（オンライン含む）」に分けられる。前者でのスタンダードな利用パターンは、館内見学（約 30 分）、ブナ林散策（約 40～60 分）、水辺の生き物観察（約 40-60 分）を組み合わせることが多い。また出張型では学校周辺のフィールド観察やワークショップ形式の学習の支援、オンラインでの授業などを実施している。

授業での利用では、総合的な学習の時間、生活科・理科・社会、自由研究相談、職場体験、公共施設の使い方などで利用いただいている。また、教育旅行での利用では、主に関東圏からの小中高生による教育旅行、県内の修学旅行での利用が多い。

このような児童生徒の学習の成果を発表する場として「こども里山学会」の企画（現在休止中）や、キョロロ館内に学習成果発表コーナー「発信！私たちの地域自慢」を設けている。総合的な学習や課外活動の成果をまとめ、他校の発表を聞き、児童生徒が主役となり学習の成果を発信する場としている。

さらに近年では、SDGs や探究学習へのニーズが増えており、探求的な学びのニーズに対応できる体験学習コンテンツの整備を行っている。2020～2022 年にかけて小中高校では新学習指導要領がスタートし、特に「探求的な学び」に重点が置かれた。当館は理科や総合的な学習の時間、また修学旅行での利用も多いため、学校教育の場における学習のキーワードやニーズを、博物館教育と連携・連動させるソフト事業に近年力を入れている。

探究型自然体験イベント「キョロロ生物」はこのニーズに対応するためにスタートした企画であり、仮説とその検証の体験から科学を楽しく感じてもらうことを目的としている。毎回里山の生き物を材料に「予想する」「調べる」「考察する」という科学的な思考を体験し、自分なりの考えで「なぜ？」に答えてみることに挑戦し、科学の考え方を楽しく学ぶ体験を通じて、子どもたちの「探究する力」の育成を目指している。



図7 「いきもの教室」ネイチャーゲーム



図8 常設展での見学



図9 こども里山学会の様子



図10 「発信！わたしたちの地域自慢」



図 12 「キョロロ生物部」の様子



図 13 スーパーサイエンスハイスクールの探究活動



図 14 「理科教員研修」の様子



図 14 「キョロロ」で作成した教材

### （５）高校・専門学校・大学の利用

高校生以上の学校利用は相対的に多くはないが、近年では県外のスーパーサイエンスハイスクールの探究的な授業として、自然を科学的に捉える手法を学ぶ内容をキョロロや周辺フィールドを利用して展開している。また、高校の生物部の活動に対して研究方法や解析のアドバイスを実施している。

専門学校や大学の学校教育利用では、授業の一環として展示づくり・ビオトープ管理・生物の保全に関する調査研究活動を受けいれており、また卒論・修論・博論でのフィールド利用や共同研究を行っている。

### （６）教員の利用

授業や保育活動で活用できる自然観察の知識や技術、博物館を活用した学習展開について、理科教員研修・新採用教員研修・保育士研修などの受け入れを行っている。教員や保育士が抱える課題、博物館に求めるニーズの把握につながり、また博物館の使い方を具体的にイメージしていただく機会となっている。

## ３．プログラムづくり・伝え方で大切にしているところ

### （１）環境教育という視点

環境教育では、環境問題を解決し持続可能な社会づくりに貢献できる人材を育成するために、「望ましい人と自然との関係とは何なのか？」を自分自身で考え、その実現のために行動する力の育成が重要とされている。そのためには、幼い頃から五感を通して自然を体験し自分なりの自然観を養うことや、自然との繋がりを実感し、自然とのより良い関係について考えることが必要とされ、人と自然とのつながりや循環を実感しやすい里山は環境教育の最高の舞台、教材の一つであると考えられる。しかし、普段の生活の中で自然と直接関わる機会は限られている現在、日常の中で自然体験をすることは困難と



なっている。現在多くの先進国で社会の“自然離れ”が急速に進行し、大きな社会問題として、また環境問題に歯止めをかける上での根本的な障害として認識されている。この意味でも、公教育が担う役割は非常に大きいと考えられる。

## （２）環境教育の手段としての自然体験

キョロロでは、「人と自然との関係性」について考えるきっかけとなるような体験を提供することを心掛けている。これは、近年学習機会でのニーズが増すSDGsに関連したプログラム開発の際にも重要な要素となっている。

体験者自身が、里山でみられる生物多様性やつながりを実感し、「人（自分）と自然」との関係性を考える機会につなげることを意識した教育プログラムを展開している。

## （３）伝えたいことが伝わることで、体験者の楽しい体験をつくる

体験者は気づきや学びをとおして、博物館での「楽しい」体験を期待している。ただし、動植物の名前や特徴を羅列的に紹介するような「単なる自然解説」は、悪く言えば知識のひけらかし、知識の押し売りとなり、自然への興味が失われる場合もある。

体験を提供する側は、体験者の属性（学年、普段の自然との関わり、事前学習の有無、人数など）を考慮し、説明の仕方に説明型（一方向型）・やりとり型（双方向型）・参加主体型（多方向型）などの多様な伝え方の工夫を行う。体験者特性に合わせて何をどう伝えるかというインタプリテーションスキルは、楽しく学ぶ体験機会を作るうえで非常に重要であると感じている。

その上で、キョロロでは自然体験プログラムを開発する際に、以下のポイントを考慮している。

- ① 色々な感覚を使うアクティビティを取り入れる。
- ② 参加者が主体的に取り組めるアクティビ

ティを取り入れる。

- ③ 参加者の日常とつながるネタを取り入れる。
- ④ ストーリー性を大切にする（アクティビティ間の繋がりを大切に）。
- ⑤ 雪里の季節感を実感できる。
- ⑥ 生き物同士や、人と自然のつながりを実感できる。
- ⑦ 科学者ならではの視点、専門性を活かす。

また、博物館での研究活動の成果をもとに様々な教材の開発を行い、実際の学習の際に活用している。またこれらを学校や教育施設に配布し、体験プログラムの普及をとおし、身近な生物多様性への意識向上の促進につながることを期待している。

博物館には「答えを学ぶ場」だけではなく、「答えの導き方、理解の仕方を学ぶ場」という機能がある。この機能は、展示との連動や学芸員らによる教育普及の経験値によって担保される部分でもあり、博物館と学校教育の有機的な連携形態や充実した教育活動を考える際に、重要な視点となるだろう。

## 【補註および参考文献】

- 1) 小林誠 2022「自分なりの考えで「なぜ？」に答えてみる」文化庁広報誌ぶんかる．いきいきミュージアム ～エデュケーションの視点から～ 070
- 2) 小林・岩西（2020）自然科学館における幼児期を対象とした環境教育の実践．日本生態学会誌 70 巻1号

---

## 学校と博物館の新たな関わりを模索する

### ー 博学連携から地域総がかりへ ー

八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

Exploring the New Relationships between Schools and Museums

ー Prospecting from Cooperation between Schools and Museums to Parties involved in throughout the Community ー

HATTA Tomokazu (Clark Memorial International High School)

---

### はじめに

本研究の目的は、学校教育と博物館の連携の在り方について、通信制高校での実践事例や教員が博物館に求めていることを明らかにしたうえで、具体的な実践を紹介することにある。

平成10(1998)年の教育課程審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程基準の改善について」において、横断的・総合的な学習の導入および教育課程の基準の大綱化・弾力化が目指されることになった。<sup>1)</sup>そして、その具体策として「総合的な学習の時間」が創設され、各学校の創意工夫を生かした特色ある教育活動や横断的・総合的な学習活動の充実が目指された。これ以降、学校教育において多様な学習形態を構築するという意味から、博学連携も盛んに行われるようになる。また、『学習指導要領』においても、社会科、理科、美術科、総合的な学習の時間など、様々な教科において博物館活用が求められており、この考えは、現行の学習指導要領にも継承されている。

これらの背景を受け、全国各地で博学連携の研究や実践事例が豊富に蓄積されてきた。一方で、「博物館に全ておまかせする(丸投げする)連携」や「連携すること自体が目的となった実践」も一定数見受けられるなど、様々な課題も浮き彫りになっている。<sup>2)</sup>そのため、これまでに行われてきた実践事例や関係者の声を今一度拾い上げ、今後の博学連携の在り方を模索する必要があると感じた。

以上を受け本稿では、筆者が勤務している通信制高校における博学連携の実践事例や、教員が博物館

に求めていることを明らかにしたうえで、今後の博学連携の在り方について模索していきたい。なお、本稿の内容は2023年1月28日に実施された「古代体験研究フォーラム2022」(主催:兵庫県立考古博物館)において筆者が行った発表に基づいている。

## 2. 通信制高校における博物館活用

### (1) クラーク記念国際高等学校と生徒の実態

筆者が勤務しているクラーク記念国際高等学校(以下、クラーク高校)は、北海道に本校を置く広域通信制高校であり、2022年に創立30周年を迎えている。2023年3月現在全国に60を超すキャンパスが設置されている。筆者は「クラーク記念国際高等学校姫路キャンパス」「専修学校クラーク高等学院姫路校」の2校で教壇に立っている(本稿では便宜上、両校を併せて「姫路校」という名称を用いる)。

クラーク高校に限らず、通信制高校に在籍する生徒の多くは、小学校や中学校在籍時に不登校を経験している者が多い。<sup>3)</sup>不登校になる背景には、「勉強についていけない」「友人や教員との関係がうまく構築できない」など、様々な要因がある。

また、「聞く力」「見る力」が弱い生徒や、情報を頭の中で正しく組み立てることができない生徒も一定数在籍している。そのため、生徒同士で話していても、うまく会話の内容が聞き取れていない(整理できていない)場面や黒板の文字が正しくノートに写せないといった場面に遭遇することがよくある。

<sup>4)</sup>そして、その特性が「勉強についていけない」「友人関係をうまく構築できない」といった問題に直接的な影響を及ぼしている生徒も一定数存在する。そ

のような生徒の抱える多様な背景を受け、筆者が担当する授業では五感に訴えかける学びを大切にしている。具体的には、「聞く力」や「見る力」が弱い場合、「触覚」「嗅覚」「味覚」など、それ以外の感覚器に訴えかけることで、情報を正しく取得できるようにサポートすることを心掛けている。しかし、五感に訴えかける資料や情報などを教員一人の力で準備することは困難である。そのため、筆者はその解決策を博物館に求めている。博物館が所蔵する資料や専門的知識・情報を学校教育に活かすことで、五感に訴えかけることを目指している。<sup>5)</sup>

本稿では、芦屋校において行った、国立歴史民俗博物館が所蔵する資料や情報を活用した授業実践の概要について整理・提示する。なお本実践を含む、本稿で紹介する全ての実践は、筆者の前任校である「クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス」「専修学校クラーク高等学院芦屋校」（以下、両校を併せて“芦屋校”と表記する）で勤務していた際に行った実践である。

## （２）国立歴史民俗博物館を活用した実践

筆者は、クラーク高校で勤務する傍ら、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の博学連携研究員としても活動している。<sup>6)</sup> ここでは、筆者が教員博学連携研究員の立場で行った実践について紹介する。

### 【実践の概要】

- ① 名 称：江戸図屏風に隠された謎を探れ！
- ② 科目名：発展地歴（専修学校科目）
- ③ 期 間：2021 年 10 月～11 月
- ④ 担 当：筆者
- ⑤ 場 所：専修学校クラーク高等学院芦屋校  
(〒 659-0065 兵庫県芦屋市公光町 1-18)

### ⑥ 指導計画

第 1 時：長篠合戦図屏風を活用した事前学習（1 時間）

第 2 時：江戸幕府について事前学習（1 時間）

第 3 時：江戸図屏風の謎を読み解こう（1 時間）

第 4 時：他の屏風から情報を読み取る（1 時間）  
それ以降：発展学習（数か月間）

### ⑦ 実践の流れ

本実践を行った 2021 年は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大が懸念されていた年であった。そのため、歴博に来館せずに、学校で博物館資料を活用する「非来館型」の博物館活用を模索した。具体的には、歴博の学校対応サービス室の協力を得て、江戸図屏風（複製）を A0 サイズで印刷したものを芦屋校に送付していただき、授業実践に向けての計画を練った。また年に数回、博学連携研究員会議に出席するため歴博を訪れる機会があり、他の博学連携研究員や学校対応サービス室の方に資料提供や情報提供をしていただく場や、意見交換などをさせていただく機会にも恵まれた。このような支援を受けつつ、江戸図屏風（複製）を活用した教材研究や授業モデル開発を行った。

授業の目標は「屏風に隠された謎を解き明かせ」である。製作者や製作を依頼した人がどのような願いや思惑を屏風に込めたのかを読み取る実践を行った。本稿では、発展学習を除く全 4 時間のうち、歴博の資料を活用した第 3 時を取り上げ、紹介する(表 1)。

（表 1）第 3 時：江戸図屏風の謎を読み解こう

過 程	時 間	○発問 ・ 学習活動	□指導上の留意点 ■評価の観点
導 入	10 分	○江戸図屏風に描かれているものを全て書き出そう	□細かい部分は歴博 HP にある高精細画像で確認させる
展 開	35 分	・江戸図屏風は、徳川家光の業績を称えたものであることを確認する ○江戸図屏風を部分に分けて、「顔の見えない人物」「籠に乗っている人」を見つけよう ○朝鮮通信使が描かれている場所を見つけよう	□徳川家光と江戸幕府の権威を象徴する狙いがあったことを理解する □適宜、補助発問を行うことで、学習活動を円滑に進める

		・江戸幕府と通信使の関係を、御威光を手掛かりに考える	
ま と め	5 分	・本時のまとめ ・江戸図屏風が描かれた背景や諸資料から読み取った情報についてまとめる	□複数の視点にそってまとめるように支援する

(筆者作成)

先述したように、芦屋校には多様な生徒が在籍しており、なかには「聞く力」「見る力」が弱い生徒も一定数見受けられる。そこで、五感に訴えかける学習過程を指導計画全体に組み込んだ(表2)。

(表2) 五感に訴えかけた方法

感覚器	内 容
視覚	ポスターサイズの屏風・タブレットでの拡大表示など、視覚から情報を得やすくする工夫を行った。
聴覚	教員から生徒への一方通行の説明を最小限におさえ、資料を介した生徒同士のやり取りを増やす発問等を取り入れた。
触覚	授業に関係する火縄銃・わらじなどの実物資料の活用を図った。屏風(複製)に触れる機会を設けた。
味覚	新型コロナウイルス感染症の拡大を受け断念した。江戸時代のご飯レシピを配って家庭で実践してもらえるように準備を進めた。
嗅覚	新型コロナウイルス感染症の拡大を受け断念した。教室内でお香を使う実践を想定していた。

(筆者作成)

アンケート調査等を行っていないため、本実践の有効性について明言することはできないが、課題へ取り組む姿勢やワークシートへの書き込みの数、発言の質と量をみても、普段の授業と比較していずれも上回っていたと感じている。

筆者自身は、通信制高校において博物館を活用する際、「五感で感じる学び」に役立つ資料や情報等の提供を博物館に期待し、連携を行っている。そうすることで、学習内容に対する生徒の理解が深まり、成長に繋がると感じているからだ。肌感覚ではあるが、本実践では概ねこの目的を達成することができ

たと感じている。

なお、ここで紹介した歴博の資料を活用した授業実践の詳細については、拙稿「多様な背景をもつ子どもたちに博物館の学びを届ける」(『令和3・4年度博学連携研究員会議報告書』収録予定)にて紹介している。なお、指導案は歴博のホームページでも公開される予定である。<sup>7)</sup>

### 3. 学校教育が博物館に求めていること

続いて、学校教育(特に教員)が博物館に対して求めていることを明らかにしていく。そのために、まずは、「学校の同僚」「博学連携研究員」「知り合いの教員」へ博物館活用に関する簡単な聞き取り調査を行った。次に、過去に行った博学連携に関するアンケート調査や先行研究・実践から、教員が博物館に期待していることや求めていることを簡単に調査した。<sup>8)</sup> その結果、博物館を活用してみようと思った理由や背景として、以下の発言・記述が確認できた(表3)。

(表3) 博物館を活用した教員の声

- ・(博物館の活用について) 教科書に書いてあるから
- ・毎年、博物館を活用しているから
- ・ガイドツアーや解説があるから。
- ・学校に来て授業をしてくれるから。
- ・ロコミで聞いて(先輩のすすめ)。
- ・時間が潰せそうだから。
- ・教材を貸してくれたから(貸してくれるらしい)。
- ・他の教員が活用するから、自分もやってみた。
- ・ロビーでコンサートができるから。
- ・体験活動が充実しているから。
- ・歴史学習の導入にちょうど良い。
- ・チラシが届いたから。
- ・ホンモノの資料に触れることができるから
- ・博物館に知り合いがいるから。
- ・学習指導要領に書いてあるから。
- ・(博物館に) 丸投げしたら全部してくれるから。
- ・生徒の作品をロビーに展示してくれるから。
- ・一度に大人数が入れるから。
- ・学校が推進しているから。
- ・職業体験を受け入れてくれるから。
- ・博物館が好きだから。



- ・公共施設でのマナーを教えるのにちょうどいいから。
- ・博物館教育や博学連携を研究していたから。・以前から使ってみたかったから
- ・普段とは違った授業をしたいと思ったから
- ・なんとなく
- ・入館料が無料だったから

(筆者作成)

簡単に調べただけで、これだけの意見が出てきた。教員一人ひとりに博物館を活用するねらいや思惑があり、活用するに至った理由や背景も様々であることが明らかになった。ここからも、教員が博物館に求めていることを一言で示すことは困難であることは明白であるが、博物館に期待することとして、よく耳にした(目にした)意見は下記の4つである。

- ① 子どもたちの考えや行動等に変化や変容があるか
- ② 教員自身が面白いと思えるかどうか
- ③ 煩雑な手続き等がないか
- ④ 活動証明書の発行など、目に見える成果があるか

博物館を活用することによって得られる学びは、すぐに成果が出るものでもなければ、数値化できるものでもないことは筆者も理解している。しかし、活動を行うにあたって乗り越えなければならない、いくつかのハードルをクリアするために、「子どもたちの変容」「活動証明書の発行」「目に見える成果」が求められていることもまた事実である。

加えて、「GIGA スクール構想の実現」や「個別最適な学びの推進」など、子どもたちを取り巻く教育環境は過去に類を見ない速さで変化している。筆者が勤務している高等学校においても、「地理総合や歴史総合の必修化」や「探究科目の新設」など大きな変化に直面している。学校を取り巻く教育環境の変化に伴い、学校が地域や社会に対して求めていることも変化している。多分に漏れず、学校が博物館に期待していることや、要求していること(したいこと)も変化していくことは容易に想像できる。よって、目まぐるしく変化していく教育環境に合わせた

連携が、必要不可欠である。

## 4. 博学連携から地域総がかりへ

次に、これまで行われてきた博学連携を俯瞰し、今後の博学連携の在り方を模索していく。

### (1) 従来の博学連携

従来の博学連携では、文字通り“学校”と“博物館”がそれぞれの強みを活かしながら“連携”を図ることが目指されていた。しかし、実態としては「丸投げ」「おまかせ」という言葉が象徴しているように、博物館による学校教育の支援という色合いが強かったことは先述したとおりである。<sup>9)</sup>

一方で、歴博が行ってきた「博学連携研究員会議」や全国各地の博物館が行っている「教員のための博物館の日」など、一方通行にならない博学連携の在り方が模索されてきた実態もある。<sup>10)</sup> このような、従来行われてきた学校と博物館との望ましい連携を充実・深化させ、実践事例を蓄積していくことがより一層重要になってくるであろう。加えて、教育環境の変化等に対応した学校教育と博物館の新たな関係を模索することも避けては通れない。

2022(令和4)年8月に、第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理「全ての人のウェルビーイングを実現する、共に学び支えあう生涯学習・社会教育に向けて」が公開された。そこでは、中学生・高校生と地域の関係について「中高生においては、地域から支えられるだけでなく、地域社会の大人とともに課題を発見し、解決に取り組むことを通じて、積極的に地域に関わり、貢献していくことで、地域の一員としての当事者意識を持ち、これからの地域の担い手として活躍することが期待される」<sup>11)</sup>と述べられている。ここで指摘されているように、これまでの学校と地域の関係を考えて時、学校で行われる教育活動に地域の人的・物的資源を投入することが大半を占め、学校(生徒達)が地域課題の解決や地域貢献に寄与するという発想は希薄

であったといえる。<sup>12)</sup> 博学連携においても、博物館の強みを学校に投入するといった実践が多く見受けられる一方で、生徒が学芸員をはじめとした多様な地域住民と協働して、地域が抱える課題の解決を図ろうとした実践は管見の限り見受けられない。そのため、今後の学習では、生徒達が地域に出て、課題解決を目指す活動が求められていくだろう。

## (2) 地域学校協働活動と博物館

地域と学校が協働した取り組みとして「地域学校協働活動」が全国各地で展開されている。地域学校協働活動とは「地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動」<sup>13)</sup>と捉えることができる（下線筆者加筆）。「次代を担う子供に対して、どのような資質を育むのかという目標を共有し、地域社会と学校が協働」<sup>14)</sup>することで、「地域総がかり」で子どもたちの成長を支えることが目指され

として、地域を構成する住民の一人として、博物館や学芸員も積極的に関わっていく必要があるだろう。そのためにも、「地域学校協働活動」という枠組みのなかで、博物館や学芸員がどのような役割を果たすのか（果たしていくべきか）を考える必要がある。

そこで本稿では、生徒達が行った、地域の抱える課題の解決を目指した実践を2つ紹介する。また、「地域総がかり」を目指した本実践で、博物館や学芸員が果たした役割についても紹介していく。

## 5. 地域総がかりを目指した実践

### (1) 芦屋市におけるウィキペディアタウン活動

ここでは、筆者が芦屋校で行った、高校生によるウィキペディアタウン活動について整理・提示する。

#### 【実践の概要】

- ① 名 称：芦屋の文化遺産を世界に発信！
- ② 科目名：発展地歴（専修学校科目）
- ③ 期 間：2021年10月～11月
- ④ 担 当：芦屋市教育委員会の学芸員、筆者
- ⑤ 対 象：地域研究部（部活動）部員
- ⑥ 場 所：専修学校クラーク高等学院芦屋校

（〒659-0065 兵庫県芦屋市公光町 1-18）

#### ⑦ 芦屋市の概要と抱える課題

本実践を行った兵庫県芦屋市は、神戸市と大阪市のほぼ中間に位置する人口約10万人の市である。弥生時代を代表する高地性集落である「会下山遺跡」や、フランク・ロイド・ライトが設計した「ヨドコウ迎賓館」など、多様な文化遺産が市内に点在していることで知られている。一方で、著名な文化遺産を除く、多くの文化遺産がインターネット上であまり取り上げられていないという実態があった。そのため、市内外の人に芦屋市の文化遺産を発信するという点で大きな課題を抱えていた。

#### ⑦ 実践の流れ

本実践では、芦屋市に点在する文化遺産の情報を

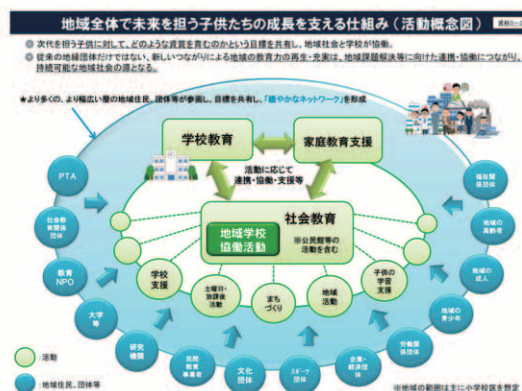


図1 地域学校協働活動 概念図  
(出典) 学校と地域でつくる学びの未来

ている（図1）。

図1で示したような「協働」活動を行うにあたっては、従来行われてきた個別の活動を、総合化・ネットワーク化し、組織的・安定的に子どもたちの学びを推し進めていくことが求められる。もちろん、博物館や学芸員も例外ではない。地域の社会教育施設



発信・紹介する方法として、ウィキペディアタウンという手法を採用した。ウィキペディアタウンとは、「地域にある文化財や観光名所などの情報をインターネット上の百科事典「ウィキペディア」に掲載し、さらに掲載記事へのアクセスの容易さを実現した街（町）のこと」<sup>15)</sup>を指す言葉である。日本ではウィキペディアを編集するイベント（エディタソン）もウィキペディアタウンと呼ぶことが定着しつつあり、本実践もこのエディタソンの発想に基づいている。具体的な活動としては、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課の学芸員である竹村忠洋氏の協力を受け、「フィールドワーク」「文献調査」「ウィキペディア記事の執筆」などの活動に取り組んだ。活動の詳細は、拙稿「地域の人的・物的資源を活用した授業の一考察（『関西教職教育研究』第10号収録）」にて整理しているため、ここでは概要のみ紹介する（表4）。なお、太枠内が学芸員による出前授業である。

フィールドワーク	「インターネットでの情報収集」や「市役所での情報収集」を経て、生徒達が、行ってみたいと思った場所や、調べてみたいと思った文化遺産を複数ピックアップした。そして、それを基に学芸員とフィールドワークのルートを決めた。フィールドワーク当日は、地域研究部の生徒に加えて、芦屋市の学芸員および教員が同行した。
文献調査	フィールドワーク後、学芸員の方に出前授業に来ていただき、文献調査を行った。「芦屋仏教会館」「三条八幡神社」について書かれた文献を探し出し、どの文献に、どのような記述があるのか確認を行った。なお、文献調査を行うにあたって、生涯学習課および芦屋市立図書館から図書の貸し出しを受けた。
記事の執筆	学芸員の添削を受けながら、「芦屋仏教会館」「三条八幡神社」の記事の編集を行った。まず、既存のウィキペディア記事を印刷し、その用紙に赤ペンで加筆・修正箇所を書き込んでいく作業に取り組んだ。そして、その原稿を学芸員に添削していただき、専門家の視点からその内容の正確さや妥当性を検討していただいたうえで、記事の編集・公開を行った。

（表4）ウィキペディアタウンの概要

項目	内容
アカウント登録	まず、ウィキペディア記事を作成・編集するために、ウィキペディアのアカウント作成を行った。芦屋校では、生徒が一人一台タブレット端末を持っているため、全員がアカウントを作成し、いつでも編集できるように準備を行った。また、ウィキペディアには、どのような記事や項目があるのか簡単に調査した。
インターネットでの情報収集	次に、「芦屋市」について調べる学習過程を組み込んだ。今回の活動に参加した生徒の多くは、芦屋市外から通学しており、芦屋の歴史や地理的環境などに明るくない。そこで、芦屋の観光地や文化遺産、有名なものなどについて、タブレットを用いた簡単な調べ学習を行った。
市役所での情報収集	続いて、芦屋市役所において情報収集を行った。芦屋市役所の各課に設置されているチラシやパンフレットを学校に持ち帰り、精読した後、意見交換を行った。インターネット上では公開されていない最新情報も確認することができた。

（拙稿「地域の人的・物的資源を活用した授業の一考察」をもとに筆者作成）

本実践では、芦屋市が抱える「文化遺産の多くがインターネット上で紹介されていない」という課題に対して、ウィキペディアタウン活動を通じて、解決を目指した。特に、「フィールドワーク」「文献調査」「記事の執筆」の3つの段階においては、学芸員のもつ専門的知識や情報提供等がなければ、成功することはなかったといえる。

## （2）高校生による博物館図録の作成

次に、筆者が芦屋校で行った、高校生による博物館図録の作成について整理・提示する。

### 【実践の概要】

- ① 名称：博物館の図録を作ろう！
- ② 科目名：基礎日本史・基礎世界史（学校設定科目）
- ③ 期間：2018年6月～2019年3月
- ④ 担当：筆者

⑤ 場 所：専修学校クラーク高等学院芦屋校

(〒 659-0065 兵庫県芦屋市公光町 1-18)

⑥ 市川町の概要と抱える課題

兵庫県市川町は、兵庫県のほぼ中心に位置する人口約 1 万 1 千人の町である。日本ゴルフクラブ発祥の地としても知られている。この市川町が抱える問題は、「深刻な人口減少」である。『市川町総合計画後期基本計画』においても「住民の絆を大切に元気で輝き誇れる“いちかわ”」「地域・人のつながりを大切にしたまちづくり」(下線は筆者加筆)など、「住民の絆・つながり・支え合う」といったキーワードが散見される。<sup>16)</sup> そのため、「住民がつながり・支え合う」憩いの場や空間を創出することが重要だと感じた。そこで注目した施設が「かさがた温泉」である。この施設は、温泉だけでなく、地域の特産品などを販売する「門前物産館」や、もち麦麵をはじめとした様々な料理が提供される「お食事処 せせらぎ亭」など、様々な施設を有する複合施設である。<sup>17)</sup> いずれの施設も多くの地元住民・観光客等が利用し、憩いの場として機能している。一方で、同じ施設内にある「思い出博物館」は、学芸員が配置されておらず、パンフレット等も整備されていないため、うまく活用できていないイメージがあった。そこで本実践では、思い出博物館の図録を作成することで、「どのような資料があるか把握し、博物館の資料や価値を再発見する」ことを通して「思い出博物館を地域の憩いの場にすること」のきっかけづくりを目指した。

⑦ 実践の流れ

ここで紹介する実践の詳細については、拙稿「高校生による博物館図録の作成－主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践的研究－(『日本生涯教育学会論集 41』収録)」にて整理している。そのため、本稿では実践の概要のみを整理・提示する(表 4)。

(表 5) 博物館図録作成の概要

項 目	内 容
博 物 館 や 博 物 館 機 能 に ついて紹介	市川町や思い出博物館の概要や抱える課題について紹介を行った。次に、博物館のもつ機能(資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及)について説明を行った。そのうえで、本実践の目的等について共有を図った。
展 示 品 の 提 示 と 教 育 的 価値の考察	次に、思い出博物館から資料の貸し出しを受け、調べ学習を行った。具体的には、昔の炊飯器を注意深く観察し、貼られているシールからメーカーや製造年月日などを調べ、どのような使われ方をしたのか、生活にどのような影響を与えたのかなど、様々な視点から資料の調べ学習を行った。このような手順で約 30 の資料について調べ学習を行った。
大 学 教 員 に よる 出 前 授 業	次に京都市芸術大学の桑田知明氏に、デザインに関する出前授業を行っていただいた。具体的には、表紙や本文中に頻出する「OMOIDEHAKUBUTSUKAN」「思い出博物館」の 2 つの言葉のデザインを行った。
デ ザ イ ナー に よる 出 前 授業	加えて、京都市芸術大学の桑田知明氏には、グラフィックデザイナーとしても来校していただき、出前授業を行っていただいた。生徒たちは、タイポグラフィーの手法を用いた表紙デザインに挑戦した。具体的には、生徒達の名前のイニシャルと動物を掛け合わせたデザイン制作に取り組んだ。意欲的な生徒は 1 時間で 2 ～ 3 個の作品を作っていた。
学 芸 員 に よ る 出 前 授 業	図録の作成が一区切りを迎えたタイミングで、公益財団法人滋賀県文化財保護協会の鈴木康二氏の協力を得て、図録の価値を再確認する出張授業を行った。鈴木氏は、滋賀県の博物館等での勤務経験もあり、図録の作成等にも携わってこられた方である。授業では、芦屋市立美術博物館が編集した博物館図録や各種報告書を事例に、図録がもつ教育的価値について講義していただいた。
博 物 館 図 録 の 編 集 ・ 製 本 ・ 印 刷 ・ 納 本 ・ 寄 贈	鈴木氏の出前授業を受け、図録がもつ意義や教育的価値を再確認した上で、図録作成の最終段階に入った。具体的には、「生徒の編集・製本・印刷・納本・寄贈」にデータ送付・製本」「ISSN コードの発番」「思い出博物館や関係機関に図録の送付・寄贈」の順に進めた。

(拙稿「高校生による博物館図録の作成」をもとに筆者作成)

本実践では、「市川町に所在する“思い出博物館”を憩いの場にする」という課題に対して、「博物館の魅力向上させるために、まず“図録作り”を行う」というアクションを起こした。

生徒たちが博物館図録を作成するにあたって、学芸員・グラフィックデザイナー・大学教員・思い出博物館のマネージャーなど、多くの方に参画していただき、プロジェクトを進めることができた。また、ここで紹介した図録作成プロジェクトは、次年度(2019年度)も継続して実施した。その際は、クラウドファンディングで活動資金を募るなど、関係者・支援者を増やしながら、活動そのものの深化・継続を図った。

2年間にわたる実践にあたって、関係者がそれぞれの専門性を活かしながら授業に参画して下さった。学芸員に焦点をあてると「博物館の果たす役割」「博物館のもつ教育的価値」「図録を作成する意義」について生徒たちと考えるという役割を果たしてくれたと感じている。

## さいごに

本稿では、学校教育と博物館の連携の在り方について、通信制高校での実践事例や教員が博物館に求めていることを明らかにしながら模索してきた。

社会教育法第2条において「学校教育又は就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律に基づき、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動をいう」<sup>18)</sup>(下線筆者加筆)と述べられているように、学校教育と社会教育が射程としている対象は異なっている。そのため、学校と博物館の関係や、学校と地域の関係を考えるにあたっては、学校教育と社会教育の「橋渡し役」の育成や、学校教育から社会教育への「接続方法」が課題になってくる。それらの課題解決を図る際、学校や博物館という施設単位で解決策を模索するのではなく、地域全体を俯瞰した上での解決が

求められていくだろう。「地域総がかり」で子どもたちをサポートする際は、「学校教育の役割(強み)は何か」「博物館の役割(強み)は何か」といった視点で意見を出し合い、地域全体で教育目標等を共有した活動を行うことが求められていると感じる。

## 【謝辞】

本稿で紹介した実践を行うにあたって、以下の方々にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます(敬称略・50音順)。

石川眞榔、井上翔太、河邊文宏、桑田知明、鈴木康二、竹村忠洋、津田昭裕、森田真史  
クラウドファンディングで支援していただいた方  
思い出博物館  
国立歴史民俗博物館学校対応サービス系の皆さま

## 【補註および参考文献】

- 1) 文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)の概要(平成10年7月29日教育課程審議会)」を参照。
- 2) 北俊夫2014「「博学連携」は進んでいるか」『教育の小径』No. 64、釈知恵子(編)2013『博学連携ワークショップ〜』p. 8、14など、様々な文献等で指摘されている。
- 3) 金子恵美子・伊藤美奈子2019「小中学校における不登校経験者の通信制高校での適応—行動面(登校状況)と意識面(不登校への今の気持ち)に着目して」『埼玉純真短期大学研究論文集』第12号 pp. 29をはじめとした様々な文献等で、不登校児童生徒の中学校卒業後の進路として通信制高校が注目されている。
- 4) 宮口幸治2019『ケーキの切れない非行少年たち』において、多様な背景をもつ子どもたちの実態について詳細にまとめられている。
- 5) 八田友和2022「教科における生徒の個性に応じた支援—非来館型の博物館活用を事例に—」『リカレント研究論集』第2号、pp. 60-61において、多様な背景をもつ子どもたちに対しての博物館活用を模索してい

る。

- 6) 博学連携研究員は、「国立歴史民俗博物館と連携し、実践的な研究を通して国立歴史民俗博物館の展示を生かした教育プログラムを開発すること」を目的に、現職の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等の教員が研究活動を行っている。詳細は、歴博のホームページを参照。

- 7) これまで行われた博学連携研究員による授業の指導案は下記のサイトで公開されている。

国立歴史民俗博物館「歴博の展示や資料を活用した授業実践例」(最終確認 2023 年 2 月 26 日)

<https://www.rekihaku.ac.jp/learning/practice.html>

- 8) 筆者が過去に行ったアンケートの調査結果は、「学校教育における博物館活用の実態と課題ー兵庫県東播磨地域に所在する学校へのアンケート調査を踏まえてー(『日本生涯教育学会 38』収録)」および「教員を対象とした「博物館と学校の連携に関するアンケート調査」の実施(『子どもたちと考える教科教育』第 6 巻収録)などで紹介している。

- 9) 2)と同様、様々な文献で指摘されている。また、「丸投げ」まではいかなくても、博物館による学校教育の「支援」にとどまっている実践も散見される。

- 10) 「情報収集の「近道」～教員向けの研修会～(公益財団法人日本博物館協会(編)『子どもとミュージアム』pp. 91-92 に収録)」などで紹介されている。また、国立科学博物館や日本科学未来館、明石市立天文科学館など、本事業を行っている博物館のサイトでも情報が公開されている。

- 11) 中央教育審議会生涯学習分科会 2022「議論の整理」p. 15 より引用。

- 12) 清國祐二 2022「学校経営の視点から地域学校協働を考える」『日本生涯教育学会年報 43』p. i を参照。

- 13) 文部科学省「学校と地域でつくる学びの未来」より引用。(最終確認 2023 年 2 月 26 日)

<https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/kyodo.html>

- 14) 13) と同じ。

- 15) 「ウィキペディアタウン」より引用(最終確認 2023 年 2 月 26 日)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%82%AD%E3%83%9A%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%82%BF%E3%82%A6%E3%83%B3>

- 16) 『市川町総合計画後期基本計画(令和 3 年度～令和 7 年度』より引用。

- 17) 各施設の詳細は、「かさがた温泉せせらぎの湯」公式サイトを確認(最終確認 2023 年 2 月 26 日)

<https://seseraginoyu.com/>

- 18) 社会教育法(昭和二十四年法律第二百七号)より引用。

#### 【生徒が作成した思い出博物館図録】

- ・思い出博物館図録作成プロジェクト(編) 2019『思い出博物館常設展示図録ー昭和なつかし館ー』
- ・クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス通信型コース「実践現代社会」受講者(編) 2020『思い出博物館常設展示図録』

#### 【参考文献】

- ・小笠原喜康ほか 2012『博物館教育論』ぎょうせい
- ・駒見和夫 2008『だれもが学べる博物館へー公教育の博物館学ー』学文社
- ・八田友和 2017「学校教育における博物館活用の実態と課題ー兵庫県東播磨地域に所在する学校へのアンケート調査を踏まえてー」『日本生涯教育学会 38』pp. 51-60
- ・八田友和 2020「ミュージアム・リテラシーの涵養を目指した博学連携モデルの提案ー歴史系博物館を活用した授業開発を事例にー」『日本生涯教育学会論集 41』pp. 93-102 日本生涯教育学会
- ・八田友和 2022「広域通信制高校における地域資源を活用したボランティア活動ー兵庫県芦屋市における実践を事例にー」『日本生涯教育学会論集 43』pp. 95-101
- ・クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス地域研究同好会(編) 2020『クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス地域研究同好会報告書』第 1 巻
- ・国立歴史民俗博物館ホームページ

(最終確認 2023 年 2 月 26 日)

<https://www.rekihaku.ac.jp/>

- ・専修学校クラーク 高等学院芦屋校サイト

(最終確認 2023 年 2 月 26 日)

<https://www.clark.ed.jp/campus/hyogo-ashiya/>



トークセッション

## 「ミュージアムと学校向けプログラム」

※ 当日のライブ感を活かすため、文字起こしに際して、発表者校正を除き、用語統一等をあえて行っていない箇所がある。

◇永恵 定刻14時半となりましたので、これからオンラインでのトークセッションをスタートします。

おおむね16時半を目途に、トークセッションを行っていききたいと思います。まずは、事前に寄せていただいたご質問について、今のところ全部まとめています。このトークセッションをしながら出てきた質問については、小林さんも郷さんもチャットで見える状態かと思うので、適宜触れていただいても結構です。こちらから繰り返すこともあります。皆さんもです。必要なことや聞きたいことがあればチャットに入れていただければと思います。また、本日触れなかった質問や、今から出た質問でお答えできなかった部分は、年度末に作成します報告書の中でお答えしていきます。大丈夫でしょうか。



郷 泰典氏

では、まず今日わたしも含め4名の発表がございました。発表者の皆様方で、ちよつと触れ切れなかったなどか、あるいは追加で説明が必要だなというところがありましたら、今からいただきたいと思います。郷さんいかがでしょうか。

◆郷 ちよつと追加というか、ちよつと前提の話が抜けてた部分もあるんですけども。学校連携の話を今回させていただきました。特に学芸員の出張授業ということなんです。これはメインの学校連携としてやっているわけではないんですよ。コロ

ナの前に、そういうリクエストがあった場合に対応します。特にコロナ禍になってから、やっぱり学校団体の来館利用がもう格段に減ってしまったので、それでこちらから出かけていくようにしようとしているので、今日、事例として学芸員の出張授業についてお話しさせていただきました。通常このプログラムを頻繁にやっているものではないということを先にお伝えしておきます。

それからですね、ご質問の中にあつた、予約なしの団体が来館された場合の対応ということで、私の発表の中でも利用のグラフをお見せしましたけれども、あれは基本的には、私たちがいる教育普及係が対応した人数ということになります。当然、教育普及係を通さずに、自由に来館して帰っていく学校団体やもしくは児童生徒がたくさんいらっしゃいます。

仮に予約なしで、来てですね、「学芸員の方の説明をお願いしたいんですが・・・」とかつていうリクエストがあつた場合は、人数にもよるんですけども、対応は難しいですね。やっぱり事前に連絡いただけないとほかの仕事をやっていたりすることもありますので、多くの方はもう自分で来て自分で帰っていくという方がほとんどで。

なので、我々も館内で気づいたら、または「何か学校団体あそこにいるぞ」と思って聞いたら、「自由に来て自由に見て帰っているお客様です」なんというのを現場の監視している人間から聞いています。おそらく、そういった方はたくさんいらっしゃると思います。なので、予約なしの方への対応とかつていうのは基本的には自由に来て見て帰る方々なので、ほぼしていないというのが答えになります。今、追加でお話しさせていただきました。

◇永恵 私も追加として、先ほど郷さんがおっしゃられた館外での活動といったものについてですけど、基本的には現代美術館さんと同じく、相手先からの要望があつてからスタートしています。来館者を増やそうという



永恵 裕和



ことで、学校に向けて学校展示をこちらからしかけています。ご要望があったから、例えば「出前授業してください」とか、「火起こし体験してください」とかっていうご要望があればするというような形に基本的にはしております。

先ほど、予約なしの団体が来た時にどうなのかという話があったと思うので、私もお答えしようかなと思います。学校団体には基本的に全て予約をいただいています。ただ、それは基本的に校外学習なので、向こう様も予定を立ててから、バスとかでいらつしやったりすること多いのです。なので、学校団体は、事前にホームページを調べられます。調べた中で予約の必要を知っていたり、あるいは行きたいんだけれど、前もって問い合わせの電話いただくときに、こちらからよりよいものをご提供したいので、予約していただく格好になっています。また放課後等デイサービスさんも、一般団体でも突然いらつしやることは当然あります。その方々については、もちろん自由に見学いただいています。また、実は、当課です、展示フロアといましようか、来館者の皆様がいらつしやるフロアと同じフロアに課室がありますので、対応できるときには、対応しているところです。ちょっと追加みたいなどころでしたが、そういうお答えになるのかなと思います。

ですから、別の学校様がいらつしやっていると、別の事前予約が入った団体がいて、対応できない場合には、「どうぞ、自由にご覧ください」っていう形で対応しているということですね。

◆小林 私の発表にちょっと補足させていただくところでは、当館の組織体制の話を見せていただけたかなと思ってます。郷さんと永恵さんの方からはお話しがありました。キヨロロは小さな博物館なんです、だいたい中のスタッフが11人です。そのうち学芸スタッフが4人になります。他は事務職員と受付の職員と、フィールドや室内作業の管理員・館長で構成されています。

いただいた質問にも関連するんですが、基本的に学校さんの対応だとか、プログラムの企画だとかっていうところは、学芸スタッフ4人でまわして

いるところが多いです。実際には4人でできないところもあるので、その分に関しては、特に、教育旅行・修学旅行さんの場合は、外部のインストラクターの方をお願いすることが結構あります。だいたい5〜6人ぐらいいは、常にこの方に今日お願いできるかなという感じで、みんな考えているぐらいの人がいるんですけれども、そういった方をお願いしたりとか、あと幼稚園・保育園さんへの対応に関しては、地域内で、森の幼稚園を主催している団体さんがありまして、そこちよつと協働した中で保育園に出張していくってことは過去にも何回ありました。そんな感じで配置しています。

◇永恵 ありがとうございます。八田さんどうでしょう。先ほど終わりましたので。

◆八田 そうですね、終わりたてなのでそこは特にないですね。

◇永恵 わかりました。

今日いろんな発表の中で、いろんな質問が出てます。また、事前に申し込みのときにいただいている質問もあります。この間、発表者4名は打ち合わせもしております。ですから、もしかすると発表の中で触れたことも、いただいた質問の中にあるかもしれません、改めて、質問に答えるような形で議事進めていきたいと思います。



#### 受け入れ前の対応・特別支援学校等の受け入れについて



◇永恵 まず、受け入れ前の対応について、先ほども予約なしの団体様がいらつしやた時にどうするのか、みたいなどころがありました。例えば、受け入れる際に、学校様との協議や打ち合わせをしているのか、また内容はどうかといったことまでしているのかという質問が挙がっていました。

発表の中で触れたつもりでしたけれども、考古博では、来館かオンラインかは問わず、基本的には打ち合わせをしています。打ち合わせする時に



小林 誠氏

は、申し込みいただいた、来る時間・帰る時間や当館で何をしたいか等を勘案して、こちらでA～C枠に当てはめて、こんなタイムスケジュールでいかがですかというのを返します。それに対して、ご意見をいただいて、この予定で大丈夫ですかね、というところを打ち合わせをしています。コロナでなかなかちよつと、7つのプログラムのうち2つしかしてませんが、言ってしまうと当館の場合は、パッケージ化して、館内見学とそれを組み合わせますかみたいなどころを打ち合わせをしている、いう形ですね。これをする事で、双方の思い違いがなくなったりするので、当日の来館がスムーズになるのは事実です。なので、来館受け入れに際して、下見や打ち合わせをやっているという回答になります。

◆ 郷 私からも一言。私の発表の中で、受け入れの順番であるとか、事前打ち合わせに関してお話をしたので、ほぼお答えはできてるかなと思います。ご質問の中にですね、特別支援学級の来館のときの特別の対応はされておりますでしょうかというのがありました。打ち合わせする時の校種の中身だと思うんですけど、これに関してはですね、やはり、そういう学校が利用したいとお問い合わせがあった場合は、特に、全員が車椅子であるとか、もしくはそのストレッチャーに乗っていると、あと自立歩行ができる子は何人いるのかとかを聞いています。あとはどういう特別支援かによるんですけども、コミュニケーションは直接とれる子供たちが多いだとか、先生が子供たちの表情を読み取りながら、先生が介在することで、コミュニケーションをとれますなどという実態についてすごく、お話を聞きます。

また、館内を移動するときにですね、大体は皆さんバスでいらつしやいます。当館の場合、学校団体の利用の場合は、バスを停める駐車場が、無料で使えますので、大型バスですと3台ぐらい止めることができます。そういった場所の確認であるとか、ここで降りてこのスロープを使ってエントランスから入ってくださいという動線の確認ですね、その辺を丁寧にやっています。

あとはトイレの問題です。いわゆる多目的なトイレを使って、来たとき

にですね、すぐにそういったちよつとトイレを済ませてからということ、このことにそういうトイレがありますとかをご案内します。当館は数年前に改修をしたんですけども、やっぱりトイレの大きさはなかなか変えられなくて、ベッドはつけられなかったんですよ。なので、ベッドが本当ならトイレについていると、便利なんです、そのかわりに救護室にベッドがありますので、ご案内しています。だから、施設のどこが使えますよっていうご案内を特に丁寧にやっています。

内容に関してはですね、これはもう特別支援とか関係なく、通常のような形でやっているので特に鑑賞のプログラムの内容自体は変えているということはありません。例えば、先ほど言ったように、子供たちの表情からなかなか読み取りが難しい子の場合は、先生を通じて、「今、こういう反応してます」ということを聞きながら、やりとりをしますので、プログラム自体は特に、特別支援だからといって、特別なことはしてありません。それでお答えになりますでしょうかね。

◇ 永恵 私もそれに答えていなかったたので、先に答えます。

特別支援学校・学級などの来館時の特別な対応がなされておりますでしょうか、という質問ですが、まず打ち合わせは通常通り、先ほど言った事前の打ち合わせをします。その上で、児童・生徒さんの状態に応じて、例えばバス利用の場合、当館も無料のバスの駐車場があるんですけど、ちよつと館から離れています。ですので、館の横まで横づけするかどうかですね、またはストレッチャーがエレベーターに入るかどうかを説明したり確認したりしています。

館ができて15年ではあるんですが、多目的トイレも2つございますし、救護室も設けていますので、体調不良の訴えがあった場合には、そちらを利用していただいています。

また、1学期であれば、学校団体様にはABCの三つの枠で対応しています。その中で、移動に当然時間がどうしてもかかってしまうとかなどの配慮が必要な場合は、他の時間枠の学校様の前後の時間をずらしたりとかっていう形をとっています。





プログラムですが、これも児童・生徒の状態によります。館内見学は基本していただくんですが、少しプログラムを変えることがあります。今日発表では触れなかったんですが、「埴輪マグネット」っていう、紙粘土を銅鐸とかの形をとったシリコンの型にぎゅっと押しつけて、さわってもらったり、紙粘土をぎゅにゅぎゅにゅしてもらったりするといった、知覚で体感してもらおうプログラムを提供しています。ほかに、楽器ですね。銅鐸を鳴らすもそうですし、出土品の中で、木製品の琴や、なんて言ったらいいんですかね、6枚の板をつなげて箱状にしたものがあって、それを太鼓みたいに上からバチで叩く体験があります。そういった音を体験してもらおう、聞いてもらおう、実際に触ってもらおうというようなものです。今あるプログラムの中で出土品でも音を鳴らせる楽器なんかが一番わかりやすいので、そういったものをプログラムとしては扱っています。当館では、児童・生徒さんの状態に合わせて、プログラムは今、手持ちのものを組み替えて使っている、提供している状態ですね。

◆小林 わたしは発表の中で扱わなかったかなと思ったんですけど、学  
校さんとの打ち合わせや協議に関してですけれども、基本的に1ヶ月から

2週間ぐらい前に連絡をいただいています。その手法は主には電話です。メールってこともあるんですけども、基本は電話で連絡をいただきます。そこで先生方の目的とかゴールをお聞きした中で、どういった内容でやりますかねと相談します。

今、学校でどういった学習をしているかについては、私たちのほうから必ず聞きます。いま子供たちが学んでいることをに繋がるような、私たちのほうの準備をしておきます。それは扱うもの・扱う生き物であったり、使う言葉であつたりというところは注意するようにしています。

子供たち、何が好きですかねっていうふうな話も聞くんですけれども子供たちの今興味関心があるものを紹介したりしますね。例えば、『鬼滅の刃』がブームだったところは、ワラで作った長靴なんかをですね、紹介するときに、「今これはいてんのは、竈門炭治郎のぐらいだよね」みたいな話をする、どっと受けるんですけど、そんな話を入れたりとかすること。も先生との話の中で、アイデアを出して行くところだったりします。

さらに教育旅行の場合には、先生方に、どういった行程を経てキヨロロに来るか、もしくはキヨロロの後にどこに行くのかについての、必ず聞きます。

例えば、キヨロロの後に田植え体験をするということであれば、こちらでの体験の中で田んぼとの繋がりの話をちよつと多めにしてあげるだとか、あとはキヨロロの体験の前後で、例えば、地域の方と関わって藁草履つくりますとか、そういうったものをつくるのであれば、暮らしの話をちよつと、多めに強めにしましょうかねっていうふうにインスタクターの皆さんと事前に共有した上で、当日お話しする、体験にするっていうふうにフィックスしていくところが多いかなと思います。

あとは特別支援学校への対応に関しては、私たちの方もその状態次第と  
いうところが大きいかなと思います。事前にお話をいただいて、先生と決  
めていくことが主なんですけれども、割と、外での体験に関しては、私た  
ちのほうから話をすることや、散策・案内をするっていうところよりは、  
採集系の、体を使って生き物採集するものを選択されるところが多いかな

と思います。さらには、木工クラフトを館内で体験できる場所があるんですけれども、そこでのコンテンツを選ばれる学校さんは特別支援の場合は、多いかなというふうな印象ですね。

◆ 郷 追加でよろしいですか。特別支援学校への対応ということで追加なんですけれども、特別支援の生徒さんたちの中には、てんかんであったり、光に過敏だったり、あと音過敏というお子さんがいらつしやいます。特に現代美術の作品の場合、先ほどちょっと紹介しましたが、光がすごく明滅していたりとか、暗いお部屋で何か映像を流していたりとか、音が出るいうものがあります。そのため、たまたま来館するタイミングでそういった作品がある場合には、先生に実際に見ていただいて、このぐらいの光や音は大丈夫ですかねって確認はします。児童生徒の状態に応じた作品の選択っていうものは、特に気をつけなければいけない点だなと思つています。

◇ 永恵 ありがとうございます。突然いらつしやる学校様については、どの館でも、その時に、できる限りの対応をしているいうことですね。予約されて、あるいは事前にご連絡いただいて来ていただく学校様向けには、必要に応じたところで、打ち合わせといましようか、何がしかの形でしていくと。おそらくよりよいものを、ただ通り過ぎる通っていくだけではなくて、さっきの小林さんの話が あったみたいな、前後の話を聞いてもう少しちよつと話を傾斜させるとか、あるいは、その状態、児童生徒さんの状態を確認して、プログラムを組み立てていくところとは、どこの館も共通項になってくるのかなと思います。逆に言うところをしないと、難しいときがあるってことですね。博物館に来る・ミュージアムに来るっていう目的が合っている、それ以上のところで折り合いがつかない、希望されたものがお互いにできない、というつらいところになってくることもあるかと思っています。



学校側から見たミュージアム



◇ 永恵 ちょっとミュージアム側の話ではありましたが、学校側からしたらですね、やっぱり、事前の来館を含む打ち合わせをするっていうのは、教員のみならず、教員の側からもミュージアムに求められるものだし、学校側でもしたい・しなきゃいけないと思つていらつしやるのか、できたらいきたいぐらいか、そのあたりどうなんでしょうか。

◆ 八田 それこそ博物館を活用したいという先生であれば、事前打ち合わせしたいという方もおられると思うんですけど、例えば、年間指導計画で位置付けて、毎年恒例の行事になって、行かないといけないところになっていると、なるべく省略して博物館の方に丸投げしてって方はやっぱりいると思います。

◇ 永恵 どうしても一定数いらつしやるわけですね。そういった状態というか決められているから行くんだみたいなところですね。ちょうど最初発表の中で、いろんな想いというか、学校の先生方の中でも、「学習指導要領にあるから」、あるいは先ほど言ったみたいに「丸投げしたら、ミュージアムがしてくれるからラッキー」という想いもあったかと思えます。

八田さんの印象でいいんですけど、「丸投げしたい」とか、「書いてあるから行かなあかんや」とか、クランクやその周辺に限られるかもしれないですけど、そういう先生がどのくらいいらつしやるんですか。

◆ 八田 周りの教員を例えば100とすると、98%までが、そもそも博物館を活用できることを知らない、いわゆるスタート地点にたっていないと思われる方です。残りの2%の教員が博物館をものすごく活用したいという人だと思います。

例えば、今回の発表の事前申し込みの方の所属を見ていても、ほとんど博物館関係者と思うんですけど、1人2人ぐらい学校の先生がおられるので、おそらくそういう熱量がある先生が、博物館活用したいなっていう残りの2%ぐらいかなと。

ただ、自分が生まれ育った土地で教員ができ



八田友和氏

ているっていう先生ほとんどいないと思っています。自分が生まれ育ってもないし、なんだったら赴任して初めて来たみたいなんだと、たぶん地域に博物館があることすら知らない先生っていうのは結構多いんじゃないかなと思います。

◇永恵 それはあれですか。いま博物館の話でしたけど、いわゆるミュージアム全体として見たときに、美術館でも同じような状態ですか？それとも美術館は違った感じですか？

◆八田 同じような感じだと思っんですけど。

◆郷 同じだと思いますよ。先ほど私の発表でも毎年の年度始めというか、年度替わりのときにパンフレットを配布しますって言いましたけれども、あれはね配布し続けなければいけないですよ。というのはやっぱりそれはミュージアムを知らない方たちが、いまだにいらっしやるからなんですよね。美術館が、学校受け入れてますよということをご存知ない方がやっぱり毎年いるので。あと、知っていてもね、地理的に遠くて来れないっていうこともあります。

東京都でなくてほかの地域もそうでしょうけど、先生たちって異動するんですよね。そうすると、遠くの学校だったんだけど、今度美術館の近くに異動になったので、来られるようになりましたという先生もいらっしやいますし、逆にいつも利用してたんだけどちょっと異動で遠くなっちゃったので、残念ながら利用できなくなりました。でも、次の先生には引き継いでおきましたからっていうようなことで、今まで使ってなかった先生に使っていただけるようなことがあるので、もうそれは本当に先生たちの口コミもすごく大きいですね。

ただそれはやっぱり一定数の数しかないんですよね。爆発的にどんと増えるということではなくて、だからもう常に言い続ける、宣伝し続けるっていうことは、こちらの態度としては非常に重要で、そうしないと、特に学校連携は継続していけないと思います。

◇永恵 ちょっと八田さんに無茶振りをしたかなと思います。今日は全学校代表みたいになってます。ミュージアム側が3人もいて学校側は1

人っていうのはなかなか発言が難しいところになってます。

印象ではありますけど、先ほどお話しいただいた2%のやる気のあるといいましようか、「ミュージアムを活用したい」と思ってる方々が2%ぐらいしか感覚としていないっていうのは、僕らは逆に大半の教員の方へアプローチしていけることだと思います。先生方自身ですね、「面白い」・「ミュージアムを使いたい、楽しんで活用したい」っていう想いに、どこまで迫っていけるのかが問われてくると思います。



#### 学校等団体の受け入れ方法・幼稚園や保育園の受け入れ



◇永恵 質問の中に、受け入れの方法はどうされてますかというのもありました。受け入れの方法のうち、団体の受け入れ数や規模、滞在時間という質問です。

当館ではコロナになって以降、A B Cという三つの枠で、受け入れをしております。これは、1日あたりA B C枠の3校で受けてるんですが、稀にですね、すごく学校規模が小さいところで、お互いに良いですよという場合にはもう1校プラスします。例えば、A枠に2校いる、大規模校とすごく小規模校がいらっしやるとか、という形をとったりもしています。ただ、コロナ直前までは、基本的には相手様のご都合にできるだけ沿うために、1日当たり4校をマックスに受け入れていたそうです。さらに、それ以前には最大8校を同時に受け入れるという状況があったと聞いております。それは私自身が体験をしていないところですので、わからないんですが。

コロナ禍以後、1日の受け入れ数を3校に絞ったことによって、逆にゆっくりと、1校のみで1時間の館内見学を確実にしていただくことが可能となりました。当館も別にめちゃくちゃ展示室が広いわけではないので、同時に複数校いらっしやる場合、見学路も一方通行なので、どうしても混み合ってしまうことがありましたが、結果的に各学校1校ずつ、ゆっくり見学していただけるようになりました。先生方からも、自分のところの学校の児童・生徒を見れば良いというところがあるので、連れていく上では



すごく、校外学習としてやりやすいんだっていう声も聞きます。そのあたりは、どうですかね郷さんとか。東京都現代美術館は大きかったと思うんですけど。

◆郷 私ども教育普及係は3人しかいないので、1校で3チームっていうのが最大限の分け方で、午前中に1校午後に1校っていうのがマックスですね、今、やり方としては。

質問の中にキヨロロの小林さんのほうに、幼稚園・保育園の対応についてきてるんですが、今お答えしてもいいんじゃないですか、今のこのタイミングで。

◇永恵 そうですね。

◆小林 キヨロロもですね、実質内部で、教育普及で動けるのが4人なんですけど、常に4人出勤してるわけじゃなくて、2〜3人のときもありますので、基本的には4人をマックスとして受けています。あとは、さっきも、ちらっとお話ししたんですが、外部スタッフ、外部インストラクターの方をお願いをして回すってこともあったりします。

ご質問いただいた保育園・幼稚園さんへの対応ですけれども、基本的には学芸スタッフが中心に対応しています。キヨロロの場合は、だいたい午前中に1校、午後に1校というのが限界です。館の規模からしてもちよつとできないところがあります。外でのプログラムを回すところが多いので、1校さん最大120人ぐらいであれば、三つ四つに分けて、外でのプログラムと中でのプログラムをローテーションしながら、2時間ぐらいを過ごすっていうことが可能だったりします。館に同時に入ることができる人数を、今はもう制限ないんですけど、1時期は50人ぐらいにしたときがあったんですが、この回し方でだいたいそれはできるかなというところで回していますね。

◇永恵 ありがとうございます。

考古博では、幼稚園・保育園、いま小・中学校の話が、私の発表の中で、学習支援課がどうもやってるんだなというのをご理解いただけたかと思うんですが、幼稚園・保育園も同じです。学習支援課の同じスタッフが、

基本的には対応しております。

さらに今はですね、特別支援学校での教育を経験した再任用の教員がいたり、あるいは昨年度、このフォーラムで、ユニバーサルというテーマでお送りをさせていただきました。そのときに担当したものが、在籍してますので、特別支援学校さんとかがいらっしゃる場合には、その2名がつくことが傾向としては多いです。ただ当然、その2人もずっと出勤してるわけではないので、2人体制で入ってやり方といましようかね。アプローチの仕方を学んでいって、どの職員でも対応できるような形の構築っていうのを努めているところです。



#### ミュージアムスタッフと指定管理者側スタッフ



◇永恵 今入ってきた質問の中に、これはここでのいいのかな、ちよつと自信がないんですが、事務職員で管理部門を担当されている方ですね、明石市の木村様です。当館には学芸員として採用された者と、事務として採用された者がいますが、たまたま事務職員も学芸員資格を取得しています。指定管理者制度を導入しており、業務分割をしており、お互いのテリトリーにどこまで入り込んでいいのかを模索しています、という質問がございました。

あとですね、同じく木村様からですね。今回、ご紹介いただいている学校とのプログラムは担当学芸員のみで企画運営してるんでしょうか？事務担当職員の関わり方を教えてください、という質問です。これは、施設の体制・運営の話になってくるかなと思うのですが、今取り上げます。

当館では、学芸員と事務担当職員の区分け、課の配置がはっきりと分かれています。いわゆる学校向けのプログラムを担当するのは学芸員、その学芸員には専門職と当課に配置されている教員が該当をしています。

指定管理者制度の話は、当館には該当しないのでお答えできません。ちよつと答えがないですね。

あれですかね、明石市さんは、同居していらっしゃるんですかね、直営部門と。だからこの質問なのかなと思います。

ですので、事務担当職員との関わり方という点においては、当館ではパキッと分かれていると。担当する部署が違うし、事務の内容も違ってるんで分かれているというのが回答になります。郷さんいかがでしょうか。

◆郷 現代美術館はですね、指定管理で運営されております。東京都歴史文化財団という財団が管理している美術館になるんですけども、もちろん、いわゆる事務方と学芸の部門っていうのがあります。現代美術館はですね、先ほど学芸員18名いますって言いましたが、現代美術館の中に、もう二つ、別の課というか、組織が合体しておりますので、職員が60名以上いるんですね。

そうなっていると、それぞれの部署が何やってるのかっていうのはわかりにくくなります。もちろん、スタッフの中には、外にお願いしてる外部の業者の方たちですけども、監視をしてたり、警備をしている人だとか、清掃してる人たちとか、あとは、いわゆる建物の空調だとか、そういった施設管理してる人とか、事務方の人間だとか、シヨップ・レストランとか、そういった人たちのトップの人たちが集まってるですね、月に1回情報交換してるんですね。それによって、今月はこういうことが行われます。例えば我々ですと、今度こういう学校が来ますとか、こういう学校教育のプログラムが行われる予定です、展覧会ではこういうことが今行われてますっていう、情報交換をすることによって、全体で何が今行われているかということを見える化しています。

そういった会議を通じて、というのもあるんですけども、もちろんこの会議だけで、情報交換するんじゃないくて、何かがあるときには、直接の担当の方にお話をしに行ったりとかしています。例えば、学校団体が大口でくる場合は、特に監視の方ですね、展示室で作品の状態を見ていただいている方ですけども、にも連絡をしておかないと、突然何十人何百人っていう人がワーって入ってくるとやっぱびっくりしちゃいますんで、明日はこういう子供たちが来るんだなということ、もちろんその回り方であるとか、あるいは誰が担当してるかっていうのは、シートをつくって事前に情報として渡しています。その業務としてやってる内容は全く違うんですね。

れども、お互いにそれぞれのことを知っている状態というのは、館全体として作っています。そういった工夫というのかな、日頃の仕事、業務のやり方をしています。もちろん、管理の方にも我々の意見を伝えたりとか、逆に向こうからこっちに意見を言っていたくともありますので、なんていうんですかね、いわゆる風通しのいいような環境というのはあるかなと思います。

◇永恵 どの館の皆様も風通しがいいところだと、いずれの館も訪れた私は思っています。小林さん、キヨロさんの場合は、職員数が少ない中で、どうされてますか。事務担当の方も出られたりとかいうこともあるんですかね。

◆小林 キヨロは十日町市の直営になるんですけども、スタッフだいたい11人ぐらいの体制の中で、基本的には展示を作ったり、イベントを企画した実施したり、研究活動するのは学芸スタッフの仕事です。

ただ、例えば、週に1回ですね、金曜日の朝礼後に、ミーティングの機会を設けてまして、この先1週間に実施されるイベントだとか学校対応をみんなで共有します。で、人数が多い場合は何班に分けて、こういうスケジュールで動きますということとか、この学校さんの場合は、入館券の準備が必要ですか、今だとスノーシューを履くんですけども、その準備が必要なので、この日はちよつとスノーシューを出す時に手伝って欲しいですっていう話はしっかりしておいてですね、円滑に進むようにしてま

すね。  
10人が同じ部屋で過ごしてますので、基本的に意思疎通は、普段、非常にスムーズにできてると思います。私たちの話も事務方は聞きますし、私たちが何か楽しいことで盛り上がってくると事務方の方がどんどん入ってくるんですね。「それどういうこと」って話をして、両方関わりながら、楽しくやってます。

◇永恵 ありがとうございます。続けてなんですけど、小林さんに質問が入っています。発表の中で触れられた外部スタッフさんっていうのがありました、どのように集まった方なのですかっていう質問が来ておりま

すが、いかがでしょうか。

◆小林 基本的には定年退職されて、お仕事はされてないんですけれども、地域の自然に詳しいとか、教員の経験があるっていう方が今外部インストラクターとしております。外部インストラクターの方に関しては、年に1回ぐらいですね、研修を行ってきました。実際にキヨロコでこういったプログラムを提供するときに、私たちはこういうことに気をつけてやりますとか、こういうときにこういった話し方をすると良いですよって、コツとかスキルをみんなで共有するんですね。で、学芸スタッフの専門性をお話ししたり、地域の方から地域の話を聞いたりとか、そこでいろいろ情報交換をして、全体としてスキルアップだとか、研鑽をするっていうところで、外部スタッフの方々の位置付けを行っているところです。

若い方がちよつといらっしゃらないのが、課題でもあるんですね。世代交代だとか、新しい方々の加入に関しては大きな課題ではあるんですけども、そういう形で回っているというところが、現状です。

◇永恵 今ちようど木村様からも、「館内で同居しているメリット・デメリットもあるところです」とチャットに入ってますね。当館も、カフェや、博物館の受付部門は別の事業者になりますので、そこと来館対応について打ち合わせをします。また、代表電話が掛かると当館の総務課に繋がりますので、全体の予定表を共有したりしています。また警備であれば、当日のバスの出入りを含めて、事前に連絡をするように努めているところです。

たまたま事務職員も学芸員資格を取得してしまっているとあるのですが、来館される方からすれば、前に立てばみんな学芸員さんに見えますから大丈夫じゃないですかね。見えますからというとな話ですけど、おそらく「学校ではない場所」で、学芸員や博物館の人から話を聞けるという特別感やプライム感っていうのも、学校がミュージアムを利用するところで大きいのかなと思っています。



ミュージアムのボランティア



◇永恵 さて、チャットボックスが徐々に徐々に埋まって参りましてですね、うれしい限りです。ボランティアさんの関わり方はどんな感じでしょうかという質問が一つ入ってます。

当館も、ボランティアさんの養成等を進めています。登録だけで<sup>130人</sup>、今実際いらつしゃいます。開館以前から養成をやっています。学校団体の対応については、館内で「スポット解説」ですね、ボランティアさんに展示室の各所に立っていただいて、児童・生徒が見に来たときに、適時解説をしていただいています。もちろん、プログラムをする際には、一緒に手伝っていただいたりしています。いまコロナでお休みしています火起こしや勾玉作りだと、どうしてもマンパワーが足りないのです、お手伝いいただいています。

今日もちよつと来てましたけど、ボランティアさんの中には、自分で作った石器を持ってきて、「自分で使って切ってみなよ」って感じで児童に問いかけて、実際に紙でこうやって、びゃつと切ってみるって体験をしている人もいます。こちらが予想もしていない体験プログラムを勝手にしていますで、いろんな取り組みがあるなと思っています。

年齢構成も様々で、ほんとに若い方もいらつしゃれば、ご高齢の方もいらつしゃいます。ただどうしても、若い方や現役世代だとまだまだ仕事とか学校とかあつて参加できないですが、いろんな方に活躍いただいて、学校団体が来ていただくことにご対応いただいています。

郷さんどうですかね。

◆郷 現代美術館では、私の発表の中で触れましたが、ボランティアさんにはギャラリートークを主にやっていただいている、いわゆる館のいろんな雑務であるとか雑用をボランティアさんが担っていることは、ないんですね、もうギャラリートーク専門ボランティアさんになります。



ボランティア養成のようす



アルナルド・ボモドーロ  
《太陽のジャイロスコープ》 1988

重さ5トンの球体は、中世の天球儀から着想を得て作られたという。私はこの作品を見て、2つに分裂した分厚い円盤の表面に刻まれた幾何学模様には、精密な都市空間を思い浮かべた。一方、そこに走る鋭い裂け目からは、マグマのように吹き出す社会の矛盾や人々の不安を連想した。誕生から30年余り。その間、生々流転する日本社会をじっとみつめてきた巨大な球体は、この静かな部屋に佇んで何を考えているのだろう。



ガイドスタッフ M

『つぶやきトーク』 ([https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/web\\_guide2020.pdf](https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/web_guide2020.pdf))

展示室で実際にいま展示しているものがデータになつて閲覧できるんですけども、こんな感じで、A4よりはちよつとちっちゃめなんです。ガイドさんが自分がトークし

先ほど学校対応に対して教育普及係が3名いるので、3チーム分かれて学芸員がきますって言いましても、他の館ではですね、ボランティアさんが学校対応に付いて一緒に巡るといふ館ももちろんありますので、それはそれぞれの館のやり方によつて違つていふと思ひますので、現代美術館に関しては、教育普及が3名ついているんですね。ボランティアさんはコレクション展示室、主にコレクション展示室のギャラリートークを担つています。

今ですね、コロナ禍で、通常のやり方ができませんってお話ししましたが、ボランティアさんの活動する日数とかですね、期間もちよつと減つていふのが、「今」なんです。それで、新しい何かそのボランティアさんが自分の今までのトークのために、蓄えた知識であるとか、スキルを生かせないかなというので、展示室内に今はですね、『つぶやきトーク』というものを、貼つていふんですね。ちよつと画面共有させていふて皆さんにもお見せします。

これ当館のホームページです、ウェブサイトでこの展覧会とかいろいろチェックしていただくと、これ「コレクションを巻き戻す」つていうのが今やつていふコレクション展のテーマなんです。そこを見たいとですね、ここに出品日数やパンフレットなどもPDFで出てくるんです。ここにガイドスタッフの『つぶやきトーク』というのがあります。

たい作品を一点選んでですね、いわゆるつぶやきなので、ツイッターの文字数くらいの200文字から250文字程度で解説書いてくれます。ガイドさん視点で書いてる解説なので、学芸員が書いていふ、ちよつと小難しい感じのものとは違ふんですね。ここにイラストがあります。これガイドスタッフさんのイラストなんですけど、皆さんこれちよつとね、見てもわからないと思ひますが、非常に似ていふんですよ。本当に似ていふ特徴掘んでイラストレーターさんが描いてくれていふ。何かこういつたパネルもですね、ちよつとイラストが入ることによつて、何か親近感が沸くというか、文字よりも、イラストが入つていふ、こんな感じで、本当にサクッと読めちゃうんですけど、いろんな方があります。

これを、学芸員の書いた解説のパネルだとかがある横に、小さくガイドスタッフの『つぶやきトーク』もあわせてはつていまして、一般の来場者の方もこれをよく読んでくれます。非常に好評でアンケートにもわかりやすいですつていふようなことが書いてあるんです。学校団体が来たときにも、子供たちは今、自由に見てもらふという体制をとつていふんですが、こういったものの存在もちよつとお伝えすると、子供たちは、全部読める文字量です。内容です。非常にこれもね、子供たちが読んで、役に立っているんですね。役に立っているというか、情報の収集としては有効に使われているので、思ひぬところでガイドさんの『つぶやきトーク』がですね、実は子供たちにも、わかりやすくなつていふつていふのが、今回、コロナ禍で新しく生まれたものです。これは是非皆さんホームページでも見れますので、ちよつとこれ読みながらどんな作品か逆に想像していただいふて、見ていただきたいと思ひます。

本当にうちのガイドさん個性豊かな方たちが、多いので、多いというか皆さん個性豊かなので、書きつぷりも、それぞれみんな違つてですね。もちろん原稿のチェックは、コレクション担当の学芸員にもしてもらつていふて、事実関係だとか、内容のチェックはされているものを掲示していふので、内容の間違ひつていふのはほばないと思ひます。これもボランティアさんの活躍の仕方ということで、ちよつとご紹介させていただきます。

◇永恵 私が伺った時に見て、面白いなあと思いました。こういった取り組みって、ちょっとしたことなんですよ。ちっちゃくはるっていうもので。コロナで不自由、思ったようにできない中だからこそ、生まれ得た発想のかなと思っていて、素直に良いなと思っています。まねっこしたいなと思います。

◆郷 イラストをつけるのが、ミソです。

◇永恵 確かにそうですね。「あの人だ！」ってなるのもいいですし。では、同じくボランティアさんとの関わりについて、小林さんいかがでしょうか。

◆小林 キョロロに関しては、例えば、賃金とか費用弁償が発生しない形でのミュージアムへの関わり方の、いわゆる組織的なものは、実は無いんですよ。これはちょっと私たちも課題だと思っているところで、むしろ勉強をしたいところではあるんです。

似た形であれば、友の会かなと思ってます。これは、例えばキョロロのイベントのお手伝いとか材料を事前準備する時に、無償でお手伝いお願いしますってことで来ていただく形であるとか、あとは、友の会の方で、結構組織としてよりも個人で関わりたいっていうふうな思いで関わってるって方のほうが多い形になります。

例えば、若い方でも、そういった方々がいらっしやってます。高校生のときにキョロロでちょっとアルバイトをしたんだけど、就職してから、年に1回必ずボランティアに来てくれる警察官がいるんです。すいません。職業言っちゃいましたね。彼は昆虫がすごい好きで、イベントの手伝いに毎年来てくれるんですね、無償で、私たちよりもとても詳しい方なので、重宝というか助かっているところです。そういった結局個人ベースで想いがあって関わり、無償でもいいから関わりたいっていう方々はある程度いるんですが、組織としてはミュージアムの活動の中で、成長できてないっていうところは、私たちの課題でもあります。

◇永恵 各館でいろんな対応といましようか、ボランティアさんとの関わりや、そもそのボランティアのあるなしから含めて、館ごとの分野

を活かした取り組みの仕方なのかなと思ってます。

◆郷 ただですね、ボランティアさんも今メリットの話ばかり出てるんですけど、デメリットもあってですね。いろんな、いわゆる個性的な方が多いので、そういうのを取りまとめる苦勞ももちろんあります。

ボランティアだから何でもやっていいんだっていうことには当然なりませんし、ボランティアさんを、ちょっと言い方悪いですけど、管理しなければいけないので、そういった意味では別の日常業務の中ではまたひとつ違うボランティア対応みたいな仕事をしていかなければいけないので、その辺は各館さんたぶんボランティアさんが居るところでは皆さん抱えている課題であつたり、問題だと思っています。新しくボランティアを取り入れるというのは良い面もあるんだけど、悪い面もあるってことは、ちょっと認識しながら運営していくのがいいかなと思います。

◇永恵 そうですね。当館でも開館以来、ずっと毎年養成していつておりますので、ボランティアは現在130名いらっしやいます。当然その最初の方と、最近の方とでは想いの違いとかもあつたりします。例えば館内でのふるまいの違い、ふるまいつていうのは、どういうふうにボランティア活動を進めるのかということですが、それぞれ違いもあつたりして、なかなか一筋縄というか、それだけで本当に一つ、こういうフォーラムができてしまうようなテーマなのかなと認識をしております。



#### ワークシートについて



◇永恵 さて、今までその受け入れ方法の話、あるいは組織体制の話について、論を進めて参りました。次にですね、ちょっと話題を進めまして、学校向けプログラムそのものについてに議題を移していきたいと思います。

まず一つ目、ワークシートを作っている際には学校の先生もその作成に参画されたのでしょうかというところ、質問が入っています。郷さん、現代美術館にもワークシートみたいなものあるんですけど、

◆郷 無いんです。無いんですけど、基本的にプログラムを考えたとき



に、先ほどの立体ワークシートって私が紹介しましたけど、あれは私が作っています。それを実際使う学校の先生とはですね、一応こういうものを作ったので、使い勝手どうでしょうとか、色を塗るのに、マジックがいいのか色鉛筆がいいのか、他の画材がいいのかっていうのは、事前にちよつと先生にやっていただいて、これだったら学校にこういうものがあるんで、こちらがいいですとかの意見を頂いたり、それからお試しですね、事前の使い勝手のチェックはしてやっています。

ただ、やっぱり先生と我々でつくってもですね、実際子供たちが使いたすと全然違うことが起きるんですよ。それで、「こうなっちゃうのか」っていうのが、もう本当に僕と先生で現場で見ながら、これはちよつと想定外でしたねっていうことがあります。むしろ面白い使い方をしてくれたり、改良点も見つかるので、そういうのは次の違う学校で同じプログラムやる時には、そこを改善しながらやっています。

そういう意味では、学校の先生も参加するというか、一緒に使い勝手をチェックしながらやるとというのが現状です。

◇永恵 私も小学校一年生の子供がいるんですけど、親が思っていないことをして、それがむしろよかつたりするっていうのが実際ありますね。書き順を逆に書くけどOKとかですね、アクロバティックな書き方になったりとかっていうのがあつたりします。

当館では、発表の中でワークシートを作ってますと発表で触れました。当館の場合は学芸員が作ってますね、小学校の、特に6年生で来る学校が多いので、この館の近隣に所在します播磨町内の4つの小学校の社会科担当の先生に見てもらって、それぞれからいただいた意見を反映しています。ちなみにワークシートもですね、「ワークシートさせたいんだけど自由にも見させてあげたい」っていうご希望にもこたえられるようなショートバージョンのものも作っています。時間配分については、小学校の先生と相談してですね、実際に試しています。小林さんいかがでしょうか。

◆小林 はい。ワークシートに関しては基本的には内部の学芸スタッフが考えます。常設展バージョンと企画展バージョンで、企画展バージョン

は2種類ぐらいつくることがあるんですが、それは初級編と上級編とかそういうところで、差別化します。

過去に学校の先生が関わった例は何点かあるんですが、それは、例えば、常設展と企画展をミックスした形で、ちよつとワークシートつくって、学校団体にやりたいんだけど、例えばこの問題とこの問題をピックアップしたいですっていうふうな話があつたりだとか、あとは、今こんなことを学んでるんで、ちよつとこういったシーンを学べるようなワークシートにできませんかね、というご相談があつたときは結構フレキシブルに私たちも本当に、ちよつとちよつとイラストレーター使って、変更できますので、ご要望があればフレキシブルに変えることができるかなという認識です。

◇永恵 やっぱり自館だけ、ミュージアムだけで作るのではなくって、当然お客様になる、来館される・対象となる相手ですね、教員と打ち合わせをしていくっていうこと、内容を調整していくこと、極論を言えばその学校ごとに調整するんでしょうけれども、ということは非常に重要な手段であるということかなと思います。

◆郷 ちよつといいですか。今のワークシート、学校だけではないんですけれども、一般向けのプログラムをつくるときもですね、先ほどの組織内の連携というふうな話に絡めて、例えば教育普及係で、今後こういうプログラムやるんで、こういうワークシートじゃなくて、ツールとかですね、作った場合に、一般のお客様には試せないもので、普段あまりなかなか現場に行けないような、例えば管理の人間だとか、経理の人間などに、今度こういうプログラムやるんだけど、例えばクイズの問題集だとか、そういうものを渡してですね、やつてもらいますよね。それで解き具合だとか実際に館内巡るんだけど、これでちよつと行ってみて、試してもらつて、実際の、本番に向けての内部でのチェックというか難易度や使い勝手のよさっていうのは、他の職員の方にも協力をしていただいて、やつたりもしています。

◇永恵 なるほど。当館でも、学校向けプログラムとして提供できるかもしれない卵みみたいな企画については、『週末の古代体験』という企画を



『週末の古代体験』のようす

やっています。本当に週末にですね、ゲリラライブ的に館内で試しています。

なるものならないもの、いろいろあるんですが、昨年末に私も、紙芝居をしました。自転車に紙芝居の板くくりつけて、サンタさんの格好をした課員と弥生人の格好をした私が飛び出していくと、で、たまたま来館された方向けに提供して反応を見てみるっていうふうなことをやっています。紙芝居だけではなくて、他の体験メニューなんかも合わせて試し、行っている状態ですね。なので、いろいろ試行していくっていうことと、その実験の場をちゃんと持つっていうところは大事なのかなと思っています。

今ですね、本県にあります自然系の博物館でございます、人と自然の博物館の井上様からですね、指導主事の教員の方が研究員に相談してワークシートを作成をされていると書き込みがありました。運用としてはホームページに掲載し、学校団体がダウンロードして加工して利用可能としていきますという実際の運用のあり方もお説明・ご紹介いただきました。八田さんあれですかね。相談されたら、別に断る理由はないぞ、どんどん来い、ぐらいの感じですかね。

◆八田 そうですね、断る理由は特にないと思うんですけど。ただ、ベネッセなどが行っているアンケートでも「学校の先生で一番足りない時間」として、小学校も中学校の先生も一番多い回答は、やっぱり教材研究の時間ですね。約90%の先生がその時間はとれないと回答しています。授業も過去のものを使い回しているというのが現状なので、個人的にはやりた

い先生もいっぱいいると思うんですけど、時間に追われてできないっていう方も多いと思います。時間の制約だけなのかなとは思っています。

◇永恵ほんとそこは難しいですね。我々ミュージアム側もですね、いろんな業務が実際増えてる中で、どこまで自分の時間とか自分の専門性を入れ込んだ、ここできかないものっていうのを作成・提供できるのかというのは突き詰めなきゃいけないと思うんですね。それをするのはパワーがいりますし、大変だと思っています。

また、学校の先生も今の話だと大変だという中で、よりよいものをつくっていくような努力、またそれはどういうふうにするのかっていうのはいろいろあるかと思うんですが、それこそ、今日のお話を聞いて、プログラムのまねっこからでもいいので進めていければというのがずっと思っています。



#### 学校との連携



◆郷 八田さんの教材を研究する時間がないっていうのは、現場の忙しさ見てたら本当にそうだと思います。当館が改修工事をやっているときに、3年ほど休館していたので、むしろその間は、美術館が使えないのでこちらから出かけていく、学芸員が出張する、というようなプログラムに力を入れたんです。その時にですね一番多かったリクエストが、「鑑賞をどうやったらいいかわからない」というものでした。

先ほどの学習指導要領にも表現と鑑賞の二つがあるとお伝えしましたが、表現のやつは、「普段物を作ったりやっていると、鑑賞はどうしたらいいんでしょうか」というな相談があったときに、例えば子供たちの作品を使うことも鑑賞の対象に入っていますので、先ほどの学習指導要領の中には、それは全学年入っています。これは別に美術作品を見たり、画集を見たりすることばかりじゃなくて、自分たちが普段作った作品も鑑賞対象なんですとお伝えしています。それを見る方法を、こういうふうに考えたのでやってみませんかという提案を逆にこちらからして、実際に授業で私がこの鑑賞の授業、子供たちの作品を使った授業やっ



てみます。それを先生たちが、実際見るわけですけども、あとは、こういうふうな普段、皆さん、子供たちと一緒に作ってる作品を使って鑑賞ができるので、このようなやり方でやってはどうですかというふうですね、こちらから提案したものを置いていくというかですね。学校に置いていつて学校がそれをもまた応用して自分たちで今度は、鑑賞の授業ができるようになるっていうのも、一つの連携の形かなというふうに聞いて思いましたので、そういう意味では自分たちにはない知識であるとか、方法論みたいなものをミュージアムにお願いして、逆に開発してもらったものを学校で利用していくっていうようなことも一つのやり方としては、あるかなとちょっと聞いて思いました。

◆八田 いまのご意見や取り組みは、学校側として、すごいありがたいです。本当にそう思ってる先生もかなり多いと思います。

たぶん小学校とかだと、好きな科目と得意科目が全く違いますって先生も結構いると思います。小学校だと、教育実習で算数とかだとやりやすいよって言われて、算数の授業をやったら算数が得意になってたけど、本当は一番好きなのは社会科という先生も多いと思います。そんな先生が実際に博物館にきて、こういうやり方もあるんだよっていうふうに、学芸員からレクチャーしてもらえると、本当に好きな教科なので、そっちを深めたいという先生も多くおられると思います。たぶんそのノウハウとか、やり方のリハーサルをしていただけるっていうのは本当にありがたいなっていま聞いてて思いました。

うちの学校でもして欲しいなと思いました。

◆郷 結構来た球は全部打ち返しているの。ただ、それがヒットなのかホームランかは別として。

鑑賞の中で、ひところ流行ったのが学習指導要領の中に、これ全科目に來たんですけど、いわゆる言語活動の充実っていうのが課題として新しく出てきたんですよ。そうすると、皆さん、図工の先生とか何をやり出すかっていうと、ギャラリートークをさせるということを考えていくわけですよ。これは美術館でも普段ギャラリートークをやってますので、子供た

ちにギャラリートークをさせたいんだけどどうやっていいかわからないので、教えてくださいっていうケースが結構、集中したことがあります。

ギャラリートークは、我々だって、何年もかけて習得しているものなので、たかだか45分の授業では伝えることができないですね。だから、先生もたぶん無理を承知で言ってるんですけど。

ただエッセンスは伝えられるので、こういう形でこうなってますよっていうのを伝え、かつ僕が最初やったものをですね、どうやってやってたという分析してもらってますね、子供たちに。そうすると、「こうしてた」「ああしてた」って出てくるから、「そうそう、そうなんだよね。こういう構造になっているよね、ギャラリートークって」っていうのを伝えて、あとは、みんなで頑張ってくださいみたいな感じで、45分で伝えられることは伝え、後は、学校の先生と子供たちの努力によって、ギャラリートークに仕上げていくということはやってました。

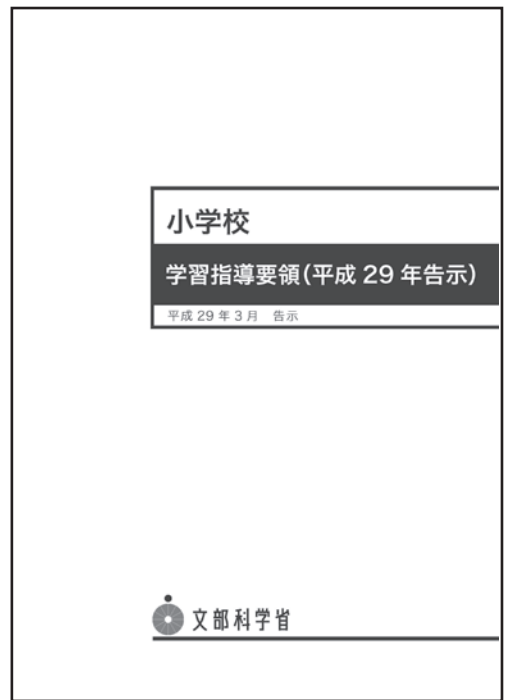
実際にそれは先ほど言った校内展覧会で、6年生が自分が選んだ各学年の作品の前で、保護者に向けて、ギャラリートークを展開するんですけども、基本は書いた台詞があつて、やっぱり読み上げてますけどね。ただ、流れは、僕がやったような感じになっていたので、そこをちゃんと意識してやってるんだなと思いますが、非常に何回も練習している子はもう、トークすること自体を楽しんでいるので、積極的に保護者を捕まえてやってる子もいました。だから、先ほど八田さんが言われたように、そういった学校のいろんな課題が新しく出てきますので、そこも学校は対応していく必要があつてですね、それに応じて、やっぱりミュージアム側も、学校側の対応に柔軟に対応してくっていうのは大事なんじゃないかなと思います。



#### プログラムと学習指導要領とのかかわり



◇永恵 今ちょうど、話の中で指導要領の話が出てきたと思います。事前にいただいている質問の中にもですね、学校向けプログラムをつくる際に、何を意識して作成されますかという質問がきてました。もちろん、学習指導要領もその一つだとは思いますが、どういったところに気をつ



小学校社会科学学習指導要領

けながら、あるいは意図して意識して作られてるかというところを聞ければなど思います。

思いますし、私の発表の中でも触れましたが、当館では「本物に触れてもらう」ことになります。本物に触れる・体感する・体験する、ですね。勾玉づくりとか、火起こしとか、今コロナで提供できないからといって来なくなった学校はいらっしゃらないんですけど、需要は当然あるんですよ。

プログラムを作っていく中で、どこの館でもできるよということだと、やっぱり魅力がちょっと薄いのかなと。むしろ当館でしかできないこと、例えば復元住居の中に入るとか、あるいは、本物の土器に触れるとかそういうところってというのは重視して、意識して作ろう、作っていいこう、あるいは作っていくものなんだよっていうふうに私教えてもらったところですよ。そういった点を意識していますし、逆にその学習指導要領という点については、私もですね、発表の中でも言いましたが、郷さんところに伺ったときに、あの図（郷氏作成の学習指導要領マインドマップ）を見せてもらって、ほんとにびっくりしました。ああ、なるほどなど。こういうふうな、もちろん共通言語をつくる上でも必要というところなのかもしれないんですが、なるほどそういう学校の期待への合わせ方、寄り添い方、というのがあるんだなっていうのがあって、びっくりしました。少なくとも私どもの課では現有メンバーでは欠けてたところかなというところですね、あの視点は。

なので学習指導要領のすべてではないと思うんですが、ある程度そこに寄り添っていくっていうのももちろん必要なのかなというところは感じました。郷さんどうでしょうか。

◆ 郷 すいません、質問読んでてわかんなくなっちゃったんですけど。

◇ 永恵 プログラム策定の際に何を意識されてますかって質問です。

◆ 郷 学校対応に関してですかね？

◇ 永恵 学校向けのプログラムを作る時に、ですね

◆ 郷 やっぱりさつき発表させていただきましたけど、何を要望されているかということを探らなければですね、プログラムができません。つまり、丸投げされてもお答えできませんというスタンスなので、まずそこですよね。

何をしたいかというところからプログラムをつくっていきますので、大ざっぱには鑑賞したいんですかとかね。あと非常に意識の高い先生の場合は、ここで体験したことを学校に持ち帰って表現活動に結びつけたいんですよ。なので、そういう何か美術館に来て鑑賞して、学校の授業で、それを表現活動にするっていう大枠な考えがある場合は、今こういう展示会があつて、こういうことが見れていろいろできますので、この表現活動についてはどうですかっていう話にまた繋がっていくことが可能なんですよ。だから、何を意識しているかという、何を知りたいのかを探るということにすごく意識を集中してます。

◇ 永恵 小林さんいかがですか。

◆ 小林 私たちも、基本的に学校の先生が博物館で使えるんだなって意識してもらえるかどうかということがとても重要かなと思います。結局、どの学年に対しても使うフィールドは一緒だし、使う展示も一緒なんですけど、その学校の先生が、どういったゴールを想定しているかによって、その内容だとかっていうのを考えていきます。やっぱり学校さん・先生がどういうところをゴール設定してるのかっていうところはよく聞いてやってますね。だから、そこはすごく意識しているところです。

学習指導要領というのは、やっぱり学校さんを受けるときに学習指導要



領に沿ってますよって一つの武器だと思っすよね。そういう意味では学習指導要領の読み込みだとかそれに対応していますよっていうことは、先生方に伝えるときには必ず言うようにしてます。やっぱり学校教育の中でそこは一つの指針になってますので、それに沿うような形で展開できますよってというのは伝えるようにしてますし、あとは、教科書で学ぶことが実際フィールドのもので学べますよというふうなことだとか。

実際に案内する私たちが、自然科学分野のプロパーなので、専門的なところも、実際に触れることができますよってというのは、当館の売りとしてお話しています。

◇永恵    ありがとうございます。確かにそうですね。専門性もそうですし、共通言語を見出すためにも、相手の手のうち知らなきゃいけないというところもそうだと思います。いろんなことがある中で、やはりその基準になってくるところ、自分の館の特性も含めてですけども、踏まえたプログラムづくりっていうのは大事になってくるのかな、と思います。

◇郷    ちよつといいですか。みなさん学習指導要領を取り上げちゃってるから、すごく難しいんじゃないかってたぶん聞いている人は思うと思うんだけど。学習指導要領読んでもらうとわかるんですけど、非常にね、詳しく書いてないんですよ。これ何をやればいいのかは実は書いてなくて。

◇永恵    そうですね！

◇郷    実際何やるかは、各学校に任されてるんですね。これ文科省のそういったなんか作ってる方達もおっしゃってるんだけど。文科省が作ってる学習指導要領ってほんとに最低限っていうかな、ねらいというか、大枠しかないの、それは学校それぞれやっぱり、特性もあるし、現状もありますから、そこに合わせて何ができるかは現場の先生たちが作っていくというのが、基本的なスタンスだと思います。

だから、私が作った学習指導要領を見たときにですね、非常にこれはどう解釈してもいいんだなっていうようなことがわかるわけです。ここにこう書いてあるってことは、こういう解釈で、こういうことも広がるので、ここで良いと思いますよって、逆に提案したり、達成するとここに到達す

るですよっていうふうになるので。なので、解釈の幅はものすごくあれば広くできているものなんですね。

◇永恵    本当に、私もあの図を見て、てっきりそういうものが書いてあるのかと思って、読み直してみたら、書いてないんですよ。あれおかしいな、と・・・

◇郷    何も書いてないですよ（笑）

◇永恵    いくら読んでも、あの図にならないし、載ってないんですよ。事前発表に合わせて、私も社会科の図をつくったときに、郷さんが「なんだ一緒じゃないですか」っておっしゃってて驚きました。読むとわかるんですけど、枠組みは一緒なんですよ。教科の特性に応じてちよつとずつアレンジされているだけで、ミュージアム側は、読んでおいたほうが良いけれども、だからといってそれに縛られすぎることもなく、ここにコミットできますよ、寄り添えますよ、寄り添いますよっていうところを提示・提案していけるようなツールになればいいのかなと思います。

今ね、ミュージアム側のどうしようかねって話をずっとしていたところだったんですけど、学校側からは、館内見学も含めてですけど、学校向けプログラムに対して、どういうことを期待しているんでしょうか。例えば「勾玉や組紐のような」お土産を持って帰りたい」のような具体的なものの、それとも児童・生徒が楽しめたら良いというかんじなのか。話がちよつとおつきいことになってしまってますけど、八田さん自身が、今日の発表の準備される中で、印象でもいいんですが、どんなふうミュージアムが行う学校向けプログラムを捉えているか、または周りの教員の方からどんな風に聞かえてきたかを教えて欲しいんですけど。

◇八田    一言で、純粹に楽しいかどうか、です。

◇永恵    なるほど。

◇八田    今おっしゃったように、学習指導要領というのは、網羅的に、すべてのことを事細かに書いているわけではないので、ぎゅぎゅりした中で、何かができるってなったら、一つは楽しくて印象に残る、思い出に残るようなものが良いかなと。子供たちが楽しいのはもちろんですけど、教

員が見ても面白いと思えるものがあつたら、それを子供たちに下ろしてみようかなとか、一緒に行ってみようかなと思えるので、全然難しく考えなくて、楽しいか楽しくないかぐらいです。

◇永恵 当館でも大中探検隊ですが、先生も必死に解いていらつしやるときがあるんですね。「先生なんでそんな汗たくさんですか」って聞くと、「もう間に合わへんと思って走りながらやってきました」っておっしゃる方とかいらつしやうて。「先生方も楽しいんですね」って訊くと、「いやこれいいですね」っていうふうな声をいただいています。

大中探検隊を作った我々も楽しいわけですよ。作る側・提供する側も楽しいと思って作っています。自分たちの専門に近い話ですから。作っている側は楽しいと思ってますし、教員の方もですね、楽しいと思ってもらえれば、より児童・生徒に学校向けプログラムを通して、近づけるんじゃないのかなというふうに思っています。



### P R 活動の展開の仕方



◇永恵 今ですね、自館のプログラムを先生方にPRするのに、楽しいのを伝えるっていうのがありましたけど、PRするのに手応えがあつた方法があれば教えてくださいという質問、また、先ほど八田さんがおっしゃっていた、98%の人に情報を届けるにはどうしたらいいのかっていうことを教えてくださっている質問がありました。

せっかくですから八田さんに、98%にどうPRしたら良いのかっていうところを聞きたいんですが、(学校側から)聞かないほうがいい? 先に聞いた方がいい? じゃあ、先にわたしから行きましようかね。

ミュージアムとして、プログラムをどうPRするのか、という質問ですね。当館の場合はですね、プログラムは今限られてる中ですが、直接下見や打合せで、こんな内容なんですってお伝えすると、先生方からは、ぐいぐい食いつかれますね。変な言い方ですけど、「クイズラリーをします」「大中探検隊です」だけ書いてあると、何するかわからないですよ。なので、実際にお会いしたときに、こういう内容です、これ面白いですってお伝え

すると、先生方は「面白い」「館内見学で静かにしなくちゃいけない後に、これできたらすぐ児童喜ぶと思います」「みたいな反応が多いので、PRっていう意味では特には当館としてはしてはいないと思いますね。

98%に情報を届けるにはどうしたらいいか、要するに、館側は努力をどうしてるかっていうですね、来ていただいた学校あるいは来てくれそうな学校にアピールをし続けるというようなのが、端的なところなのかなと思っっています。郷さんこの辺はどうですか。

◆郷 はい、えつとですね、先ほどもパンフレットを作って、毎年撒いてるという話をしましたけども、直接届ける以外にですね、あるいは学校に届いてもですね。実は、校長先生で止まったりとかですね。あと学校の先生って、いっぱい郵便物が届くので、紛れて全然気づかなかつたりすることもあるんですね。運よく図工美術の先生の手元に届いたときに開封されるっていうことがあつて。

私が2007年に現美に来てからですね、一つの広報戦略なんだけれども、何とかもう少し学校団体の利用を増やそうと思つてやった取り組みは、まず誰がやってるのかっていう顔見せですね。教育普及に今こういう人がいるんですっていうので、顔をそろえて学校に直接行きました。

東京都の場合は図工の専科がいるというふうにお伝えしましたけれども、区ごとにですね、例えば、現代美術館であれば江東区というところにありますが、江東区の図工の先生たちが集まった会合というのがあるんですね。それは区ごとにあります。それをいつやるかを調べてですね、ちよつとそのときに、10分でも15分でも、5分でもいいので宣伝させていただきますってお願いして、直接我々担当者が行って、パンフレット直接手渡しで配って、「教育普及のものです、こういうものがやりますので、是非来てください」っていうの



3館のパンフレット

を、顔見せてですね、こういうふうになってますっていうのを直接ダイレクトに伝えるということを、可能な限りいろんな区でやりました。

もちろん、先ほどどなたかの質問にもありましたけど、校長会というものもあるんですね。校長会にも出かけて校長会の席で、「現代美術館のもんです、学校団体受け入れやってますので、もうまず管理職のあなたたちがOKをしてくれなかったら先生達出てこれません」っていうことを言ってますね。校長会にもPRをしに行つて、そこを集中的にやっていた時期があるんですね。その成果かわかりませんがやっぱり確実に、利用する学校が増えてるんですよ。

増え続ければですね、先ほどの話じゃないんですけども、来ていただいて楽しかったという子供たちの声が先生たちにとっては、「やっぱり連れてきてよかったな」っていうことに繋がりますので、じゃあ来年も続けていきましようということに繋がりますから、今度来てくれたら、いかに楽しませるかということ、意識してやっています。だからPRとしては、本当にこれは足で稼ぐっていうか、顔見せをしてやるということですね。

たぶん今だとね、SNSですとかそういった口コミでも、いろんなことができるんでしょうけども、やっぱり人と人がやるものですから、人々との顔合わせつてのとても大事じゃないかなというか、すごく力が発揮できるPR方法だと思う、大変ですけどもね。

◇永恵 そういう意味では、こないだ岡山県でやられた、ラップバトルは顔見せとしては抜群ですよ。郷さんずっとやりたいとおっしゃってましたよね。

◆郷 いやいや(笑)

◇永恵 違う?(笑) 小林さんいかがですかね。

◆小林 郷さんがお話したように足で稼ぐ・コミュニケーションするってのは本当大事だと思ってます。

私たちも、以前は校長会・教頭会の方に行つて、お話をするシーンが結構あったんですね。ああいうところって、いろんな方々がお話するので、だいたい3分ぐらいの持ち時間で、3分たつとチンと鳴つて変えられちゃ

うんですけどね。そこで話をしていた中で、やっぱり校長先生・教頭先生で話が止まっちゃつてゐるのかなということをよく感じてました。

最近手応えを感じているのは、理科の先生の集まりである理科主任会では、実際にそこが利用に繋がったっていうケースが結構あります。やっぱり現場の実際の、連れてくる先生方に直接会うシーンっていうのは大切にしていきたいなというふうに考えてます。

あとは、手応えあったのは口コミですね。キヨロロで学習に来て「すごく楽しかった」、「子供たちの学びが深まった、楽しかった」っていう先生は、次年度に学年が変わっても、つれてきてくれるんですよ。さらに言うと、学校が変わっても、次の学校でもつれてきてくれるんですよ。そういうふうに、まず先生方に楽しんでいただく、学びがあったと実感していただくってのはとても大事で、先生が楽しいと子供たちもすごく楽しい印象があるんですよ。

以前に学習の教育旅行のときなんですけれども、インストラクターの方を対象にちよつとアンケートを取ったことがあつて、先生の様子どうでしたかつてのを聞いてたんですね。先生が楽しんで一緒に参加してくれていると、子供たちもとても聞く態度が良いし、インストラクターも(話していることが)伝わつてゐるつてのをすごく実感するつていうのがデータとして見えてきたんですよ。そういう意味では、先生たちに楽しんでいただくつていうところにこだわるつていうのは結構大事なのかなというのは、現場で感じています。

◇永恵 ありがとうございます。

現場で運営されてゐる方のところまで、ちゃんと届くことをしていくつていうのが重要だし、そういった個別の区ごとの会合とかに向かつていくつていうのは、本当に足で稼ぐつていうのが重要だなというところなんです。八田さん、そうすると98%の教員の方にも届きやすくなるんですよか。

◆八田 お話伺つて、やっぱりアプローチし続けることと、そこで繋がつていった一人一人のファンをふやしていくことが一番大切だなと思ひ



ました。

あと今、小林さんがおっしゃった、先生が楽しいっていうので、僕も以前女子生徒に言われたことなんですけど、先生の授業を受けて、内容は全くわからなかったけれど、何か楽しそう、面白かった、ということがありました。教壇で楽しそうに説明しているだけでも、何か引きつけられるようなものがあるんだなと思ったのをちよっと思い出しました。

もう一つが、学校の中でもちよっと課題がある、広がない理由があると感じていて、例えば僕もそうなんですけど学校で博物館を活用した授業をして、結局それが周りの先生から見て、「すごいな」とか、「何かやっているな」で終わるんですね。何かそこから「私もやってみたい」とか「どうやってたかできるんですか」という横の繋がりが学校の中でできない。学校の中でそういうことを積極的にやってくれる先生が、どちらかっていうと何かメインというよりはちよっと外れてるみたい。あの人をやっている、あの人だからできている、で終わっているなっていうところもあって、そこから横にどう広がっていくのかというのが学校の中での課題なのかなと感じています。

◇永恵 今、すごく新鮮な話で、学校側ではそういうことなんです。あの人だからできるっていう、ある種、属人的なところになってくる話なのかなというふうにも思います。



#### プログラムの継続や中断



◇永恵 いま属人的というのは、ミュージアム側も実は考えなきゃいけないテーマなのかなと思っています。事前にいただいている質問の中にですね、職員の退職や異動等に対して、プログラムの継続や中断をどのように対応しているのかというのがきています。

当然我々も、異動っていうこともあるものだと思います。私自身も異動してますので、その中で、プログラムをどう継続するのかあるいはやめるのか、これは異動・退職に限らずですね、プログラム自体の見直しがあると思うんです。見直しとか、点検をどういうふうに実施してるのかって

うとも絡んでくると思うんですが、どういうふうに各館で対応されているのかを聞いてみたいと思います。

当館としてはですね、職員の退職や異動等があっても、できるだけ継続をする形にはしています。ただ当然プログラム作った方がいた段階から、変容があることは、おそらくあります。ただ、その変容があったとしても、その根っこになる部分、「何を伝えたいのか」ということがちゃんと掴めていれば、止めずに続けられているのかなと思います。

現に「土器にふれよう」あるいは「本物の土器にふれよう」は、私が来る前に作られたプログラムです。そのころからは変容しているんですけど、継続をしています。「大中探検隊」もその実、探検隊としてだけ独立したものではなくて、本当は竪穴住居の中で個別の古代体験をしてみらおうっていう企画だったようです。それが、竪穴住居の中は大きいですけど、空間としては狭く密になってしまっているので、クイズラリーに切り換えたところ、好評を博しているところでです。

なので、当館では変容を恐れずにプログラムを続けておりますし、仮に見直しが変容に当たるのであれば、変容を受け入れながら継続しております。もし何か問題があつて中断しなきゃいけなくなった時には、よほどの事情がない限り年度単位で、学校向けのプログラムは変えています。当該年度は、均等なものを提供すべきだと思いますので、年度単位、つまり、もうしばらくすると始まります学校団体向けのご案内のときに何を提供するか決めて、それを実施しています。1年度を対象とした見直し期間をとっています。郷さんいかがでしょうか。

◆郷 プログラムをつくる人間がですね、属人的になりがちっていうのは本当にその通りで、大きな課題だと思います。異動であったり、また退職によつて、その人がいなくなってしまうことで、できなくなるということはあるし、PRのときにちよっとお話ししましたが、やっぱり人と人でやっているの、「私に」っていう依頼も来るんですよ。その場合は、私以外のほかの者ができないのかっていうと、できなくはないんだろうけども、やっぱりそのアイデアを考えたりとかっていうのは、私が考えてい



るので、なかなかそこを同じようなアイデアが出てくるかっていうと、そうはならないんで。もうそこは、なんでしょね、鍛えるとか、教えていくってことはなかなか難しいところですね。もうそこは、個性になってくるので。

ただ、教育普及だけでなく、現代美術館の基本方針があつて、教育普及があつて、そこにやるプログラムっていうか、事業名紹介しましたけどそこは全く変わっていないので、要は、中で、どういう内容のものをやるかっていうところは、各担当によってももちろん変わってますし、また人が変われば、内容も変わってきますので、それはもうしょうがないことかなと思います。やっぱり人がやってる事なんでね。ただ、館としての方針や、やる内容がぶれていないのであれば、そこはもう、いいのかなっていうふうに割り切ってやっています。

ただ私もですね、じゃあ、その教育普及をどこで学んだかっていうのは、先人の、これまでプログラムをやってる方達のやり方とか、他館のプログラムの、やっぱり勉強させていただいてる時期があつたんですね。そこが今の自分を作り上げていますので、今後新しく教育普及に携わろうとしている方だとか、今現場でももちろんやってる方たちもやっぱり、他から学んだりとかですね、自分を更新していくということも重要なかなと思います。

◇永恵 郷さんはそういう意味では、ご専門が教育普及ではなく理学ですね。

◆郷 そうですね。

◇永恵 私は考古学というよりはお城が専門でありますけど、みんなやっぱり、それぞれの専門があつて、いろんなところをまねっこしながら、あるいは聞いたりと、学習しながら進めていってるところなのかなと思います。

今日、せっかくこうやって話ができますので、今日、フォーラムをお聞きの皆様、「連絡先はこちらまで」じゃないですけど、発表者に何か聞きたいことがあつたら連絡してもいいですよ？ あれ聞きたいとかこれ

聞きたいとかそういうのがあつたら。もうね、勤め先はわかってますから、連絡できちゃうわけです。こういう機会をきっかけにして、それぞれで話ができているっていうのは非常に貴重なのかなと思います。小林さんいかがでしょうか。

◆小林 はい。教育プログラムをまわしている学芸スタッフなんですけれども、学芸スタッフの大半はですね、任期がある立場で働いております。もちろん、栄転であるとか退職のタイミングでできなくなったプログラムがどうしてもあります。

今、館で走ってるプログラムとしては、学芸スタッフ誰もある程度のレベルで誰でもできるようなプログラムと、個人の専門性だとか個人のスキルに依存して走っているプログラムがあります。後者の方はどうしてもスタッフの入れ代わりで、できなくなりますね。実際にはゼロになります。

ただ、善し悪しなんですけども、そのかわりに新しいスタッフ入ったときに、新しいプログラムが走り始めますので、利用者の視点に立ったときに、常に、いろんなものを選べる状態がたくさんあるっていうのは、メリツトの一つかなと思います。

「プログラムも変わっている、今度これに参加してみようか」っていうふうな新鮮味っていう意味では当然、そういったところあるかなと思いますね。ですので、誰でもできる対応できるプログラムと、個人のスキルとか知識に依存するプログラムの両方が走っている。後者に関しては、なかなか、継続は難しいシーンがどうしても発生するっていうところかなと思います。

◇永恵 小林さんところめちやくちやプログラムありますよね。

◆小林 そうなんですよー！ 年間150回ぐらい企画しています。私達自身が好きなので、「この日空いてるから入れちゃおうか！」とかね。そんなことは結構フレキシブルに、小さい組織ですので、できちゃうってところもあるんですよ。なので年度途中で、「ちよつとこの日これやってみようか」みたいなところもできちゃったりするところがあるんです。結構、そんな感じで考えてます。

◇永恵    ありがとうございます。当館だと先程言いました「週末の古代体験」という内容の、題名のない音楽会みたいな形で、やるまで誰が何をするかわからないみたいな企画もありますけど、実際そこでやってる内容は面白いものも当然ありますし、属人化してるものもあるので、なかなか簡単に継続していくものがあるのは事実です。

逆に言うと、継続できないプログラムは、それはそこまでの企画になっってしまうんですけど、それはいたし方ないところです。定番鉄板になる企画があればそれは続けていったほうがいいと思いますし、そうでないものについては、いろいろ淘汰されていきます。

今ですね、プログラムがどう変わるかって話をしておりましたけども、学校側からすると、「あれ？前はできたのにできなくなってる」ってやっぱり辛いんですね。

◆八田    つらいですね。やっぱり子供たちの方から、「来年はありますよね？」とか、「今度また行きますよね？」っていうのは面白い企画であれば、当然あるし、もう一つは保護者の方からも「来年もやってくれるとありがたいんですけど」とか意見がいっぱいあるので突然プログラムがなくなったりすると、「困ったな」って言われます。だから学校としては、そういう声があると、なるべく継続したいと思うので、これは博物館だけではなくて、学校もそうだと思いますけど、職員の退職とかがあつても、学校としてはそういう声があつたら、なるべく継続するようにはしたいなという立場ですね。

◇永恵    なるほど。まずは来館を継続していただいて、その中でさらにプログラム、これはいけるというプログラムを、ずっと鉄板を続けていくというのがいいってことですね。

◆八田    はい。そうですね。

◇永恵    本当に教育普及メニューや学校向けプログラムされてる館のどこも考えなきゃいけないことだと思えます。一朝一夕に答えのでもものでもないと思いますが、本当に重要な視点ですし、いろいろなやり方があると思いますので、思考を続けていかなきゃいけないのかなと思います。



#### 都道府県外・市町村外の学校等団体への対応



◇永恵    さて、今までの話の中で、基本的に学校を区別無く等質なものとして扱っていました。実は、今日いただいた質問の中で、県内の学校対応と県外、東京だと都内と都外かもしれないですけど、の対応は、変えたりしたことをしますか。要するに、県内県外で対応を変えたりしてますか、っていう質問がきています。ちょっと美術館はわかりませんが、わからないってのは、作品に県内県外っていうのがいいのか、ということかなんですが。

◆郷    ないないない（笑）ないですよ（笑）

◇永恵    ない？（笑）

この質問は、県外市外からいらつしやる学校や各団体様が多い、キヨロ口さんは特に該当すると思います。

当館では、実はあまり県外の方はいらつしやらないです。いらつしやることもあります。その時には何か変えるかっていうと、そんなことはないですね。基本的には社会科の、考古学からわかる歴史の話をしますし、確かに、県内の学校あるいは展示中の遺跡がある市町であれば、「これどこどこ小学校、君らの学校の校区のものだよ」っていうふうな話はしますけど、基本的に学校を県内県外で形を変えろということはないかなというふうに思ってます。

そういう意味では話す内容が、ちょっとずつ違うっていうのはあるかもしれないですね。例えば、兵庫県だったら、市あるいは都道府県の遺跡だところが該当するよね、と代表的なものに言い換えたりとか、同じものだよって話をするとはあるかとかとは思いますが、基本的にプログラムを変えたりはしないですね。そのあたりいかがでしょうか。小林さん。

◆小林    扱うテーマを変えることはあまりないんですが、紹介するときのやり方で県内の学校さん、県外の学校さんで変えることは、やっぱり県外から学校さんが多いので、あります。例えば、冒頭に紹介したブナという木なんですけれども、日本全国に、45の都道府県に分布しているんですが、



キョロロでのブナの葉の展示

地域ごとで葉っぱの大きさが結構違うんですよ。日本海側の多雪地は結構大きな葉っぱなんですけれども、太平洋側はすごくちっちゃくなるんですよ。関東からくる学校さんが多いですが、一応私の専門でもあるので、ブナが分布するすべての県からブナの葉っぱ集めて、どこの県の学校さん来ても、ブナの話ができるようにしているんですよ。ブナが持つてくる生物多様性について、どの県の学校さんでも対応できるようにしています。実際に森で葉っぱを拾ってもらって、「このぐらいの大きさだよ。じゃあ自分たちの住んでいる県の葉っぱはどうだと思おう？」っていうふうなところから始めて、自分たちの県の生物の特徴と、今来ている場所の生物の特徴を比べるっていうところにつなげていくことはすることがあります。

同様に、生き物を扱いますので、例えば「新潟県ではすでに絶滅しているけれども、君たちの県ではまだ絶滅危惧種なんだよ」っていうふうな話で、生き物の分布の話をしたり、さらに、新潟県は非常に雪がたくさん降る地域ですので、雪が降る地域と降らない地域で暮らしがどう違うのかだとか、「雪があると困ることなんだろうね？」っていうふうな話から、雪に対して、どう暮らしと関係しているのかっていうのを自分の体験とつなぎ合わせて話をしてあげるっていうふうな、伝えることが結構一緒なんですけれども、伝え方とか、そ

こに持つて行き方を変えることは、県外県内で結構あったりしますね。  
◇永恵 キョロロさんに伺ったときにですね、ブナの展示を見て、葉っぱの形の違いつていうのは、こんなにも地域で分かれるのかと、ちよつと感動しましたし、こういう展示の方法があるんだと、とても驚いた記憶がすごく残っています。

歴史系だとちよつと違うのかもしれませんが、考古学の博物館とか、考古系だと当然地域によって土器の形は違います。東北や関東だと土偶が出たり、火焰型の縄文土器があったりしますけど、関西ではあまりそういうものは少ないです。それをモノとしてキョロロさんのブナの葉っぱのようにならぶことは、特別展とか企画展等の展示以外だと、ほぼ無理です。土地に根差したもので移動させられないので、別途買ったとかですね、レプリカ作ったりしなきゃいけないです。

逆にそういったところが自然系だと、たぶん域内を越えてですね、内容を展開できるっていうところがすごいんですし、それが地域を考えるきっかけにできるっていうのが、すごく、すごく面白いと思います。そんな中でですね。県内県外関係ないところではございますけれども、郷さんどうですかこの質問については。

◆郷 現代美術館は東京都の管轄なので、対象としているのは東京都なんです。だからパンフレットの配布も東京都が限界になります。

ただ、来るものに関しては、もう全然、いろんな地域から来ますし、海外からも来ますので、その対応はしているんですけど、基本的な何か変えていることはないですね。昨今この中で、オンラインがとても盛んになってですね、これも新しいツールとしてすごく活用できるなと思っています。これ、つい最近の事例ですけども、京都の芸術系の高校さんがですね、それこそ学習旅行っていうんですか、東京に、現代美術館に現代美術について、いろいろ見て見聞を広げるっていうような授業でやってくるということ、当館でも見学させてくださいというオーダーがありました。そのときに、事前学習として、オンラインで京都の教室と現代美術館をつないで事前学習をしたことがあります。



で、実際に、美術館に来て、またそこでも展覧会のレクチャーをし、今度

実はですね、事後学習が残っているんですね。そのことも、高校の先生からいろいろ相談を受けまして、「こういうことを今考えてるんだけど、どんなことができますかね」というので、事後学習というのは、感想文書いたりということが多いんですけども、今回提案したのはですね、自分たちが見たものを、先ほどの、学習指導要領のマップじゃないんですけど、マインドマップに落としてみたらどうですかと、そうするとデザイン的なスキルも必要ですし、自分の考えの整理もできるし、見たものがマップ化されるので非常にわかりやすくなりますから、そういう活動してみたらどうですかという提案をしたところ、「ぜひやってみたい」ということで、たぶん、事後学習はマインドマップ、見学したもののマインドマップ化したものが発表されるんじゃないかなと思いますね。あとですね、その地域性ということでは多少は意識しました。例えば京都の景観っていうのは条例で定められていて派手派手しさはないですね。非常にモノトーンというか、そのまま町になってますけども。実は私も京都にちょっと行ったときにですね、いろんなファーストフード店の看板とかが全然違ったりもするので、ちょっと驚いて、写真にとって事前学習のときに、実はこれ、僕がちよっと不思議だなと思った風景なんですって紹介して、逆に今度皆さん東京にいらっしゃるので、全然京都と違う町並みの記録をいっぱいとってください、という課題も出しています。たぶん見学施設だけじゃなくて、町中のいろんな、気になったもの、京都と違う風景みたいなものを写真に撮って帰ってるはずなので、そういったものも、次は発表されるんじゃないかなってちよっと期待しています。

そういった意味では地域性をちよっと意識しながら、小林さんと一緒にすよね。どこの地域の方が来るかによつては、話の内容を少し変えたりとか、意識しながらやってるっていうことはあります。

◇永恵 美術だと、ちよっと違うのかなと思ってましたけど、やっぱりアプローチの仕方自体は同じなんですよ。こういったことも、極端な話で言うと、望まれてるかっていうところに対応していく中で、自分たちが

気づいたことをどう展開していけるのかっていうところかと思っています。



#### 出前授業・館外プログラム



◇永恵 ちょうど今、県内県外・市内市外っていう話が出ましたので、今日いただいた質問の中にも、出前授業であるとかの館外プログラムを実施する際の行動範囲についてのものがあります。郷さんであれば都外になるのかもしれませんが、小林さんであれば、市外ですかね。そういった行動半径がどこまであるのか、あるいは逆に出ていけないという質問が、事前にも来てますし、今も聞きましたね。学校向けというか、館外のプログラムの実施の範囲について、お答えいただければと思います。

私どもとしては、まず県内が主体になります。当館自体が県立の施設であるので、まずは県民に対して、県の内部について、何かをするところがありますので、県内というのがまず行動範囲を決める際、あるいは行くときの基準になってきます。

ただ、外部のイベントとかで、お呼ばれるのであれば行きます。古代体験プログラム、これは学校向けではなくて、本当に一般向けのプログラムにはなるんですが、鳥取県の「とっとり弥生の王国 むきばんだフェスタ」にも行きましたし、大阪府高槻市でやった「古墳フェスはにコット」というイベントにも行ってます。ですので、学校団体というところについて言うと、県内が中心にはなってますが、向こう様から依頼があれば、おそらく可能でしょうし、対応できます。ただ、今のところ、お声があまりかかってないというところが現状です。郷さんい



考古博物館が出店した館外イベントのようす



かがでしょうか。

◆ 郷 ずっと再三言ってますけど、東京都の施設ですので、東京都が範囲なんです。なのでアーティストの一日学校訪問はすべて東京都の中です。島も含めてね。

ただ、今言ったみたいにオンラインであれば、繋いで、全然外にもつながることができるので、そこは例外というかな。いわゆる出張費がからないので。全然リクエストがあれば、つないでやっています。アーティストの方はたぶんアーティストに謝金払わなきゃいけない手前ですね、ちよつと枠組みが変わってくるので、アーティストの訪問で外に行くっていうことは難しいと思うんです。呼んでいただけるところが「謝金を用意しますっていう、あと交通費も出します」っていうことであれば、たぶん可能だとは思いますが、ただちよつと、そうなるのとこちらの範囲がどんどん広くなってくるんですね。大変になってくるんで、基本は東京都の中で収めています。

◇ 永恵 小林さんいかがでしょうか。

◆ 小林 はい。普段の授業の中での利用に関しては、やっぱり市内が多いので、基本的にはキヨロロにきていただいての体験がメインなんですけど、たまに教室に来て欲しいとか学校周辺の自然の中で、ガイドとして欲しいという話があったときには行きます。市内もそんなに遠くも、広くないですし、対応できるんです。

たまに市外からそういった話があったときもありますね。例えば、隣の市で珍しい蛇が見つかったんだけど、それをその方からキヨロロに寄贈していただいたんですね。ただ、地域の子供たちにも、そのすばらしさを伝えて欲しいという要望が学校からあって、里帰りして、それを話すっていう機会はありました。

なので、市外に関しては、周辺の自治体ぐらいであれば、実際に私たちが行って授業するってことはあったりします。県外の学校の場合は、ちよつとそこまで行くのはなかなか難しいので、オンラインですね。修学旅行や教育旅行で来る、探求活動で来る事前学習として、オンラインで、この地

域のことを事前に学んでいただくってことは、対応をできる時代になっちゃいましたので、やっています。むしろ、お勧めしています。学びを深めるために事前にこういったことを学んでいくと良いですよとか、こういった視点で見ると面白いよだとか、事前に、ちよつと一言伝えておくだけで、このことねっていうのをフィールドで気づくことができますので、そういったことは、対応してまずし、むしろお勧めしていますね。

◇ 永恵 なるほど。オンラインでの事前学習のお話をいただきました。学校側としても、それがやっぱりと良いものですか？

◆ 八田 そうですね。ありがたいんですけど、その情報がなかなかどうやって入ってくるのかなっていうところですね。県外になるとチラシや、パンフレットも何も届かないので。

たぶん活用先として県外の博物館のホームページとかなかなか開かないかなと思うんですよ。本当に連携しようとする、県をまたぐと思いますけど、口コミが大切になってくるのかなと思うんですが、どうやってしたらいいかなというところは難しいですね。

◇ 永恵 当館ですね、昨年度私が配属されてから、大阪府の歴史系博物館さんから、問い合わせの電話がありました。「大阪府に近い兵庫県の学校さんが当館の利用を計画されているけど、いいの？」っていう内容でした。その時には、「いや、良いも悪いも学校さんが選ばれたんですから仕方ないですよ。本県としては当館のご利用をいただきたいんですけどね」という回答をしました。もしかすると、そういう館ごとのやりとりっていうのも本来必要なかもしれないですね。

もちろん、交通事情等があって、現実にはいけない、行きたいんだけど



向き合う八田氏と永恵

行けない。だから、似たような、似たようなという失礼ですね、類似した館に行く、ミュージアムに行くっていうことがあるのかもしれないです。逆に言うそれは近い遠いも含めてですけど、各館の魅力っていうのが、広がっているっていいことにもなります。今の質問の中身であれば、行動範囲は、基本は市内あるいは県内都内だけでも、このご時節柄で急速に発達・普及した結果、オンラインでの対応は当然できるし、また一方で、依頼があれば行けないこともないというのが、3館での対応かなと思います。

さて、時間もだいぶん過ぎて参りました。今回のフォーラムは2時間を予定しております、4時半までを一応全体の予定としております。今、いただいている質問に対しては、ほぼ答えていたかなと思います。

このコメント良いですね、「勇気づけられるところがありとても参考になります」。ありがとうございます。そう言っていただけですと非常にうれしいです。



#### 児童生徒にプログラムで伝えたいこと



◇永恵 では、時間にも限りがございますので、最後に向けて、テクニク的なところも含めてですが、プログラムを実施する際に、児童・生徒に對して伝えたいこと、そのプログラムや来館を通して、伝えたいことは何なのか、何を重視しているのかということ、またプログラムを実施するにあたって、どんなアプローチをしているのかということについて答えていきたいと想います。ちなみに、この質問は事前にいただいた質問ですが、すごく深い質問だなと思って最後まで取っていました。この質問に答えながら、トークセッションを閉じていきたいと考えております。

まず、当館の場合、伝えたいことっていうのは、本当にいろいろあります。ただ、少なくともですね、社会科に関しては暗記だとおっしゃる先生がまだまだ沢山いらっしゃいます。歴史の学習は暗記だけではなくて、モノを見て、観察して、どういう特性・特徴があるのかを把握することが重要です。考古学であれば、土器や石器など出てきた物ですし、これが歴史系

であれば、古文書に書かれている内容や質感だったりとかですし、そういった個別のモノが持っている、本物が持っている本質を、ちゃんと観察して、読み解く・読み解ける力、学習指導要領でいう「社会的な物の見方・考え方」になるのかもしれないですが、を養えるようなプログラムができればいいのかなと考えています。社会科であっても、観察をして読み解くことが必要だということを伝えたいです。また、プログラムをする上で、やはり言葉一つとっても、簡単な言葉や平易な言葉を使うようにしています。学術語に近い言葉をできる限り使わない、例えば埋蔵文化財と言わずに遺跡と言う。そういうところを気をつけてアプローチをしています。もっとテクニクでいくと、児童生徒を飽きさせないっていうことですね。何か面白いネタ押し込んでいって児童・生徒たちが飽きないようにしていく、というのが大事なのかな。これは私自身がやっていく中で思っているところです。

順番的にいくと郷さんに行きますけど、これ後ろになればなるほどどんどんきつくなりますけど、皆さん、大丈夫ですかね。今言っておきたいとか、大丈夫ですかね。

◆郷 伝えたいことはもう再三言ってますけど、当館は現代美術館なので、現代美術の魅力っていうものをいかに伝えていくかということと、八田さんの言うですね、その地域性ということでは、地域の学校の子供たちにとっては自分たちの地域にこういう美術館があるんだという存在を知ってもらおうということと、また大きな美術っていう括りにすると、美術って何なのかという、そういうことも例えば出張に行ったり、来てもらう時に伝えるということは心がけています。ある作品ですね、作家のこういうことを伝えたいんだとか、1個1個の個々の作品について解説したいんだっていうことは、もちろんそれは現場で話の中で出てきますけれども、それが主眼ではなくて、やはり美術っていうものの存在ですよ。何でもかき集めるのが世の中にあるのかということを伝えたい、ということが大きな、これはもう本当に美術館どこもそうだと思いますけども、一つのミッションだと思っています。

◇永恵 それでは、小林さん、いかがでしょうか。

◆小林 博物館ではいろんな展示物とか体験を提供している中で、自然を見るための知識とかを学ぶ場所ではあるんですけども、私たちはその知識を教えているというよりは、その自然の見方とか考え方とかとらえ方の部分を、体験を通して学んでいって欲しいなと考えてます。

これから、子供たちが持続可能な社会の担い手になっていく中で、自分なりに、自然とか地域をどういうふうに考えて、自分なりの答えを出せるかどうかということとは、とても大事になってくると思うんですね。なので、その答えを教えるって役割もあるんですが、その答えの導き方とか考え方ってところが博物館で学べるんだ、博物館が、そういった自分たちの成長に、有機的に繋がる、そういうハブになるんだなっていうところですね。ぜひ体験していただきたいし、持って帰っていただきたいなと思っています。

◇永恵 ありがとうございます。今ですね、ミュージアム側からの、どういうふうなことを大事にしていくなかという見解ですね、あるいはアプローチの方法について話をいただきました。

八田さん。大丈夫、八田さんにも回ってくるよ。今までの話を受けた中で、今日はあくまでミュージアム側の話が多かったかと思うんですが、学校側から、すべてを代表できないと思うんですけども、これから八田さん自身もプログラム、来館や博学連携っていう中で、ミュージアムとの関わりを持っていかれるし、持ち続けていただけるというふうに思うんですが、逆にこの博物館に期待していることや、ミュージアムはこうあって欲しいなっていうところを教えてくださいなと思います。

◆八田 そうですね。一つは開かれた施設であって欲しいなっていうのはあります。どちらかというと、連携先としては、今は意識してない先生方が多いので、実態がどうかは別として、たぶん連携先とはまだ考えられないと思います。なのでまずは常に開かれている施設であって欲しいなというふうに思っています。

また、先ほどあった、子供たちに対して何をどうアプローチすればいい

のかとか、どう伝えたいか、みたいところで言うと、僕たちとしては学校だけが学びの場じゃないっていうのは子供たちに伝えたいなというふうに思っています。学校だけが学びの場じゃないし、学校だけが子供たちの居場所でもないし、博物館が好きだったら、博物館にずっといるような子がいてもいいと思うんです。その時に例えば博物館が開かれていなかったり、ここはそういう場じゃないよとかだったら、それはちよつと違うなと思っています。僕たちは、学校だけが居場所じゃないから、地域に出ていんだよと。むしろ地域に出て、いろんなことを学ぶっていうのも一つの方法だよっていうのをずっと伝えていこうと思うので、その時に優しく受け入れてくれるような包容力というか、授業の場であつたりして欲しいなっていうのを、博物館に期待しています。

◇永恵 すぐぐざくつとした振り方だったので、申し訳ないなと思いつながら、八田さんにはお答えいただきました。今日、八田さんのお話の中でも地域総がかりという話もあつたかと思います。これ本当に、地域や地域性に由来するミュージアムであれば、まさに地域総がかりってのはその通りだと思います。また、地域に由来しない場合であっても同様だと思います。地域のとらえ方って、おそらく人によって違うんだと思いますが、日本語では、どうしても地域という言葉って、住んでいる場所といった面的なものに収斂されがちですけど、生活する周辺のすべてのモノやコトといった、現在の住んでいる環境全てを、地域と捉えるのであれば、現代美術も地域を構成する一つですよ。地域を支える一助に、ミュージアムがなっていければ、総掛かりの取り組みの中で、将来の学芸員であつたり、サポーターっていうのの生み出していけるのかなと思います。

時刻がちょうど16時30分を超えました。今日いただいた質問を中心にトークセッションをさせていただきました。基本的にはこれで全てお答えできました。

本日に今日は活発な、チャットがこんなに盛り上がると思ってませんでした。運営していく上では、やってよかったなと思ってますし、また、今日のこのトークセッションを、報告書できつちりと文章化して、皆様と共



有であるような形、あるいは今日残念ながらご参加できなかった方、にも  
です、ご紹介できるような形にしていきたいと思っています。ですので、  
これまでも、これから、今日皆さん再三言いますが、今日から皆さんは  
もう知り合いですし、どこの所属かもわかりますので、困ったことや聞きた  
いことがありましたら、個別にご連絡いただければいいのかなと思っています。

それでは、ここでトークセッションを閉じたいと思います。

閉会挨拶としまして、当館の副館長の前川浩子よりご挨拶申し上げます。



閉会あいさつ



◆前川 閉会に当たりまして、一言ごあいさつを申し上げます。本日は  
ご多忙のところ長時間にわたり、本フォーラムにご参加をいただき、あり  
がとうございました。チャットの方にもたくさんのご意見やご質問をお寄  
せいただきました。積極的に活発に参加いただきましたことを大変うれし  
く思っております。

今回のフォーラムは、ミュージアムと学校向けプログラムというテーマ  
で開催させていただきました。当館では平成19年の開館以来15年間、学習  
支援課を初めとしまして、館全体で、学校団体、とりわけ小学校児童対象  
に、試行錯誤しながら、プログラムを開発、展開して参りました。そんな  
中で、今日は、学校対応に日々悩んで苦労している担当の永恵のほうから、  
「ぜひ、このテーマでやりたいんだ」という強い思いがありまして、このテ  
ーマを決めさせていただいたところです。

ご参加の皆様におかれましても、それぞれの職場で苦心されながら、様々  
な取り組みを実施されていることと思います。本日は、考古博だけではな  
く、自然系博物館と美術館といった分野の異なるミュージアムで活躍の  
郷様や小林様に、また、今後、一層その重要性が高まってくると思われま  
す探究の授業を実践されている八田様に、ご発表いただきました。学校向  
けプログラムについての開発のヒントや実践例など多くの知見を得ること  
ができたと思います。

これからも来館される児童生徒の皆さんに、よりよい学びを提供できる  
ように努めて参りたいと思っております。お話の中にもありましたように、  
まずは子供たちが楽しい、そして学校の先生方にも楽しいと思っていただ  
ける、それから、それを作っていく、対応していく学芸員も楽しいと思っ  
ていける、そんなことを大切にしながら取り組んでいきたいと思っていま  
す。ご参加いただいた皆様もそれぞれの施設等で特色を生かした学校向け  
プログラムを提供されるに当たりまして、本日のフォーラムの成果をご活  
用いただければと思います。

本日の発表者の皆様には、今後ともご連絡をとらせていただいてよいとご  
快諾をいただきましたので、またご質問や、ご相談がありましたら、ご連  
絡を取っていただければと思います。また、ご参加の館同士でもいろいろ  
情報共有・情報交換していただけたらと思います。

最後になりましたが、発表者の皆様、それから、開催に当たりまして、  
ご協力いただきました関係者の皆様に心から感謝申し上げます。簡単で  
はございますが、閉会のごあいさつとさせていただきます。どうもありが  
とうございました。

◆和田 どうもありがとうございました。



みなさま、いつかどこかでお会いしましょう



◇永恵 これをもちまして古代体験研究フォーラム2022ミュージア  
ムと学校向けプログラムの全メニューが終了いたしました。皆様、ありが  
とうございました。

繰り返しになりますが、今日の内容は年度末に予定しております報告書  
で個々の発表、そしてトークセッションについて、まとめたものを公開す  
る予定です。今日の発表だけでなく、報告書も併せて活用いただければと  
思っています。本日は本当にありがとうございました。みなさま、いつか  
どこかでお会いしましょう。





古代体験研究フォーラム 2022  
「ミュージアムと学校向けプログラム」  
事業実施報告書



発 行 日 令和5年3月31日発行

編集・発行 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡大中1-1-1

電話 079-437-5589

---

---

